慶應義塾大学　２０２３年度　卒業プロジェクト　総合政策学部四年　71905804　成田凜

虹式飜訳（へぇせん うぅせん いき かえり）

ウイグル現代詩飜訳を通じた
〈記憶と想像の聞き書き文学〉

へぇえせん、うぅせん、いきかえり
舟のみあげるゆら遊星の糸屑砂雨がふりそそぐ
憶い想って詩集を飜り、聞き書きてあるじめっ訳せたら
地上に虹が帰郷する

目次

第1詩 アワズスィズ ティル Awazsiz til …… 6
第2詩 カラワン カスィディス Karwan qesidisi …… 18
第3詩 オゥステン ナフシスィ Östeng Naxshisi …… 42
第4詩 アナ ティリム Ana tilim …… 58
第5詩 ムケッディメ Muqeddime …… 78
第0詩 東京凜式 Tokyo Rinical …… 80
再び、第5詩 ムケッディメ Muqeddime …… 104
翻ラク序 Muqeddime …… 130
第6詩 終わり Tamam …… 132
参考文献、影響を受けた作品 …… 149
あとがき …… 156

虹式飜訳

へぇえせん うぅせん いき かえり

Hesen-hüsen Terhune

へぇえせん　うぅせん　てぁるじめっ

هەسەن-هۆسەن تەرجمە

その日、東京の夜にも雪がしんしんと降りおちました。
雪のひかりと交差点の青信号に混じって
月明かりは銀色に光っていました。
哀しげに光っていました。

その銀光に混じって
聞こえた泣き声
あれはなにかと子どもが問うので
耳をすますと
あなたの声にも似ている
あなたの言葉によく似ているのは
あなたがまだ幼くて地球の何も知らなかった頃に
あなたに話しかけつづけた
わたしたちの友人がいて

その人は海の向こうにすんでいるので
海のこちらの言葉は話せないから
涙を流して
湖に流して
河に流して
わたしたちに呼びかける
その涙が
砂漠を越えて
海を越えて
月明かりを伝って
こちらへと届くので
わたしたちの耳元には
ひとしずくの静寂が聞こえてくるのですよ

夜はさよさよと笑う
眠ってすよ、ひとつ土々に
風はポプラの樹々から
ことのないもだかりを奪い
誰からるのかりを夜は
眠りの眠りこうを
て銀の星を胸に浮かべ
ら、ぐっすり眠ってしまった

第1詩　アワズスィズ ティル Awazsiz til

夜はさよさよと笑うのですよ、
ひとは土に眠り、ポプラの樹々は風に眠るのだから、
夜は、誰からも眠りを奪うことのないように、
金銀の星星を胸に浮かべて、たやらかに揺らして、
金の砂を降らせ、金の山をつくり、銀の雪を降らせ、銀の水をつくり、
うるおしてあまい街にひとやポプラや葡萄や杏を住まわせ、
夜に眠り、朝に覚めるようにと、やすらかに笑うのです。

一九九五年　冬　ウルムチ　『アワズスィズ ティル』

ウルムチの秋は短い。九月の頃、灰色の木枯らしが乳白色の土壁をざらざらと鳴らして通り過ぎ、ひとびとはそろそろ衣を替えようかと家へ帰っていく。濃緑から薄黄へと、ポプラの並木道は色を鮮やかに失っていき、街全体がクリーム色の夕暮れに染まる。一ヶ月もすれば、マイナス二十三度の寒気が、山脈を越えて、ここジュンガル盆地の大きな窪地に溜まるだろう。

ئېسىمدىكى شۇ بىر تۈپ دەرەخ،
بەلكى تونۇيدۇ سوغۇق كەچكۈزنى.
قارادىن يىراق تىترەپ بۇ زاۋال،
سۇ ئاستىغا چۆكمەكتە ئۇنى.

سايىسىنى تاشلاپ چۈشۈمگە
قورۇنماقتا تاشنىڭ دۈمبىسى
مۇھەببەتتىن ئۈستۈمدە چاپان
ھاراربتى قەلبىمگە نېسى.

瞼も凍りそうな朝には、アクテレクたちの話し声が聞こえてくる
　手と足と　散る散る　黄色いポプラ　風ぜ風ぜ　沙ぁ沙ぁ　土へ行こう
声が聞こえてきて、葉が落ちるのがわかって、冬と目が合った
あの葉はどこへ行くのだろう
話し声が聞こえる
愛するひとは遠い国
目覚めて土の白い部屋に、きみはいない
砂め冷めてひどく冷めて骨の底
胸の底がこんなに冷めて
なにをそんなにさみしがるのか

「詩のタイトル『アワズスィズ ティル ئاۋازسىز تىل』は、声にしない言語、言わない、見えない言語という意味です。さみしいという気持ち、わたしの美しい言語を誰が理解してくれるのでしょうか、という意味です。この人は、言語学者で哲学者で詩人ですから、美しい言語を書きますね。わたしだってこんなに美しい言葉を書くのに、日本語を学びに金沢へ留学してしまう恋人のことをさみしく思ったんですね。愛の言葉よりも、言語の専門を話すようになったことをかなしんだんです。わたしが夫と出会ったのは春でした。春は、いろんな生き物の声が聞こえる季節ですね。でも、そんな季節でも、夫と少し離れるだけで、わたしの胸の中はとても冷たくなりました。どんな詩を読んでも心に入ってこない、これはなんなんだろう、そう思っていました。だからわたし、このひとのこの詩がよくわかりますね。ああ、今読んでみたら、もっとわかる。」

十月頃、冬が訪れる。アクテレク（ポプラ）の葉が落ちる音で、ひとびとは冬の到来を知る。東京には四季が巡るが、北緯にして八度高い（おおよそ札幌と同じくらいの緯度）ウルムチには、夏と冬が交互に巡る。そういえば、この間、アイヌ語を大学で習ったときにも、サク（夏）とマタ（冬）が繰り返すというようなことを聞いたなと思い返す。

چاڭچۇن دېگەن بەكمۇ يىراق جاي
بارالمايدۇ مەن تىنغان ھاۋا
ھەر ئويغانسام روجەكتە كۆزۈم
تالا قارا، ئۆيمۇ قارا.

ياپون تىلى ئىچىدۇ ئاستا
كۆزلەر تامان ئاققان رېڭمنى
كىم ئۆگىنەر مېنىڭ تىلىمنى
سۈرۈشتۈرسە مەنمۇ بىر لوغەت.

1995-يىلى، ئۈرۈمچى
(ئايالىمغا)

遠い遠い日本へと　飛行機にわたしのことも乗せて連れて行って
連れて行かないで　ここへいて

「『日本の学校で日本語を話していたら、きみはきっと、心も日本になってしまうだろう』と言っているんですよ。それがさみしい。だから、彼は、こう続けるんです。」

きみが話す言葉がきみになっていく
ふたりで話す愛があるのに
きみは異国の言葉を話す
わたしの言葉をきみは聴けない
わたしだけが辞書なんだから

二〇二三年六月三日　十四時　新宿

「この人の詩は、十人が読めば十通りの読み方ができる詩ですよ。難しい詩ですけれども、はっきりと書くのではなくて、一つの言葉に色んな意味を込めて書いているから、誰が読むか、いつ読むかで変わります。リンチャンがウイグル語でこれを読んだら、また全然違うように思うと思いますよ。」

「わたしが、リンチャンにたくさん説明します。ウイグルのことたくさん知ってもらって、心をウイグル人にして、ウイグルに行ったことがなくても、ウイグルにいるような気持ちになってもらいます。そうしないと詩を訳せませんから。リンチャンの詩はとても素晴らしいから、一緒に知って、一緒に作っていきましょう。」

ウルムチ地窩堡（ちかほう）国際空港を一歩出れば、から乾いた熱気が服の隙間から入

り込んでくる。一方で景色は日本でも見たような大都会で、NHKのドキュメンタリー特集『シルクロード』に憧れてしまった日本人留学生の目は、あからさまに三角形に縮む。

「え〜、サリーナ、砂漠はどこなのよ?」

京都大学大学院に来た留学生サリナの提案で、日本人大学院生の一行は、夏休みにウイグル観光ツアーを組むことにした。薄手のシャツ、裾の広がったパンツ、皮の靴で、人生初の砂漠の国へ降り立った彼らは、現地のひとびとのモダンな格好の中で、浮き足だった観光客そのものだった。近年、中国政府の人口施策で、新疆ウイグル自治区最大の都市ウルムチにはマンションが増築されている。もともと、ウルムチは夏には三十度、冬にはマイナス三十度と寒暖の激しい土地で、土で作られた伝統的な一軒家がひとびとの体温を守っていた。年間降水量はわずか297mm（東京の年間降水量は1590mmである）で、彼らは、山の雪解け水を井戸から汲み上げることで、飲み水や生活用水に利用しているのだった。そのため、マンションの高層部に水を汲み上げるのは日本に比べれば大変なことで、マンション生活では水道が止まってしまうことも多かったという。

夏。アクテレクは青々と空に葉を伸ばし、ときたま風に揺れては、道路沿いの石造りの家のシルクのカーテンにやわらかい木漏れ日を落とす。サリナはアクテレクの並木道を見ると、ウルムチに帰ってきたことを実感する。胸の奥が、じゅわっと、燃える。アクテレクの幹は、いまはまだ焦げ茶色をしているが、冬になれば真っ白に変わり、葉っぱも真っ黄色に色づいた後に落ちていくのだ。白い石の家、青い文様の壁、灰色の土の道に黄色の木の葉がざわざわと落ちて積もっていく様子は、地球が終わるのではないかと感じさせるような、おそろしくもやさしい故郷の風景だった。

「トルファンに行きましょう。みなさんの見たい砂漠がありますよ。」

二〇一三年六月四日　十六時　調布

・豆工房　調布深大寺店で買った珈琲「マンデリン」を飲みながら、昨日のサリナさんとの会話を書き起こしていく。サリナさんは、いつも熱いコーヒーを飲む。昨日も新宿南口のカフェ　Cafficeでカフェラテを頼んでいた。わたしは、詩を書くときには、わたしの魂の状態をその詩のポエジーにしないと上手く書けない。昨日は珈琲を飲んで話をしたから、今日も珈琲を飲んで昨日のことを思い出す。

・詩の飜訳をしようと、わたしとサリナさんは新宿に集まった。

サリナさんが詩を読み、解釈して訳したり、連想して故郷や人生を語る。わたしはそれを聞いて、サリナさんごと詩を飜訳していく。

・時代と私的な都合によって、考えや出来事を直接的に書ききれなかった部分は、かなり詩的に……比喩的に書いた。読み手にとっては、なんとなく詩っぽくて読みにくい、意味が直接的ではないからわかりにくい、と思えてしまうかもしれないが、どうか、じっくりと読んでみてほしい。

・四年前に買ったわたしのMacBook Airは、詩作には欠かせない愛用の道具である。昨日もカフェでこのMacBookを広げて、サリナさんの話を聞きながら、メモや詩の試作をしていた。詩を作るときの頭の使い方と、話を聞いているときの頭の使い方はかなり異なる気がする。わたしが二人いて、片方はサリナさんの話に頷き、もう片方は宇宙のどこかでほわほわと詩を書いている。

・今回、飜訳に用いたのは、アブドゥカディリ・ジャラリディンの『コイゲン デンギズ Köygen Déngiz（燃える海）』から、『アワズスィズ ティル（声にしない言語）』。

・このように、わたしがこの文章をどのように執筆したのかをここに示していくことにする。昨年、小熊英二先生の研究会[1]で読んだ本、ロイック・ヴァカン『BODY & SOUL』に習って。

・聞き書きの手法は、わたしの愛読書、石牟礼道子『苦海浄土』に影響を受けている。石牟礼はひとびとの語りを書く際に、聞き書きではなく、想像書きを行うこともあった（林宜蓁『石牟礼道子『苦海浄土』刊行史および評価の変遷』2021）。例えば、その人とは一回しか会わなかったというのに、あたかも三ヶ月通ったかのように、その人の魂の部分を想像して語りを補って書くようなことをしたという。石牟礼曰く、「だって魂はそう言ってたんだもん」。たしかに、うまく言葉を話せなくとも、心がなにかを強く語ることはありうる。日本語でウイグルを語る以上、表しきれないウイグルのポエジーやサリナさんの魂の底が存在する。書き手であると同時に聴き手であるわたしは、サリナさんの言葉の外にも、サリナさんの語りを見つけなければ、異境の景色に至れない。サリナさんには「嘘や勘違いでもかまわないから、気にせずに自由に語って欲しい」と伝えている。そもそも人は言い間違える生き物だからだ。

二〇二三年六月三日　十五時　新宿

ウルムチから南へ183km、天山山脈を超えて、一行はトルファンへと向かった。車から降りて、息を吸い込むやいなや、乾燥した焦熱の空気が鼻の裏を焼く。鼻の粘膜は即座にぴりりと皹割れて、血が滲みだす。

「うわ、鼻血が……」

熱すぎる、灼かれている。細胞のひとつひとつがきぃきぃと音を立てて収縮していくような、眩しい痛みを感じる。

顔を覆ってください
恥ずかしいからではなく
陽ざしに見つめられて
そのまま輝き果てて
あなたも陽ざしになってしまったら
わたしはあなたをどこに見つけられるでしょうか
顔を覆ってみせてください
その織りの隙間から
わたしを見つめてみてください

灼熱の道路を抜け、街に少し入ってみると、ところどころに緑が増えた。ポプラの木は寒暖差に強く、オアシスのようにウイグルの至る所に生えているんだと、これもサリナが話して聞かせてくれる。雪解け水はひとびとを潤すだけでなく、ポプラや葡萄、メロンといった植物も育ててくれる。まばゆい大きな太陽の光と地下に広がる冷たい雪解け水のコントラストが、鮮明な味わいの果実を作り上げるのだという。

「リンチャン、聞いてください。火焔山ではね、鉄のカップと卵を持っていくといいですよ。鉄のカップにミネラルウォーターを入れて、ちょっと散歩をして、帰ってきたら沸いてますね。そこに卵を入れるんです。そしたら……？」

「ゆで卵になるんですか？」

「そうです！　さらに、近くにある石の上に、卵を割ってみると、石は熱くなってますから、焼き卵になります。面白いでしょう？」

縦皺の褐色山脈の麓に、山のかけらたちが点点と転がっている。その一つの石の上に目玉焼きがある、絵本のような光景だと思う。石の前に屈んで、ほふほふと食べてみる、少しだけ鉄の味がする気がした。ぢぢっと、目玉焼きの白身が揺らぐ。それにしても革の靴を履いてきたのは間違いだったかも

しれない。蒸れるというよりも、電子レンジの中にいるような……　電子レンジの中にいたことはないが……　そういう感覚がある。

再び街に戻り、緑に覆われた庭のなかでひと休憩をする。トルファンにいると、喉が渇いて仕方が無い。もしかしたら、一日に三リットルは水を飲んだって足りないのかもしれない。わたしたちも地下水を飲み、レンガの並びを惚(ぼう)っと眺める。

「このスイカを持っていき、おいしいよぉ」

シルクで織られた虹色のエトレスの服を着た女の子が、スイカを持ってきてくれた。無料でくれるらしい。「レフメッド!」と会釈すると、にこにこと笑いかけてくれた。

「サリナさん、虹はウイグルではどういう色なんですか?」

「虹はウイグルではとても美しい、綺麗、うれしい、そういう色ですよ。砂漠は雨が降らないですね。でも、たまーに降ったらきれいな虹が出る。虹が出るのは雨のあとなので、雨が降らないウイグルにとっては、雨はものすごく貴重ですから、そのあとに出てくる虹がよりいっそう美しく感じられるんです。みんな心おだやかになって、嬉しくなる。」

スイカはとてもみずみずしかった。スイカジュースといってもよいくらいだ。日本のスイカよりも大きいかもしれない。地下の水をたっぷり吸い上げて育つからだろうか。しゃくしゃくと頬張ると、口の端からスイカの汁が顎を伝って喉にも垂れてしまう。日本にも「瓜の化粧水」という商品があるくらいなんだから、スイカの汁は保湿にも効くかもしれないと、拭わずにそのまま垂らしておく。

「リンチャン、そこで日本人のみなさんとわたしは、スイカをタダでもらいましたけれども、トルファンでは葡萄も有名ですね。家の庭や道路沿い、畑などに葡萄がたくさんあるんですよ。ウイグルでは冷たい水と熱い太陽があるから、すべての果物、甘くなるんですよ。隣のハミ市ではメロンが育ちますね。さらにその隣のコォルラでは梨が有名ですよ。」

「家にも公園にも畑にも梨があるんですよ。ウイグルではね、『梨が有名ですよ』というときは、その街ぜんぶが梨ばっかりということなんですよ。梨の街コォルラに入れば、右を見ても左を見ても梨です。街を歩けば梨の香りがしてきて、梨の風に包まれるんです。みなさん一軒家に住んでいますから、梨の木をね、みなさん持っています。それでいつでも梨をもいで食べたりするんですよ。さらに西に向かって行きますと、クチャは杏の街ですね。アクスはカボチャの街です。アクシュはザクロの街です。リンチャン、ザクロ好

きなんですか？　いいですね。カシュガルは、カシュガルは有名な街ですけれども、いちじくの街です。」

梨のアーチをくぐり抜けて、杏の並木道の木漏れ陽が降りそそぐシルクロードを、太陽を左手に歩んでいく。街を踏みしめるたびに、灰砂の粒粒が道ばたに飛んで影溜まりをつくる。砂のにじる音が鳴り、ひとびとは瑞々しい午の匂いを撒き散らしていた。サリナはふと、通りの先に視線をあげた。杏の樹が火焔のごとく、たやらいだ。不意に心が揺れた。砂子が火の粉のように舞い上がり、西風に乗って、そのまま未来へと飛び去った。

一九九七年　コォルラ　見聞

も、も、もし、もし、もし、もし、夜に、夜に風がとまって、

とまって、ぎょろりと目をあけたら

めのなか　めのなか、めの、めのなかに、砂子、砂子、入っていて

も、もえ、もえはじめていて、もえはじめていて、砂子、めのなかで

もえはじめていて、そのもえさしが、はじけて、めから弾けて、夜の

おふとんから落ちて、窓の外、ぎょろりとみると、どのいえも、どの

いえも、どのいえも、もえはじめていて、わたしの眼の中で燃えている

のかと思ったけれども、どうしようもなく、家は燃えていて、ある

いは、それが見間違いだったとしても、朝起きたら、おふとんからでて、庭へとでて、道路を見て、目を開けると、そこには知らないお城がいて、お城みたいな怪物がいて、大きな怪物がいて、大きな怪物の中で赤血球みたいな赤い細胞たちがずっと行き来していて、大きな怪物も、その赤血球たちもぜんぶぜんぶこちらをぎょろりと睨んでいて、睨んでいて！　その目からその窓という窓から炎が燃えだしていて、その炎がやっぱり突然落ちてきて、わたしの大好きな、わたしの梨の木に、その炎が落ちてきて、枝先から順に、梨の木は燃えていくから、あとに残るのは、梨だった灰子、梨だった東風、葡萄だった西風、杏だった北風。南風。東風。東風。東風はいつしか土煙の高楼になってしまったから、だから、もう夜は風に吹かれない。やさしく吹かれない。だからもう夜は笑わない。笑いません。その日から。その日からはもう笑いませんでした。

果物街道を過ぎて、さらに北へ北へと進むと、グルジャという街に出る。中国名は伊犁。この町はりんごの産地として知られている。また、ロシアと国境を接しており、ある建物では、ドア一枚を隔てて二国が隣り合っている、というくらい近接してロシアがあるのだった。グルジャの近く、アルタイには金と銀の山がある。この金鉱山と銀鉱山は掘り出して見つけたものではなく、もともと昔から地域にある山であった。

金山　銀山　宝の山に
金獅子　銀獅子　とつぜんあらわれ
やってきたひと　とって食う
ぼッぼッぼッぼッ　とって食う　とって食う
金獅子　銀獅子　鼻がいいから
黒油アリ白気アリ富国アリと
コンピューターで演算して
ぼッぼッぼッぼッ　並んであらわれ
強くなりたいと　とって食う
金山　銀山　宝の山は
いまだけ突然獅子のもの
獅子コンピューターに管理され
もはや誰にも近寄れない

二〇二三年　六月五日　十五時　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
メディアセンター三階

昼下がりの談話室に、シェードカーテン柄の影が差す。パソコンのキーボードを叩く音に混じって、半開きの小窓では酸素濃度が薄くなるからか、おだやかな眠気が漂っている。談話室は縦二メートル横四メートルほどの透明なパーテーションで区切られていて、隣のブースからは中国語と英語でオンライン会議をしている声が聞こえてくる。今日はわたしはこの部屋で執筆をすることにした。蘇州出身の留学生と、母親が中国人だという同学年の友人と一緒に、たわいもない話をする。

「そういえば、中国では、民族ごとの歴史は習うの？　日本では、歴史の教科書はこんなにページ数があるのに、アイヌのページや琉球のページはそれぞれ一ページずつしかなかったような気がするよ。」

「ああ、そうですね……　中国では、たくさんの民族がいますから、民族ごとの歴史というのは習いませんね。いま、中国では漢民族が多いですから、漢民族のことを習います。わたしは理系ですから、政治や経済についてはあまり知りませんけれども、漢民族の言葉だとか、漢民族の歴史みたいなものは、習いましたね。わたしは蘇州の方言を話せますし、おじいさんたちと話すときは方言を使いますが、普段は標準語を使います。りんさんは、東京でずっと育ったので、標準語を話すんですね。関西弁とかはわかるんですか？」

「関西弁だったら、聞いたら意味はわかると思うよ。でも、琉球語やアイヌ語、うーん、実際に聞いたことはないんだけど、薩摩弁や青森弁なんかは、全然わからないと思う。」

「そうなんですね。中国語でも色んな言葉や文字があって、他の民族の言葉は全然分かりません。日本は、伝統文化を政府が守っていますよね。けれども、中国では、あんまりそれはしないです。民族が多過ぎるですから。それぞれの民族が自分たちで自分の文化を守っているように思います。」

ここメディアセンター三階、談話室前には近代以降の中国史関連本がずらっと並ぶ棚がある。故宮、台湾、天安門、モンゴル、蒋介石、毛沢東、チベット、東亜、……　湘南藤沢キャンパスには多くの中国からの留学生がいて、わたしが所属する小熊英二研究会にも五人ほどの学生が来ている。わたしは大学入試で日本史を選択したが、よく考えてみれば、「中国の歴史」については知っているようであまり知らないなと思う。高校生の頃に漢文で習った漢詩に惚れて、高校の先生の専攻であった江馬細香や梁川紅蘭の漢詩を教えてもらった。御茶ノ水の駿台に通っていた頃には、一日十八時間の受験勉強の合間に神保町の古本屋へと足繁く通い、漢文らしき古本を漁っては、見よう見まねで漢文を作っていた。大学へ入学して、一年の秋学期に、ふと思い立って中国語の基礎クラスを履修した。漢字が読めることのアドバンテージがあったからか、中国語を学ぶのは意外と楽で、英語よりも身につきやすいなと思った覚えがある。そういえば、中国語の教科書の第十四課、十五課辺りで、主人公たちが吐魯番（トルファン）や烏魯木斉（ウルムチ）に旅行しにいく下りがあった。たしか、ハミ瓜を食べすぎて下痢になったというような話だった。そこでは無邪気な多民族国家が語られる。先日の同窓会でも、高校の友人は、日本はそれに比べて単一民族国家だから紛争もなくて平和でよかったと言っていた。午後六時の眩しい西日がシェードの隙間から差し込んでくる。太陽に透かされて、わたしの黒髪が赤金色に煌めく。

夜はさよさよと笑うのですよ、
ひとは土に眠り、ポプラの樹々は風に眠るのだから、
夜は、誰からも眠りを奪うことのないように、
金銀の星星を胸に浮かべて、たやらかに揺らして、
金の砂を降らせ、金の山をつくり、銀の雪を降らせ、銀の水をつくり、
うるおしてあまい街にひとやポプラや葡萄や杏を住まわせ、
夜に眠り、朝に覚めるようにと、やすらかに笑うのです。

1　小熊英二先生の研究会は、木曜3限が文献輪読の研究会、4限が卒業論文の指導の研究会という構成になっている。取り扱う文献は学期ごとにテーマが定められており、これまでの3年間6学期では以下のテーマを扱った。①哲学の古典を読む　②「いまどき」の社会学　③マルクスの古典を読む　④「質的調査」の社会学　⑤「ジェンダー・レジーム」と「量的研究」　⑥「質的調査」の理論

十十銀稿は月の光に
揺るえばめ
壁るれく
るるの本たら
棚気れ
青にがて
布風しだ
のしが
揺てれの
ノの
過一日とふか
ト記れおりに
がる加

第2詩　カラワンカスィディス Karwan qesidisi

＋＋＋
銀稿は月の光にめくられて
だれかに呼ばれた気がして
ふりかえる
本棚に風がとおる、壁の青布が揺れる
揺れる　わたしの日記がゆれる
先生のノートがゆれる
わたしの過去がゆれる
ゆれだしている

二〇二三年五月某日　都内

サリナは書きかけの原稿から顔を上げ、休憩がてら書架へと向かった。リンチャン[2]と飜訳する詩集を選ぼうとして、黒い背表紙が目に留まった。人差し指をかけて、その本をことりと抜き出す。これは、先生の本だ。

「本に呼ばれたんですよ！　リンチャン。わたしもうピンときちゃいました。ああこの本わたし呼んでる。読んでくださいと言っている。きっと先生がわたしたちのこと呼んでたんですよ、今ですよ、今読んでくださいと。」

助手席のサリナが興奮気味に語る。運転席の彼女の夫がうんうんと肯く。

「リンチャンの飜訳と文章読みましたけれども、全部合ってるんですよ。わたしたちは合ってるんですね。あなたもそう思うでしょ？　リンチャンは理解が早いですし、きっとわたしの教え方がリンチャンと合ってるんでしょう。選んだ本もわたしたちに合ってるんでしょうね。『燃える海（コイゲン デンギズ Köygen Déngiz）』を持ってきたのは、ほぼ覚えてないことでした。無意識でしたけど、結局、あの日品川でリンチャンとお茶した時は二冊の本を持っていきましたけど、二冊の中からコイゲン デンギズ Köygen Déngiz を選んだのはリンチャンでしたね。リンチャンもきっと本に呼ばれたんですよ。先生に呼ばれたんです。」

「縁があるなあ。」

と彼女の夫が感心する。

「そうなんですよ！　とても偶然というか、いや偶然じゃありませんね。運命です。いやもうこれは何かがあるね。わたしには分かるよ。リンチャンとわたしが出逢うのが一年早くても遅くてもだめだった。春にリンチャンがウイグル料理屋さん[3]で見せてくれた詩があったでしょう。炎のと、あの長い布の。」

『Uyghur の土、炎』

じゆじゆするわたしの体は泥だった
昔から
魂は炎であった
それは
その泥
その体　それは　Uyghur の土
この手ですくえるくらいの Uyghur の土
土は待っている　待つ
長い夜更けに炎を待つ
その夜のあいだ　無を旅し続ける魂　幸せなわたしの魂、魂、

どうかわたしを叱ってほしい
留まることを選んだその日に
どうかわたしを離してほしい
Uyghurの土にも捨てられる日に
泥にさえなれない日に

「あれもうわたし、あれで分かっちゃったのよ。この子は何かがある！　それで今わたしが書いているウイグル語の本書き終わったら一緒に詩を作ろうと思いました。」

「炎の」つまり『Uyghurの土、炎』という一篇の詩は、ムカイダイス・河合真による邦訳詩集『ウイグルの詩人　アフメットジャン・オスマン選詩集』から選んだ一篇をわたしなりに日本語現代詩として飜訳というか、書き下ろしたというか、そういう作品である。父と母が買ってきたウイグル詩集をぱらぱらと読みながら、ふと目に留まって、自分の言葉で書き表してみたいと思ったのがきっかけで書いた。もしできれば他のウイグルの現代詩も読んでみたい、自分なりの言葉で書いてみたいと思って、その飜訳の飜訳をサリナさんに見せた。サリナさんはそれを一目読んで気に入ってくれた。もし、興味を持ってもらえたときのために……と思って持参した別の作品も、サリナさんはじっくり見てくれた。長さ5mの布に書いた『ミャグ』という詩。

小学生の頃、先生に怒られていたとき、わたしは先生の握っていた教科書に留まることにしていました。怒られている間は、わたしが教科書でした。わたしは教科書にいました。ホモサピエンスは、固体の體を保つから、教科書とわたしを分化しますが、実際には、教科書とわたしは、分かたれていても、分かられているから（分かると分けるは同じことだから）、脈によって、つぁられているから、針灸の施術のように、こことそこが等しくなれるから、わたしはいつも教科書でした。わたしはいつでも親指で、わたしはいつでも南西で、わたしはいつでもアスファルト、わたしはいつでもあれやそれ、そこのあれ、わたし、わたしはいつでも脈、ミャク、ミャクで分かられている、留められている、膨らんでいる、つぁられている、（『ミャグ』[4]より一部抜粋）

これが「あの長い布の」のことである。

わたしはもともと幼い頃から詩のようなものを書き続けてきた。保育園の行き帰りの道で祖母に手を引かれながら、高村光太郎を歌い、石川啄木を歌い、深大寺の山吹を見遣れば、七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞかなしき、冬の訪れれば、汚れつちまつた悲しみに　今日も小雪の降りかかる　汚れつちまつた悲しみに　今日も風さへ吹きすぎる。詩を書くこと十九年。暇さえあるなら詩を書いてきた。詩がわたしの生活だった。もっと書きたい。自分のことばで書きたい。できれば、誰かのために書きたいと

思って、大学に入ってからは、「聞き書きしながら相手に成ったつもりで詩を書く」というようなことをたびたびやっていた。

そんな折りに、ふと心に留まって、書いてみたウイグルの詩の飜訳の飜訳がサリナさんの積年の感情を揺さぶった。

わたしは故郷、心の故郷
ときに閉ざされ、忘れられ
わたしは源泉、知性の源泉
ときに破かれ、蔑まれ
わたしは太陽、生命の炎を灯す太陽
ときに隠され、消火され

あなたはわたしを鞄に入れて
こっそり夜中に持ち出しました
あなたのポケットの内側で
わたしはずっと歌っていました

わたしの声が聞こえますか
さりーな、わたしを覚えていますか
わたしはあなたの鞄の中で
故郷のことを歌っています

さりーな、わたしを美しく飾ってください、もう一度
どうかわたしを美しく、声に出して、想ってください
過去を強く想うように
未来を強く想うように

わたしの声が聞こえますか
鞄の中から聞こえますか
いつか山を越え海を越え
鞄を覗いてわたしを想えば
世界の秘密がここにある

サリナはもともと詩が好きだった。サリナは先生の詩も好きだった。先生の美しい言葉、美しい想い、受け継いでくれた魂を残したかった、どうしても。サリナさんにはそういう祈りがあった。そして二人の願いは、今日、東京で果たされる。

二〇二三年五月三十日　藤沢

「リンチャン、わたしたちやっている飜訳を、リンチャンの卒業論文にしちゃうのはどうですか。リンチャンの先生はなんとおっしゃっていましたか。」

サリナさんと二人で相談し、さらに小熊英二先生にそのことを相談したところ、それはいい、そういう研究であればもしかしたら藤田護先生が面白く読んでくれるのではないかとアドバイスを受け、その後いくつか相談を重ね、こうして藤田護先生の元で本研究を見ていただくことになった。こうした経緯で、わたしは、これまで所属していた小熊英二研究会に加え、大学四年生の春からは藤田護研究会[5]にも所属することになり、そこでアイヌ語とアイヌ語口承文学を学んでいる。さらに、わたしは、三田キャンパスで開講中の笠井裕之先生の詩のゼミにも参加しており、そこの仲間たちにも本研究を渡し、フィードバックをもらっている。

「リンチャン、リンチャンがそういうふうに色んなことを学んでいるから、いまこうしてすばらしく訳せるに違いないですよ」

とサリナさんが言う。

「わたしたちはもっと遅くに出会っても、もっと早くに出会ってもいけなかった。本当に運命なんですよ。」

「本当によかったですね、リンチャン。これで卒業できそうですか。そういうことならどの詩を飜訳しましょうか。ウイグル語少し難しい詩でもいいですよね。わたしが教えてあげます。家に帰って詩を選んでみますね。どの詩がいいかなあ、迷っちゃうなあ。」

そして、その夜、カラワン カスィディスがサリナさんを呼んだ。

一九八四年　秋　タクラマカン　カラワン カスィディス　كاروان قەسىدىسى

قايىلمەن كارۋانلارنىڭ خىسلىتىگە،
جاساره- غەيرىتىگە شۆهرىتىگە.
كۆڭ تارتماق بولدۇم بۇيۇك نىخلاس بىلەن،
خىزمىتى، تۆھپىسىگە، تەرىپىگە.

砂地を往く
その途に果てがあったとしても

熱された地上は誰にとっても限りない苦行
キャラバンのラクダの背中が小刻みに上下して
息が乾いて熱い　苦しんで熱い
肺の中で燃えるかのように

كۆڭۈلگە بېرىپ مۈڭلۈق تۈيغۇلارنى،
قۇملۇق چۆل غەپلەت ئارا ياتار ئۇخلاپ.
كولدۇرما ئاۋازغا قىلىپ تەڭكەش،
تۆگىلەر بازار ئۈندا ئېغىر چامداپ.

タクラマカン砂漠に風が吹く
夜は砂漠も寝息を立てる
ラクダの鈴がしゃらんと聞こえて
朝が来る
重たい足どり　沈む足どり　しかしただ歩むしかない道のり
きみは熱い砂地を往く

二〇二三年六月十八日　慶應義塾大学三田キャンパス
旧図書館一階　カフェ「八角塔」

「直訳というのは四角いですね。角に嵌まっちゃってだめなんです。それをわたしが丸くしてあげてるのよ。訳すためには文化も言葉も心も分かる必要があります。すべてのものまとめて考えなくてはいけない。彼女はちゃんと読めてますよ。教科書みたいな決まったものは直訳でいいけれど、詩は読んだ人にとって変わるものですから、丸いものですから、わたしはリンチャンがどういうふうに考えているか理解していたから、丸く直して、それを彼女がキャッチするね。他人が何考えて何するかをわたしはよく理解できています。」

熱い紅茶を飲みながらサリナさんは話す。

日本人が日本人の心でウイグルの心を読む。わたしがウイグル人の心でウイグルの心を聞かせてあげますからね。リンチャン、あなたが日本人とウイグル人の心の架け橋になるんですよ。ウイグル人の心と日本人の心を両方引いて書いてるリンチャンはとても新鮮です。どうですか？　ウイグル語を勉強し始めて、ウイグルの詩を読んで、わたしからウイグルの話を聞いて、だんだんウイグルの心がわかってきましたか？　食べるは食べるで寝るは寝る、どういうふうに食べるか寝るかも日本とウイグルでは全然違いますね。

それを話すだけで一日かかりますね。でもそれがわからないと詩、訳せませんねぇ？　感情が多いです。キリがないですけれど、それをちゃんと話せるのがわたしですよ。それに日本でも文学をやっていましたから、他のウイグル人よりも文学者の考え方がわかっているので、先生としてぴったりだったんですね。

そういえばわたしが昔日本に留学生としてきたばっかりのころに書いた日本語の作文がありますよ。いつか見せてあげますね。まだ日本語下手で恥ずかしいですが。

お腹空いていますか？　なにかお昼ご飯を食べますか？　ウイグルでは、お昼ご飯を作ったら、近所のみなさんで一緒に食べましょうと呼びかけて食べるんですよ。

「ニルファー[6]、お昼なに作ったのー？」

「これ作ったよー」

「一皿持ってきてくれるー？」

「はいよー」

という感じでね。みんな一軒家に住んでいて、庭に出てお隣さんに話しかけて。親戚同士の関係とか、近所同士の関係がわたしたちのアイデンティティに深く関わったところですよ。

ああ、日本にもう長く暮らしました。わたしは日本語を話しますけれど、日本人になったわけじゃない。日本人の心を持ったとしても。ああ、なんというか、その生まれた生活がいっぺんに消えていって、全く慣れてない生活が始まって、家に泊まったとしても、床から高いベッドに寝ます。ベッドという文化はありませんでしたから、いままでは壁にくっついて十人とかで寝られたのに、それでみんな泊まれたのに、そういうことなくなって、日常生活が博物館になっていきました。

「どこかに見覚えがある
脳の図書館は残る
図書館は消えない消えないですから
あなたが引っ張り出すか出さないか
あなたと一緒に天国に行くか、地獄に行っちゃう
綺麗に脳を掃除しなきゃいけないんですよ
脳の整理整頓は大事、日本に行って、ウイグルに行って、
脳の整理は大事ですといつも子供達に言っています
コーヒー飲んで、今日のことも、一枚の紙に重ねていくでしょう
わたしたちはそれを時々思い出さなきゃいけない」

そうでしょうとサリナさんが言う。

ئارتىلغان يەلكىسىگە ۋەتىنىمنىڭ،
قاش تېشى، يىپەكلىرى، كىمخابلىرى.
ئارتىلغان نەپىس گۈللۈك زىلچا-گىلەم،
(توقۇغان، ئۇنى ماچىن خالۋاپلىرى)
شۇ يوسۇن قۇملۇقلاردا ماڭار تىنماي.

きみの双こぶには宝が載せられる
きみは運ぶ
玉を運ぶ、翡翠を運ぶ、シルクを運ぶ、ルビーを運ぶ、塩を運ぶ、綿を運ぶ
きみは運ぶ
永い砂道を越えて　永い夜を越えて
幾たび眠り
幾たび目覚め
遠い国へと運ぶ
きみが被ったその布も
どんなに土埃が滲みても、故郷の香りを覚えていたその赤と緑の平織も
わたしたちの国の宝
わたしたちの宝

『カラワン カスィディス』とは、ラクダの🐫🐫🐫🐫大隊、qeside- 頌歌、賛歌という意味です。３つ５つ以上のラクダの隊列があって、それを褒めたり、慰めて歌ったり、そういう意味です。karwan には、隊商という意味もあります。キャラバンとカラワンは同じだと思います。（サリナさんからのLINE より）

この詩を読むと先生のことをありありと思い出します。ああ、先生はこういうひとでした。言いたいこと文学に託すんです。はっきりと言えないことが多いですから。それでわたしたち、読めるひとたちに届けるんです。ああこの詩、あちこちに先生がいる。先生の気持ちがよく伝わる。紙を伝って、先生の気持ちがこちらに送られてくる。なにもかもに見覚えがある。リンチャン、伝わりますか。わたしたちの想いが伝わりますか。わたしたちはっきり言えない。でも心の目で読むとはっきり伝わる。ウイグルの心を持ってください。はっきりと見えるようになります。ああ、先生……　涙が出てきてしまう。先生。勇気を出した先生。先生がわたしたちを呼んでくれたんですね。

今回飜訳を試みているのも前回と同じ、アブドゥカディリ・ジャラリディン先生の本。わたしだって、訳者であるサリナさんと、この先生の想いに応えて、心の底から訳しきりたい。受け止めきりたい。けれども、どのような方法で聞いて、どのような方法で書けば上手く訳していけるのだろうか。なにかが、なにかが足りない。

駿台に通っていたとき、現代国語を教えてくれた稲垣伸二先生が言っていた。「書かれている言葉だけを受け取ってわかりやすく引用して、解答を書くのはやめてよい。成田さんはこれからは、書かれていない言葉を受け取って、紙のうしろに透けて見える現実世界を歩んで、自分の思うすべてを込めて解答を書きなさい。」稲垣先生はあまり人気がなくて、授業にはいつも５人くらいしか出席していなかったけれど、先生から講師室でこのアドバイスをもらってから、わたしの日本語は自由になった。

،قايىلمەن كارۋانلارنىڭ خىسلىتىگە،
جاسارەت-غەيرىتىگە، شۇھرىتىگە.
كۈي تارتماق بولدۇم بۇيۇك ئىخلاس بىلەن،
خىزمىتى، تۆھپىسىگە، تەرىپىگە.

砂地を　往く
その途に　果てが　あったと　しても
熱された　地上は　誰に　とっても　限りない　苦行
キャラバンの　ラクダの　背中が　小刻みに　上下　して
息が　乾いて　熱い　苦しんで　熱い
肺の　中で　燃える　かのように

タクラマカン砂漠でラクダがををうと悶えている。鼻を撫でてやると、湿った呼吸が右手の甲に吹きかかる。呼気もずいぶんと熱い。ラクダも苦しいのだろう。重い荷物を載せて、こんなに長い道のりを歩いて。この苦行をなんと呼べばいいだろう。この苦行はなんだろう。ラクダはなんと叫ぶのだろう。

書かれていない言葉を受け取りなさい。
書くことのできない言葉を引き受けなさい。

「リンチャン、一旦コーヒーを飲んで休憩しましょう。この詩は難しい詩です。」

※読者のみなさんもここで一旦休憩をどうぞ。

二〇二三年六月九日　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス　λ407　中間発表

この中間発表時点では本プロジェクトは以下のように整理されていた。

（1）主題

帰郷できないフォークロア：在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩翻訳を通じた〈想像と記憶のエスノグラフィー〉

ウイグル現代詩の翻訳を通じて、詩には書かれているが現実にはもう存在しない「あの家」「あの公園」「あの砂漠」をサリナさんがどのように語るのか、ということにサリナさんの心の中にあるウイグルのフォークロアを探す。

（2）対象

在日ウイグル人サリナさんを中心に、ほか偶然に会えた多くの人

（3）方法

「サリナさんとの共同作業によるウイグル現代詩の翻訳」を主軸にしたエスノグラフィー（詩？）の制作。

（3－1）詩の翻訳の方法：

サリナさんが、成田に対して自由な方法でウイグル現代詩の説明を試みる。その語りを手がかりに成田が詩を翻訳し、サリナさんに見せる、ということを繰りかえす。詩集は、アブドゥカディリ・ジャラリディン『コイゲン デンギズ Köygen Déngiz（燃える海）』（未邦訳）ほかを使用予定。

（3－2）エスノグラフィーの制作方法：

①非構造化インタビュー・聞き書きを行う

・インタビューの相手は、サリナさんを中心に、偶々会えた人とする。

・インタビューの相手には、以下の事項を伝えている。

> ・嘘や勘違いでも良いから、とにかく語ってほしい旨
> ・語りを元に、文学作品を SFC の卒プロとして執筆し、また、出版予定であること
> ・本文の最終版を見た上で、実際にそのインタビューの箇所を載せるかどうかを自分自身で決められる。出版まではいつでも掲載を取り消せる。場合によっては、名前などを匿名化できること

・インタビューは非構造化インタビュー。相手の語りに合わせて質問をしていく。

・インタビュー時には、フィールドノートをとり、当日・翌日に聞き書きに起こす。

②詩の翻訳と本文の構造

A　詩のパート
B　日付のパート
C　想像と記憶のエスノグラフィーのパート
D　ウイグル現代詩のパート
E　詩の日本語への翻訳パート
F　語りの聞き書きパート
G　空想紀行文パート
H　箇条書き・記録パート
I　見聞・レポートパート
J　量的データパート

ほかの混合

（以上、中間発表資料より）

「1章　アワズスィズ ティル（後に「第1詩　アワズスィズ ティル Awazsiz til」に改題）」とその整理の論「帰郷できないフォークロア：在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳を通じた〈想像と記憶のエスノグラフィー〉」に対するゼミ生および先生からのフィードバックと感想は主に次のようなものだった。

・もっと読みたいと思った。がんばってください。（学生と藤田先生）

・「エスノグラフィー」という言葉にこだわる必要はないかもしれない。どちらかというと「聞き書き」を方法論的に突き詰めた方がいいのではないか。言葉と社会が交錯する地点に、成田さんが上手く定義できるんじゃないか。（藤田先生）

・津島佑子の『黄金の夢の歌』、大門正和『語る歴史・聞く歴史』がヒントになるかも。（藤田先生）

・対話をしている相手にはカギ括弧が着く。しかしたまに、サリナさんと成田さんの二人の言葉が識別不可能なくらいに、区別できないようになっている。人類学者としては、成田さんの言葉の方が、サリナさんの言葉を覆い尽くすリスクがあることが気になる。この書き方は文学としてはアリなんだと思う。サリナさんになって書くことはできる、だがそれはサリナさんの言葉では無いかもしれない。向き合う相手としての言葉の異質性が残っていた方がいいんじゃないかなと思う。「バランスを取ること」社会的なところも含めて、他者の言葉を扱うというのがどういうことなのかという問題に向き合いたい。（藤田先生）

・ウイグル語を勉強するプロセスや教材がこのプロセスの中に入ると面白いと思う。（藤田先生）

・成田さんの普段の詩の制作方法も知りたい。（学生）

・詩に使われている漢字が面白い。（学生）

・できるなら朗読の音声も添付してほしい。成田さんが朗読しているのを聞いている時の方が想像しやすかった。（学生）

・冒頭の「夜はさよさよと笑うのですよ」の詩が素敵。ウイグルに元々伝わる伝承だと思った。成田さんのオリジナルだとは思わなかった。（学生）

・読む方が積極的に向き合わなきゃいけない作品なのかも、と思った。（学生）

・どこまでが詩で、どこまでが聞書で、どこまでが成田さんの想像なのかの区別が難しくて、色々考えながら読んだ。（学生）

・サリナさんの言葉を成田さんが上手に表現し直していくが、それはサリナさんが良いと言うなら良いと思った。（学生）

1章と中間報告にて、わたしは「サリナさんになったつもりで書いている」と説明した。だが、現実にはわたしはサリナさんを全身全霊で想像することはできても、サリナさんその人になれるわけではない。詩集に詩が書かれていて、サリナさんは詩の著者と旧くから話をしていて、サリナさんがその詩を読んで、いま、わたしに向かってサリナさんから発される言葉があって、わたしがそれを書き留めて、もう一度ここに一連の文章として書き起こす、それがさらにほかの誰かに読まれていく、そういう入り組んだテクスト構造がある。そこには言葉の交差点が無数にある。石牟礼道子は『苦海浄

土』のテクストをもって、聞き書きという形のフィクションで事実を浮かび上がらせたのではないかと竹沢尚一郎は言う（竹沢尚一郎『人類学を開く』2018）。竹沢は、人類学の観点から、エスノグラフィやルポタージュにおける表象の再帰性の問題に焦点を当て、サークル村が結実した「聞き書き」の手法の可能性を考察している。彼女が「奇病」として発表した石牟礼の作品は、海とともに生きる不知火海の零細漁民の生活世界と病後の苦悩を克明に再現し、さらに抑圧と排除を受けてきた全体社会の構造を描き出していた。これらの側面がサークル村で紡がれた問いであり、文章作法であると分析している。

「想像によって補われた語りとはいえ、カルテのような記述や語りの主体性、現場性、現在性に歴史的事実が偏在する。だから、その事実の重みを持って、1960年台の水俣という実在の場所が読者の手元の現在にまで交差してくる。石牟礼が意図したことの中には、水俣病患者を無関係の他者と捉える東京の市民への批評性や近代日本社会の構造そのものへの追及が含まれている。」（竹沢尚一郎 2018）

あるいは、別の論として、石牟礼道子には想像力だけではなく、相手が乗り移る感覚があるのだと、その「もだえ神」の精神が『苦海浄土』のような文学を生み出したのだと田中優子は言う（田中優子『苦海・浄土・日本：石牟礼道子もだえ神の精神』2020）。田中は石牟礼とのインタビューを通じて『苦海浄土』の執筆手法を考察している。『苦海浄土』を書いているとき、石牟礼には共感力・感応力から起こる「もだえ神」の精神が在るとする。このもだえの結果、目の前の語り手の魂に照応して石牟礼が相手の中に入り込み、相手に成り代わって『苦海浄土』を描いたと結論づけている。

「道子には、こうした類いまれな共感力、感応力があって、それこそが水俣病に苦しむ人々と生涯共闘することになる、石牟礼道子という作家の魂の深さであろうと思う。これは「もだえ神」の性質でもある。「もだえ神」については、第三章であらためて触れたいが、もだえ神の性質とは、なにもできないけれど、せめて一緒にもだえて、哀しんで、力になりたいという強い気持ちのことである。」（田中優子 2020）

「田中　悶えるっていうのは相手のことを想像したり、相手の立場に立ったりすると、相手が乗り移ってくる。石牟礼さんは、そういう書き方もしていらしたと思います。頭で想像するだけでなく、乗り移ってくる。
石牟礼　瞬間的に悶えている。
田中　考えてそうするわけではないのですね。
石牟礼　はい。」（田中優子 2020）

わたしのサリナさんへの聞き書きがサリナさんの言葉を覆い隠すことなく、同時に、サリナさんとわたしの思惑の通りに「美しい日本語で美しいウ

イグル語と美しい思い出を残し、ひとびとに伝えていく」を叶えるためにはどうしたら良いだろうか。石牟礼道子のように相手に深く共感してあたかも相手に成り代わったように書くという文学手法は、相手が上手く言葉にできなかったことも汲み取って言葉に残してあげられる、むしろ、表面に聞こえてくるような言語を記録するだけでは、その背景にある深い原語的世界に到達できない、この思想にはすんなりと頷ける。だが、どれだけサリナさんの話を元にしていようと、わたしが勝手に相手のことを想像し、帰納的に推測し、勝手に新しい言葉を紡ぎ出すこと、勝手に新しい過去を作り出すことは、相手がどれだけ「わたしの言いたかったことはまさにこれだ！」と太鼓判を押してくれようと、他者の声の抑圧、差別と偏見の助長に加担してしまうことになってしまうのではないか、とも思う。それはまずい。

そこで一旦、実験してみることにした。まず、今後の聞き書きではサリナさんの日本語はあまり直さずに、できるだけそのままに書くことにした。美しい日本語と正しい日本語は異なるから。美しい、とはなんであろうか。わたしはその尊さを重んじることにした。どのように発話が起こり、それはどのような気持ちから発せられたものなのか、わたしの目を通じて、わたしの耳を通じて、届いてきた声を受け取ったままに書くことにした。サリナさんの声が尊く、同時にわたしの耳も尊い。次いで、わたし自身がこの「聞き書き」の方法論を意識すること、表象に対して再帰的に捉え直すこと、何度でも捉え直すことによってテクストの入れ子構造と向き合うことにした。

こうして、後に十一月に大学で開催された研究発表イベント「SFC Open Research Forum（ORF）」では、本研究は「ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳を通じた〈記憶と想像の聞き書き文学〉」として整理され直され、「ふだんから詩を書く著者による　ウイグル現代詩の飜訳　×　聞き書き　×　長編文学プロジェクト」と名打って発表した。（そのとき公開されたのは1章までである。）

二〇二三年六月十八日　慶應義塾大学三田キャンパス　第一校舎　一階

「続きいきますよ」とサリナさんが覚悟を決める。今回の詩は前回よりもずっと長い。そして、前回よりも難しい。

نىشانى رىم ھەم پارس ئەرەب ئېلى.
قالدۇرار ھەيرانلىقتا ئۆزگىلەرنى،
ئۇيغۇرنىڭ سەنئەتكە باي تۇرلۇك مېلى.

タクラマカン砂漠を進んでいく一行はカラワン。日本ではキャラバンと発音されることが多い。先が見えない砂の地平線を目指して、ゆっくりと足をもちあげて一歩一歩歩みを進める。フタコブラクダの背中には、一枚の平織が掛けられ、その上に二つの台が載せられて、その中に異国への輸出品が積まれている。カラワンの行き先は、ヨーロッパ諸国、アラブ諸国と世界中へ伸びる。宝石を磨きあげ、やわらかいシルクを織りあげ――る技術に、世界の人びとはさぞ驚いたことだろうとサリナさんが微笑む。

そうだ。ウイグルのシルクはいまも世界的に有名な品である。ＹｏｕＴｕｂｅで検索すれば、中国の山奥で、蚕から糸を引き出し、縒(よ)り合わせて束ね、シルクを作っていく小麦色の肌のおじいさんの映像が見られるだろう。中国の山奥で。蚕から糸を引き出し。縒り合わせて束ね。シルクを作っていく小麦色の肌のおじいさんの映像が。見られるだろう。そうだろう。ウイグルのシルクはいまも世界的に有名な品である。シルクはいまも世界的に有名な品である。そうだろう。シルクはいまも世界的に有名な品である。日本にいるわたしも知っている。わたしは日本にずっと暮らしている。サリナさんはいまも日本に暮らす。サリナさんの先生はどこかにいる。どこにいるだろう。どこに？　どこにいるのだろう。中国の山奥で、蚕から糸を引き出し、シルクを作る、映像が、綺麗に綺麗に映る。綺麗に映る映像のことを誰も考えないから、山奥がどこなのか、誰も知らないから、先生はどこにいるのか、誰も考えないから、シルクだけがいまも世界的に有名な品である。ラクダの名前は誰も知らない。ラクダの涙を誰も知らない。わたしの詩には何かが足りない。わたしの詩には何かが足りない。こんなやりかたでは、訳してあげられていない。受け止められていない。言葉だけをそのまま書いてもだめ。でも勝手に想像するのも違う。でも「書かれていない言葉を受け取りなさい。書くことのできない言葉を引き受けなさい」。

先生は本の中から呼びかける。先生は記憶の中から呼びかける。「ああ、先生はこういうひとでした。言いたいこと文学に託すんです。」わたしの詩

にはなにかが足りない。先生がどこにいるのか、誰も考えない。わたしになにかが足りない。

ئاھ!يوللار ئەگرى-بۇگرى كۆمۈش يوللار،
تۇتاشقان ئۇپۇقىغا كۆك ئاسماننىڭ.
كۆرۈنمەس قاسىنقىدا يېشىل.بوستان،
ئارامى تېپىلمايدۇ بۇندا جاننىڭ.

天を仰げば青青く、地平線の先で大地の色と交じりあう
その風景に一滴の緑も見当たらない

砂漠のまっただなかでカラワンはひとりきり

見渡す砂地に緑はない
すべての宝物をここまで運んできてしまった
わたしの故郷に何が残るというのか

砂漠のまっただなかでひとりきり
日本のまっただなかでひとりきり

星間通信……ひとりぼっち

未知なる星域の奥深く、星霜を超えて語り継がれる異次元の謎めいた舞台にて、或日、Med-Tfeus帝国の領域に属する14の企業が、『DULL-AA星系の生態運命』への深層な介入を指摘された。企業たちは一様に否定の言霊を響かせた。言霊は鈍く宇宙に反響する。(2X21.04. パプポスト)

「Med-Tfeus帝国は『DULL-AA星系』および『未知の星病』に関する報道を巡り、その帝国内惑星放送を受信しない旨を宣告した。」(2X21.03. BBB NEWS)

「未知のDULL-AA星系において、異常なる数の個体が虚無バースへと囚われているとの告発。SHAS星団連合体などは、惑星内調和教育、衛星の複製機能の剥奪などに対し、星際の倫理に反すると強く非難。UUD連邦は、異次元での星々を蝕む意図に起因する『消失の星辰』が継続中であると断罪している。一方で、Med-Tfeus政府は『異星の指摘は夢幻の幻』と永遠に主張している。この異次元の深淵に横た

わる尊厳の課題、それが日本にも影響をもたらしている。DULL-AAに学びし知の探求者たちが、還邦の途上で星海に消え、少なくとも9つの星座との交信が途絶えている。なぜ彼らが虚の宙域に消え入るのか。これまで抑圧に震え、口を閉ざしていたその家族や関係者が、ようやくその幻想を解き明かし始めた。（中略）異星のDULL-AA族協会の星詩によれば、異星に学びし先覚者たちのうちの一光、著名な詩の舞台裏を紡ぐ■■■■■■■■■・■■■■■■■■■氏、星の賞を受けし文の使者だった彼は、2X02年に石川に留学。還界後はDULL-AA自治区で星の教授として輝いていた。しかし、3回転前、DULL-AAの自宅で、星海の公安によって宇宙の彼方へ連れ去られ、以来彼との星間の伝達が途絶えている。」（N-DAY放送WEB NEWS 2X21.06）

星間通信……ひとりぼっち…

…先生

……

誰か、誰か

二〇二四年一月七日　十九時　調布　珈琲館

本研究は、藤田護先生に見ていただき、小熊英二先生に応援していただき、そのほか多くの先生方と友人たち、家族たちに支えられている。サリナさんの発言はカギ括弧で明確に囲った。明確ではない部分は、すべて筆者が引き受けて書いた筆者の言葉である。本文は〈記憶と想像の聞き書き文学〉であり、サリナさんとの対話を通じて、筆者が聞き、書いた、筆者とサリナさんの記憶と想像の織物である。サリナさんの過去と筆者の過去が交差する。わたしたちの言葉と社会が交差する。その交差点に、あなたがたが立っている。だから、あなたがたの記憶と想像を本文に交差させて読んでほしい。わたしたち全員に足りないものを、わたしたち全員で補いあう、ことが、もしかしたら、できるのではないか。

一九八四年　秋　タクラマカン　カラワン カスィディス

شۇ يولدا ماڭار ئاستا كارۋان سىپى،
تۆگىلەر قەدىمدىن ئىز قالدۇ.
قاياققا باقساڭ،قۇمنىڭ بارخانلىرى،
زېرىكىش ئازابلايدۇ،كۆز تاپىدۇ.

ئۇزاق يول. جەبىردىن چارچاپ كارۋان،
مۇگدەر تۆگىسىگە مىنگەن پېتى.
چۈشىدە. كۆرۈپ. ئۆسكەن. مەلىسىنى،
كۈلكىگە تولۇپ كېتەر. سۈلغۇن بېتى.

振り返れば足跡が続いていて、ここにわたしたちのこれまでがあった
遠く目を凝らせば、他のカラワンを見つけることもあった
しかし、どの一行にも、とりかえしのつかない孤独があった

ラクダが歩む
ラクダは休む
ラクダは座って休む
夢を見ているのだろうか
夢で母が笑ってくれた
夢で父が笑ってくれた
目覚めると、わたしたちは孤独だった

片道切符のカラワンに
風が吹きかける
砂が吹きかける
鈴が鳴る
しゃらんと鳴る
しゃらんと鳴って、なにかを話す
しゃらんと鳴って、そのまま黙る

日照り、灼かれても、ラクダは耐えた
夜になるのを待っていた
夜はやさしい
眠りに就くのを許してくれる
母に会うのを許してくれる

كولدۇرما جىرىكلايدۇ رىتىم بىلەن،
چۆل ئۇنى تىكشىغانچە. ياتار مەسرۇر.
شامالىلار لەرزان ئاشۇ كۈي-نەغمىنى،
يىراققا ئېلىپ كېتەر ئۇچۇپ غۇر-غۇر.

كۈن پېتىپ، يوقاپ مەغرىب قىزىللىقى،
گۈگۈممۇ يايدى قارا قانىتىنى.
چاراقلاپ كۆكتە يانغان يۇلتۇز نۇرى،
چېچىلار بۆسۈپ تۇننىڭ زۇلمىتىنى.

どれだけ太陽がカラワンを灼こうとも、
どれだけ日差しが眩しかろうと、
世界はずっと暗闇に包まれていた
夜の方がずっとやさしかった

水を欲してラクダが鳴くと
おそろしい夜が来る
鳴き声はライオンを呼び寄せた
鳴き声は龍を呼び寄せた
ラクダを食わんと駆け寄った

كارۋانلار ئەتراپلارغا يېقىپ گۈلخان،
چېدىرلار تىكىپ ياتتى يانپاشلىدى.
ۋەھىمە سېلىپ دىلغا قاياقتىندۇر،
ئاڭلىنار يىرتقۇچلارنىڭ ھۇۋلاشلىرى.

كۆز قىسىپ،كۆكتە چولپان قىلغاندا ناز،
كارۋانلار تۈرۈپ يولغا ئاتلىنىشتى،
سەھەرنىڭ ئۈزلۈقى،خۇش ناۋاسىدىن،
جىمى جان راھەت قۇچۇپ شاتلىنىشتى.

故郷ではラクダの帰りを待っていた
やさしい気持ちで待っていた
その街道に太陽が昇る
眩しさに目をしばたき、次に開けると赤い旗
アクテレクの枝に赤い旗
地平線まで赤い旗
故郷に突然赤い旗
うなるアクテレク、ざわめくアクテレク、うずまくアクテレク、変わる街道、
色づく街道、色づく砂漠、ライオンがラクダに牙を立てる、ラクダが大きく
鳴く、ラクダが腰をよじる、肉を破って血が噴き出して、砂漠は赤く色づい
た、赤い、赤い、赤い血で、赤い、赤い、赤い血で。

قۇياشمۇ چىقتى مەشرىق قەلئەسىگە،
تىكىلدى سانسىز قىزىل بايراقلىرى.
بېزىگەچ تەبىئەتنى ھالرەڭ شەپەق،
پارقىراپ كەتتى توغراق ياپراقلىرى.

ۋاقىتلار ئۆتكەنسېرى يۇرۇش بىلەن،
داۋانلار قېلىپ مەنزىل يېقىنلايدۇ.
تىكلىنىپ ئاسماندا كۆن ئاستا-ئاستا،
گويا چوڭ ئوت شاىدەك يالقۇنلايدۇ.

چۆل باغرى قىزىپ تەپتى ھارارەتتىن،
يىراقتا دولقۇنلىنىپ ئۆتەر سەرراپ.
چاڭقاقلىق يېتىپ،سۇغا بولۇپ تەشنا،
قۇرۇغان لەۋلەرگە گەز كېتەر باغلاپ.

ئاھ! بۇلاق سۇيى شەربەت زەمزەم بۇلاق،
تۇرسەن سەن قەيەردە پىنھان بولۇپ؟
تەلمۇرگەن ھاياتلارغا نىجاتلىق بەر،
قالمىسۇن يول ئۈستىدە نىمجان بولۇپ.

時が経つ
時が経っても
故郷は染まる
炎が燃える
わたしのなかで

炎がごうごうと燃えている。砂漠を覆い尽くすほど燃える。
水が欲しいとラクダが鳴いた日、ラクダはおまえに食われてしまった。
炎が燃える。ごうごうと燃える。
ラクダは背中に宝石を載せて運んだ。おまえは宝石をいただいた。
炎が燃える。水がない。炎が燃える。水がない。

水を与えてくれないか
どうか水を与えてくれないか
水をください
水一滴を
燃えて焼き切れた唇に水を一滴くれないか
水があれば、生きていける
そこに一滴の祈りがあれば、生きていける
だが、水を奪われ、宝石を奪われ、
砂漠のまっただなかにひとりつきり
その道の先には、おまえたちが暮らしている
砂漠のまっただなかに道があるが
カラワンはなぜかひとりつきりで
水一滴をと鳴いている

بورانلار گۈركىرەيدۇ. شددەت بىلەن،
كۆچۈرۈپ بار خانلارنى ھەر تەرەپكە.
كۆرۈنمەي قالدى كۈننىڭ پارلاق چېھرى،
چېكى يوق زۇلمەت ھاكىم بولۇپ. كۆككە.

砂風に追われて泣く泣く去る
その激しさに太陽すらもう覆い尽くされ
ここはどこかと泣く泣く去っても
空を見上げることしかできない
ここはどこかと空を見上げても
もうなにも見えない
もうなにも
これからはもうなにも見えない

كۆزلەرگە ئۇرۇلغان شۇ. قۇم دەستىدىن،
بىلگىلى بولماس پەقەت، يول قاياقتا.
مۇشكۈللەر ماماتلىقتىن بېرىپ شەپە،
تىرىكلىك چۆرىسىدە قۇترىماقتا.

砂風が目に入る
右も左もわからない
ラクダはそれでも歩み続ける

جۇدۇنلۇق زىمىستاننىڭ بۇلۇتلىرى،
كەيگۈزگەن ئىدى چۆلگە ئاپئاق چاپان.
يۇزلەرگە نەشتىرىنى ئۇرۇپ ھەر. دەپ،
شۇىرغان دەھشەت بىلەن سالار. چۇقان.

ئاق لىچەك ئارتقان قىزىل يۇلغۇن. شېخى،
ئۇزىتىپ كارۋانلارنى قالار ئارتتا.
ئۇزگىچە مۆجىزە يوق زوقلانغۇدەك،
كۆرۈنەر قار جىلۋىسى ھەممە ياقتا.

雪の季節が訪れて
だが砂嵐は世界を覆う
嵐の音が大きくて
夜だって眠れない
白い景色が視界を覆う
ほかにはなにも見えたりしない
だがカラワンはそれでも歩む
道なき道を
白い視界を
嵐のなかを
足跡を残し、歩み続ける

カラワンの残した足跡に
カラワンの命がある
何世紀もの間、カラワンは生きつづけたのだから、
今日、終わるはずがない

シルクロードにカラワンが往く
砂地を往く
息が熱い
燃えている
肺の中が燃えている
だがカラワンは往く
それはむかしからのこと

چەيلىنىپ غاچىلدايدۇ يەردىكى قار،
تۆگىلەر پۇتلىرىنىڭ پەنجىسىدە.
دىللاردا ئۈمىد قايناق يېتىمەن دەپ،
تەلپۈنگەن مەنزىلگە پات كەلگۈسىگە.

夜はやさしい
ラクダもやさしい
ラクダは死なない
まだ死なない
シルクロードをカラワンが往く
永い砂地をさいていく
心は絶えたりしないのだから
炎は絶えたりしないのだから

ئەي كارۋان ئۈمرۈڭ ئۆتەر سەپەر بىلەن،
نەچچە رەت كېسىپ ئۆتۈپ بايا‌ۋاندىن.
سەن غالىپ يېتىلگەچكە مۇشەققەتتە،
تومۇزنىڭ ئاپتىپى ھەم قەھرىتاندىن.

يارىلىپ يىپەك يولى يات ئەللەرگە،
تارالغان سېنىڭ بىلەن خەلقىم شانى.
ئىزىڭ بار ئەسرلەرنىڭ قاتلىمىدا،
سەن ئەلنىڭ مەردانىسى قەھرىمانى.

پەزىلەت تاجىسىنى كىيىپ باشقا،
ياشايسەن باتۇرلۇققا مىسال بولۇپ.
سەپ تۈزۈپ ماڭدۇق بىزمۇ كېلەچەككە،
شجائەت قەلبىمىزدە دولقۇنلىنىپ.
1984-يىلى، قەشقەر

「ぱっと見ずに本を手に取ったら、この本がわたしたちを呼んでいると思ったんです。夢の中に先生が入ってきて、眼を閉じたまま原稿を書いていました。そこにあった本を訳しながら、これを読めと言われているような感じがしました。なにか、叫んでいるようなものがあったんです。」

横浜駅のSoup Stock Tokyo[7]にて、銀色のペンで原稿を書く。わたしのお気に入りのペンで原稿を書く。どうしようかと悩みながら書く。そのとき、誰かに呼ばれながら書く。文字が揺れる。原稿の上で揺れる。これでいいのかと問いかけてくる。だから答えながら書く。悩みながら書く。困りながら書く。願いながら書く。

銀稿は月の光にめくられて
だれかに呼ばれた気がして
ふりかえる
本棚に風がとおる、壁の青布が揺れる
揺れる　わたしの日記がゆれる
先生のノートがゆれる
わたしの過去がゆれる
ゆれだしている

＋＋＋

2 筆者の本名は、成田 凜（なりた りん／Narita Rin）。リンチャン、りんちゃん、なりりん、成田さん、成田、凜、これらはわたしの呼び名である。

3 埼玉県さいたま市桜区にある『本場ウイグル料理シルクロードムラト』。以下、お店のホームページより抜粋。「東西貿易の道として紀元前から栄えたシルクロード。砂漠を越え絹や香辛料などと共に東西の文化が砂漠のオアシスと呼ばれたウイグルの地で出会い融合し東西の食材や調理法を用いたウイグル料理として子孫たちに受継がれました。当店でご提供するウイグル料理は、そうした東西の旅人達が残した食文化の歴史です。ラム（羊）肉を中心としたシシカワブ（串焼き）を始め、日本の方にもお馴染みのウドンのような麺を用いたラム肉と野菜の炒め物に麺がついたラグメンなど各種麺料理などご提供しています。是非、ご来店頂き、味覚で楽しむシルクロードの旅をご堪能ください。」

4 2023年1月に執筆した詩。原文は4578字のテクストデータ。その全文を長さ5mの布に写経して制作した作品にも『ミャグ』というタイトルを付けている。『ミャグ』は、入院中の病室にて、以下の三冊にもinspireされて書いた詩である。ミシェル・フーコー『監獄の誕生　監視と処罰　新装版』、黄帝『素問』、白川静『字訓　新訂　普及版』

5 藤田護研究会のテーマは「SFC Kotan――アイヌ語とアイヌ語口承文学を学ぶ」。シラバスでは研究会の主題と目標を次のように説明している。「アイヌ語とアイヌ文化について「研究」のレベルで学べる場は、日本国内にもまだ限られています。この研究会では、アイヌ語を学びながらアイヌ語の「いま」を考え、実際に北海道でフィールドワークを行い、アイヌ語の口承の語りを通じて見えてくるアイヌ文化の世界を一緒に探求し、関連する人文学および社会科学の議論に輪読を通じて触れます。アイヌ語を学びアイヌ語とアイヌ文化について考えることは、全ての参加学生の共通のメニューとしつつ、個人研究は自由に設定することができます。フィールドワークを中心とした研究や、関連した人文学・社会科学のテーマに関心のある学生を歓迎します。研究会では、アイヌ語の実践と、口承文学の物語の考察、文献の輪読、学生の研究発表を組み合わせます。」

6 「ニルファー」は蓮の花の意で、サリナさんが筆者にくれた筆者のウイグル名である。

7 Soup Stock Tokyo 横浜ポルタ店のこと。23:00まで営業・Wi-Fiとコンセントありという環境のため、わたしはしばしばここで執筆活動を行っている。

んアわたしゃグ
ルジャダリャの雪の水
きりつぁなのんァ
あなた月の光のま
ばゆくて見やれば
なぁがい黒川のな
かごろ浮かぶ銀の月
もつてがるりやこごた

第3詩　オウステン ナフシスィ Österng Naxshisi

んァ　わたしゃ　グルジャダリャの雪の水
さりつぁなの
んァ　あなた　月の光のまばゆくて
見やれば　なぁがい黒川の
なかごろ浮かぶ銀の月
もってかえりゃこどもらの
今宵の飯にもなるかとて
双手にすくう雪の水
よいよ　よいよと　こぼすなァよと
白器に注ぐ月の水
覗けば白色　茶碗底
それじゃお月はどうしたと
手のひら覗けば月もンよう
三日月浮かべるダリャもンよう
三日月浮かべるダリャもンよう

二〇二三年十二月十八日　品川

「ウイグルの民謡ではですね、だんだだんだん　だんだだん、だんだだんだん　だんだだん……　というリズムで詩が書かれるんですよ。たとえばこういうふうに歌われたはずですね。」

サリナさんがイリィの「川のうた」をうたってくれる。のびのびと気持ちよく、いま即興で節をつけて声に出す。会議室に歌声がすこし反響する。まだわたしにはウイグル語を聞き取って、すぐに意味を理解することはできないから、サリナさんのうたいあげる歌詞がなんと言っているのかは、正確にはわからない。わからなくとも、なんとなく、伝わることはある。だんだだんだん　ふぁんふぁふぁふぁん　るら〜ららら〜るら　んたんたた……　どうどどうどう　どうどどう……

どどう……
どどう……
どどう……

水のない川がどこにあるだね
水なし川に聞き覚えなし

掘ったら石ある　土の中
掘っても掘っても石まみれ
どうどどうどう　どうどどう
掘られないのが土の石
掘られないのが土の石
どうどどうどう　どうどどう
どん　ド　ド　ド！　ド！
ド！
ド！
ド　ド　ド　ド
掘って（手拍子）
掘って（足拍子）
掘って（手拍子）
掘って（足拍子）
天山（テンリタグ）生きたる故郷の証
天山（テンリタグ）生きたる故郷の証
ド　ド　ド　ド！
どうどどうどう　どうどどう

水は地下だけ　炎天下なら
暑くなるだけ　人は死ぬだけ
水なし川に聞き覚えなし

水なし川に故郷なし

どどう…

どどう…

どどう…

「今回飜訳するのは、イリィハリリ……ですよ。これは、」

「サリナさん、いまの聞き取れなかったので、もう一回ゆっくり言ってもらえますか？」

「いいですよ。『イリィ　ハルック　ナフシリリィヌン　タリフィ　バヤーニ』です。」

「『イリィ　ハルック　ナフシリリィヌン　タリフィ　バヤーニ』。こんな感じのカナ表記でいいですかね。」

「本のタイトル『イリィ　ハルック　ナフシリリィヌン　タリフィ　バヤーニ』を直訳すると、イリィ…地域の、人々の、歌の潮流、そうですね『イリィ地域の人々の歌の潮流』という感じですね。本を書いたのは、詩も書く有名な方でメンティーメン・ヲォショルというひとです。ちょうどわたしのおじいさんくらいの年代の方ですね。この本は、まずイリィ地方の時代の流れの背景や地域、文化の説明をして、そのあとに民謡とか、ムカームの関連の詩などの歌の収録と説明が続きます。」

サリナさんは本を開いて見せてくれる。青いハードカバーの表紙には、ウイグルの伝統楽器でうたを演奏するおじいさんたちが並ぶ写真が載り、本の巻頭にも歴代の楽団のモノクロの集合写真が紹介されている。アラビア式ウイグル文字で目次が書かれ、わたしはその文字を読むことはできないが、なんとなく、章のタイトルがあって、それぞれの小見出しでは詩が説明されているのだろうとわかる。

「この章は民謡の説明の章ですね。23ページ。ほら、開いてみるとこのように、詩があって、詩の説明があって、詩があって、詩の説明があって……　と繰り返されているのがわかりますね。」

わかります。詩はどこの言語でも、そのほかの地の文とは逸した書き方がなされると思う。韻文詩であれ、散文詩であれ。

ここで一旦この本を整理する。

タイトル：『イリィ地域の民話・民謡の潮流』
作者　：メンティーメン・ヲォショル
概要　：イリィ地方に伝わる民話、ムカーム、歌といった伝統音楽芸術をまとめた本。全347ページ。

目次は次の通り。

巻頭：楽団の写真が時代別に挿入されている

一章　イリィに住んでるウイグル人たちのうたっている民話（古代の歌）のルーツ
　収穫の歌　／　河の歌　／　国境に立てるセペルの歌
　年貢とりたての歌　／　サデュル・パルワン（ヒーロー）の歌
　クシュクシュ（夜逃げ）の歌

二章　十二ムカームとイリィの民話
　Dingha munasiwetlik sheir
　有名な演奏者の紹介
　　カルシャン・アフヌン　／　ムラ・アブラッ
　　バラッ・タンブル　／　ジャミ・アカ

三章　イリィ民話の舞台化
　有名な音楽者と歌手の紹介（1870年代）
　　アサン・タンブル
　　ウゥシン・タンブル
　　ムカームのためにタンブルを弾く音楽家　ローズ・タンブル
　　ムカームを研究している音楽研究者　ゼクリッ・アルパッタ
　　民話を歌う有名な音楽家　アブドュルゥウェリ・ジャルラユ
　　音楽家　アズモラビンニ先生
　　メッタヒリヘセン・タンブル
　　色んな楽器を弾ける音楽家　ヌル・ムヘンメッド
　　オプルユス・タンブル
　　音楽研究者　スッタンモラット
　　ムカームを弾ける音楽家　カードゥルラージィ
　　音楽者　ゾゥルドュンヌスレッド
　　ムカーム研究者　アブラハム

四章　イリィ民話の解放後の発展
　有名なドュッタール奏者　モーサージャン・ローズィー
　有名なタンブル奏者　タンブルチ・ユセンジャン・ジャーミィー
　有名な民話を歌う歌手　アブドュレヒム・インミィ
　有名な指揮者　アブリキム・アブドュッラ
　指揮者兼歌手　アブリスハム・マムット
　音楽家　コルバン・ウメット
　歌手　リアスデュンバラット
　歌手　パーシャイッシャ
　音楽者　アブドゥキーレッシュアリィ
　音楽の先生　ユセンジャン・ヘセン
　民話の歌い手　ダウッチャン・ナセン
　ムカームを歌う　アブルシュ・シャークル
　歌手　ハッパル・エフメッド
　音楽教育者　シルムハンメッド・ムルァホンム
　吟遊詩人　アベイドュラ・トゥルベ
　音楽者　アブドゥサッタル・ダウトュ

五章　終わりの言葉
　イリィ民話のテクストの内容について
　歌の流れについて

※かつて「クシュクシュ」という政治的な運動があった。
※有名な音楽者の場合、敬意を持って「名前・楽器」で呼ばれる。「りん・ギター」といった具合に。
※四章の「解放」は 1949 年のいわゆる解放時代の「解放」。
※本では、ウイグルのイリィ地方（ウイグル語ではグルジャと呼ぶ。）の有名な音楽家、音楽研究者の紹介が多い。日本語のカナ表記で彼らが紹介されることはほとんどないため、ここであえて全員の名前をカナ表記とアルファベット表記で併記した。カナ表記は、わたし成田凜が聞き取ったままに表記したものを、サリナさんと彼女の夫がチェックして作成した。

「リンチャン、ムカームはそれぞれの地域にあるんですよ。アマンニサハンがしたのは十二の地域のムカームをひとつにまとめるということです。もちろん、イリィ地方にもありますよ。二章のタイトルは、「十二ムカーム（おんいっき）とイリィの民話」いや、「十二ムカームとイリィの民謡」？　いいえ、これは「民話」の方がいいですね。それぞれの地域で話された民話が元になっていることが多いです。日本にも民話、民謡はありますよね。」

「日本にもありますよ。日本の民謡の起源に『新保広大寺』という歌があると聴いたことがあります。「んああいいとも、いいとも、いっときこうなりゃ」……って歌うんです。もともとは悪口の歌だったそうですが、リズムやメロディもよかったのか、全国で大流行したんだそうです。」

ん〜あ〜ん〜あ〜

新保 ナーエ コリャ 広大寺かめくりこいて
コリャ 負けた ナーエ 袈裟も衣も ヤーレ みなさえ コリャ 取られた ナーエ

（囃し）
ああいいとも いいとも 一時こうなりゃ 手間でも取るかい ナーエ
あとでもへるかい いいこと知らずの 損とりづらめが いいとも そらこい

新保広大寺に 産屋が出来た お市案ずるな 小僧にするぞ ナーエ

桔梗の 手拭いが 縁つなぐなら おらも染めましょ 桔梗の型てば ナーエ

（囃し）
そうとも素麺 下地が大事だ こいてばコンニャク きんには大事だ
もっとも麦飯 とろろが大事だ おらカカそれより まんこが大事だ
いいとも そらこい

さほど目に立つ お方じゃないが どうやら私の 虫やが好くてば ナーエ

（囃し）

新潟街道の スイカの皮でも 抱いたら離すな 十七島田に 乗ったら降りるな
きっきとこいだら ほっぺに吸い付け いいとも そらこい

新保広大寺が ねぎ喰って死んだ 見れば泣けます ねぎのはたけ ナーエー

殿さ殿さと ゆすぶりおこせば 殿さ砂地の 芋で無いぞ ナーエー

（右記、「新保 ナーエ」から「芋で無いぞ ナーエー」まで引用
新潟県十日町 WEB サイト『【市指定文化財】新保広大寺節』2021）

実は、わたしは先週末に民謡をポリフォニーでカバーするライブに行ってきたばっかりだった。十二月九日、高田馬場にて「あがさライブ@ときわ座」。すずめのティアーズというバンドもやっているアーティスト、あがさによるソロライブである。そのライブはわたしの叔父さんの企画したライブで、アレンジ版『江州音頭』の歌唱中には、上裸の男の人が酔っ払いながら、「よいとよいやまっか どっこいさのせ」と歌いながらようようと踊っていた。わたしはその光景を思い出していた。

「民謡は、その地域の人のみんなが歌えるような代々伝わる歌ですね。地域の古代から現代までの暮らしぶりから伝わる、文化、生活習慣、恋愛、産まれた子ども、死ぬまでいくこういうものを歌にまとめるんです。それは、四十八時間止まらず歌えるようなもの、楽器に歌に身につけたもの、そういうようなものなのでしょうと思います。わたしの勘ですけれどね。」

サリナさんが教えてくれる。今回は、ムカームを飜訳していく前準備として、イリィ地方に伝わる民謡を飜訳することに決まった。この本はたまたまわたしが手元に持っていた本なのだ、こうして日本に持ってきておいてよかった、なんという偶然だ、とサリナさんが話す。民謡の中でもどの民謡を訳すか、二人で少し迷ったが、直感で『川のうた』にすることにした。イリィ地方、ウイグル語ではグルジャ地方。グルジャ地方といえば豊富に枝分かれする川なのだそうだ。イリィ川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む。

Ghulja［グルジャ］

グルジャはイリ・カザフ自治州の州都です。かつては匈奴やテュルク系民族である烏孫や古いペルシャ系の民族（月氏）が争った地でもあります。天山山脈の北、ウイグル中央部の西端にあり、大半が草原地帯で緑の大地が広がっています。そのためこの地域から産出された馬は、長年中国に輸出されていたほか、リンゴや小麦、ゴマや石炭などの産地でもあります。また、大河であるイリ川は、街の人々にとって癒しの場所として有名で、カザフスタンのバルハシ（バルカシ）湖へと注いでいます。

現在、グルジャの街はさまざまな民族が共存しています。ウイグル族、カザフ族、ウズベク族、回族、漢民族、モンゴル族が定住しているほか、オロス族（ロシア族）、シベ族などもいます。イリ・カザフ自治州にはイリ地区以外に西北部のタルバガタイ地区とアルタイ地区も含まれています。隣接するカザフスタン

との貿易は非常に盛んで、シルクロードの大都市となっています。

（以上、『ウイグル語 = Uyghur tili = ئۇيغۇر تىلى』より抜粋。）

『川のうた』は、このイリィ川で起きた一八〇〇年から一八六四年の大規模河川工事事業のまっただなかに生まれた民謡である。イリィ川を二十七の生活河川に分かつべく、鍬をふるった農民たちのうたった唄が元になっているのだそうだ。一八〇〇年頃といえば日本ではどんな時代だったのかとサリナさんから聞かれる。一六〇〇年頃から始まる江戸時代の最後の方の時代で、かつて東京が江戸と呼ばれた時代、将軍（しょうぐん）というお殿様がいて、……と説明する。

「そういえばサリナさん、『川のうた』ですけれど、「川」の表記はどうしましょうか。大きい川ですか？　小さい川ですか？」

「そうですね、大きい川ですね。」とサリナさんが答える。

「それなら「河」にしておきましょうか。運河の「河」です。」と提案してみる。

ちょうどそこへドアがノックされ、彼女の夫が会議室に入ってくる。サリナさんが彼女の夫にウイグル語で尋ねる。彼女の夫はわたしの提案を聞いて「河」がいいでしょうね！　とコメントをしてくれる。そうして、この詩は『河のうた』というタイトルになった。

一八〇〇年頃　グルジャ

命を助ける水がある。人も馬も牛も羊もヤギも、生きとし生ける物たちは水を必要とする。例えば雪解け水はその一つである。世界で最も海から遠い國、砂漠の國、山の國、ここウイグルでは春の雪解け水は生き物の生活を支える天物であった。だが春が幾千回と巡り、人は大陸を駆け回り、大河を越え、砂漠を越え、山脈を越え、山を降り、平野に家を建て、あまねく地にその数を増やして暮らし住むようになった後では、雪解け水だけではすべてを潤すことは叶わなくなった。そしてまた、不断の雪を頂く天山山脈の地下にも命を助ける水が流れていた。これまで人は地下深くに流れる天の水脈へとは易く至ること能わず、その脈脈はあるがままに置かれていた。だが、今！畑という畑の水が涸れ、華の人々も涸れ、飢餓にうめき苦しむ子どもらのひどく不憫なことよ。そこで命じられたが将軍（ジャンジュン）、その地に暮らした農民、庶民に川を作れと、河を耕し地下より水を引いてきて、人を潤せ、我が身を潤せ、命じられ、駆り出されるは男とこ！　父さん、兄君、弟君は白い衣に白いポタ、天脈水源この地に引いて、石より成る地を鍬で耕す。ガツリガツリと掘れども土はどこまでも深く石だらけ、わたしぁ女んなで何も何でも掘ったりしないが、暑い日照りにぐらねる子どもの哀れなことよ。女んな家人は取り残されて、西も東もわきまえ知らぬ将軍（ジャンジュン）の河は二十七を作るとて、河は掘っても石の皮、日照りの下では人は皮裂け、父の皮裂け、ああ労しい、ああ労し、労し、見えない水は命を見捨てる、見えない川を作る父、父を見張るは

監視員たち、見えない川を見張る目に、裂かれた皮膚は見えなかろう、うめく父も見えなかろう、父は灼かれて帰らなかった、二度とは家に帰らなかった、取り残された子どもの不憫よ、女んなの哀れよ！　命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助かる水がある。

だんだだんだん　だんだだん
だんだだんだん　だんだだん

ئۆستەڭنىڭ تېگى قاتتىق،
چاپسا كەتمەن ئۆتمەيدۇ.
زالىم تۇڭچىسى بەگلەر،
بېشىمىزدىن كەتمەيدۇ.

だんだだんだん　だんだだん、かわァ　掘ってりゃ　りゃ〜
だんだだんだん　だんだだん、かわァ　掘ってりゃ　りゃ〜
だんだだんだん　だんだだん、鍬っこ　はねて　ぶつかって
だんだだんだん　だんだだん、石っこ　はねて　ぶつかって
だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがね
だんだだんだん　だんだだん、ここは看守のお膝元

だんだだんだん　だんだだん、楽ならいいのさ　お家には
だんだだんだん　だんだだん、ひもじい子どもと妻が待つ
だんだだんだん　だんだだん、かわァ　掘ってりゃ　りゃ〜
だんだだんだん　だんだだん、かわァ　掘ってりゃ　りゃ〜
だんだだんだん　だんだだん、食いもん　宝も
だんだだんだん　だんだだん、でてくるわけじゃ〜
だんだだんだん　だんだだん、ないよ　ないがさァ〜
だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがね
だんだだんだん　だんだだん、ここは彼らのお膝元

果てがないのサ
キリがないのサ
絶えないリズムに鍬のドラムス
休憩する暇もないわけないわけないわけないが
どこにもないのサ
監視のない場所
やつらどこか遠い場所から来たくせに
こちらを見ていて
ばかばかしいって
夏がどれだけ暑かったとしても、ウイグル帽子の下には白い布を付けるんで

すよ。きっとびしょびしょに汗が染みこんだでしょうね。その地域の何十人、何百人と同じ川を掘ったんです。お昼にはきっと奥さんが来て、エッケンチャイとナンを持ってきて応援しに来てくれたのでしょうか。わたしの想像ですけれどもね。サリナさんが立ち上がって空の鍬をふるう。どすっと鈍い音が聞こえる気がする。どすっ　どすっ　どどすっ　どどすっ　サリナさんの目には見えている、わたしの目にも見えている。飛び散る汗、真上に上がる太陽、振り返ると腕組みをして睨みつけてくる監視員、一瞬だけそよぐ風、乾いた土の匂い、重たい泥の匂い、行ったことのないウイグルの土を踏みしめる。脳裏の景色をサリナさんの言葉にかさねる。

ئۆستەڭنىڭ تېگى لايدۇر،
دەسسىسە لىغىلدايدۇ.
زالىملار چىقىپ كەلسە،
يۈرەكلەر جىغىلدايدۇ.

だんだだんだん　だんだだん、おっと思うと石ではないが
だんだだんだん　だんだだん、泥がぶしょっと沸いてきて
だんだだんだん　だんだだん、泥に嵌まって
だんだだんだん　だんだだん、足はおしゃかだ
だんだだんだん　だんだだん、隣のじじいはそのまま沈んだ
だんだだんだん　だんだだん、次はお前だ　お前だよ
だんだだんだん　だんだだん、泥に嵌まって
だんだだんだん　だんだだん、足はおしゃかだ
だんだだんだん　だんだだん、隣のじじいはそのまま死んだ
だんだだんだん　だんだだん、次はお前だ　お前だよ
だんだだんだん　だんだだん、日照りに灼かれて
だんだだんだん　だんだだん、踏み込めなければ
だんだだんだん　だんだだん、後ろを向いて
だんだだんだん　だんだだん、見張りがいれば
だんだだんだん　だんだだん、おっと思うと心臓は
だんだだんだん　だんだだん、泥がみたいにぐにょりと曲がって
だんだだんだん　だんだだん、泥に嵌まって
だんだだんだん　だんだだん、頭はおしゃかだ

鍬で掘って、掘って、石を掘って、泥を掘って、河はいつかはできてはいくのですが、しかしその頃には鍬もまた曲がり、腰もまた曲がり、彼らの生活は代わらず貧しく、犠牲とも言い難いようなうらみとつらみが、一節一節に宿るような、河のうた、オゥステン　ナフシスィ、命を助ける水があるなら、命を助けた命があった。

オゥステン　ナフシスィ、河づくりのうた

オゥステン　ナフシスィ、男とこはみんな
オゥステン　ナフシスィ、故郷を離れた
オゥステン　ナフシスィ、オゥステン　ナフシスィ[8]

「このひとたちはこの歌をうたって自分自身を鼓舞し、やり場のないうらみを込めて昇華したのでしょうが、こんな歌をうたったら、監視員たちにも聞かれてバレてさぞや怒られたのではないでしょうか。」

オゥステン　ナフシスィ、だんだだんだん　だんだだん
体さえ動かすのなら、
きっと言葉がなんであろうと
何語を話そうと、聞き取れなくても、
体さえ動かすのなら、
おそらく罰されはしなかった
何語だろうかと、聞き取れないから
オゥステン　ナフシスィ、教科書に載るような有名な歌ですが
わたしたちは

再び、二〇二三年十二月十八日　品川

「リンチャン、伊犁（イリィ）というのは中国語の読み方で、当て字です。もともとウイグル語ではグルジャという土地です。ウイグル人ならみんな100パーセント誰でも知っています。おばあさんもお父さんもわたしにグルジャですよと教えてくれました。日本に来て、日本人に帰化するとみんな日本人の名前になってしまいますね。わたしもアルファベットで良いですかと聞きましたが、漢字にしてくださいと言われました。そうすると、日本で生まれ育った子どもが完璧に日本人になってしまいますから、名字は日本人のにしても、下の名前はもとのウイグル語をおすすめしています。」

リンチャン、言葉というのは心をつくる。民族であることをやめることがないのは、言葉を話し続けるからなのだ。ときに、古い言葉が残るのは、フシギナチカラのせいであったかもしれないが、言葉があるからわたしたちを縒（よ）る糸が残った。言葉がなければ、その糸のひとつも読めないままだった。言葉を書く、言葉を話す、言葉を学ぶ、言語を残す、言語を使う。命を救う言葉がある。

サリナさん、日本語名で阿依サリタナさん。彼女はこの夏に『ウイグル語 = Uyghur tili = ئۇيغۇر تىلى』（学術研究出版）を書き終え、二〇二三年十月十五日に出版した。

『ウイグル語 = Uyghur tili = ئۇيغۇر تىلى』
目次は次の通り

刊行に寄せて
ウイグル語とは

１章「ウイグルへようこそ」
シルクロード・オアシスの道
ウイグルの文化（宗教／音楽／舞踊／楽器／服飾習慣／料理／特産品）
（コラム）さまざまなウイグル帽子
（寄稿コラム）東西の玉貿易に貢献してきたウイグルの人々
ウイグルの文化 番外編

２章「ウイグル語を使ってみよう」
ウイグル語を学習するにあたって
文字と発音　母音一覧／子音一覧
Lesson ▶ 1　対面①　挨拶の言葉
Lesson ▶ 2　対面②　感謝の言葉
Lesson ▶ 3　対面③　お詫び・断りの言葉
Lesson ▶ 4　対面④　別れの挨拶
Lesson ▶ 5　対面⑤　祝いの言葉／お悔やみの言葉

Lesson ▶ 6　交際①　紹介の言葉
Lesson ▶ 7　交際②　訪問
Lesson ▶ 8　交際③　家族について話す
Lesson ▶ 9　交際④　年齢について
Lesson ▶ 10　交際⑤　住所を尋ねる

Lesson ▶ 11　身近な話題①　天気について話す
Lesson ▶ 12　身近な話題②　日時を話す（1）
Lesson ▶ 13　身近な話題③　日時を話す（2）
Lesson ▶ 14　身近な話題④　趣味について
Lesson ▶ 15　身近な話題⑤　約束・提案・勧誘する
Lesson ▶ 16　身近な話題⑥　質問する・意見を言う

Lesson ▶ 17　実生活①　携帯電話・郵便について
★単位の表現、数え方　・特殊な単位の言い方／
世界で使われているイスラム教徒の共通の挨拶と返答の言葉
Lesson ▶ 18　実生活②　電気製品について
Lesson ▶ 19　実生活③　学校・職業について
Lesson ▶ 20　実生活④　言語学習・数字について
Lesson ▶ 21　実生活⑤　銀行・支払いについて

Lesson ▶ 22　外出①　買い物（食品）
Lesson ▶ 23　外出②　買い物（衣服・ファッションなど）
Lesson ▶ 24　外出③　レストラン・映画について
Lesson ▶ 25　外出④　生活用品（百貨店・コンビニ）
Lesson ▶ 26　外出⑤　病院について

Lesson ▶ 27　旅行移動①　パスポート・身分証明書・手続き
Lesson ▶ 28　旅行移動②　移動手段について

Lesson ▶ 29　旅行移動③　ホテル・観光について
Lesson ▶ 30　旅行移動④　道を尋ねる・助けを求める
Lesson ▶ 31　旅行移動⑤　忘れ物、遺失物などのトラブル

３章「文法」
文字と発音　＜発音の上で注意すべきところ＞①母音調和　②子音調和　③母音挿入　唇の調和　④狭母音化　⑤母音脱落　⑥子音脱落
文法
語順
基本文型
品詞について
① 人称語尾
② 名詞
③ 助詞
④ 後置詞
⑤ 動詞
⑥ 接辞
⑦ 補助動詞
⑧ 存在詞・判断詞
⑨ 形容詞
⑩ 副詞
⑪ 語気詞
⑫ 接続詞
⑬ 感嘆詞
綴りに変化がみられる単語の例
★時にまつわる表現
（コラム）日本とウイグルの懸け橋となった教科書
（コラム）著名ウイグル人の名言集　23 編

４章「ウイグル語と日本語」（寄稿：木田章義　京都大学名誉教授）

おわりに
参考文献

この本は右記の章構成となっている。ウイグルの文化とウイグル語について詳細に紹介する語学書として、現在、2750円でAmazonを中心に発売されている。この本の出版に当たり、筆者の父と母と父の職場の方の三人がその編集に尽力した。筆者も会話文の収録に協力し、日本語のナビゲーターとして、YouTubeに出演している。もともとこちらの『ウイグル語＝Uyghur tili＝ئۇيغۇر تىلى』出版プロジェクトがこの聞き書きに先行して行われていた。さらに話を遡れば、出版業に携わる父母が彼女の夫の書籍を編集制作したところから、筆者とサリナさんの出会いが始まった。

ここで阿依サリタナさんの研究者としての側面を紹介しよう。

1988年から1993年まで、新疆師範大学・ウイグル語文学を専攻。卒業後、新疆文学芸術連合会「新疆芸術」雑誌の編集部に勤務。1994年北京大学・ロシア言語専攻で1年間研修。1996年に来日し、2年間の京都大学大学院研究生を経て、1998年修士課程（国語学国文学専修）に入学、「ウイグル語と日本語の対照的研究」を行う。修士論文は「ウイグル語と日本語との格助詞の共通点と相違点」。修士課程修了後、共同研究者として、木田章義教授（当時）の主催する「五言語共通文法作成班（日本語、ウイグル語、シボ語、モンゴル語、朝鮮語）」の研究チームに参加。1998年京都にて「天山文化交流協会」を設立し、ウイグル各地域の小学生へ奨学金を提供。クチャ県の“Saybagh希望小学校”の設立に協力。2004年から現在まで、埼玉県国際交流協会の外国人特別派遣教師。2016年からTokyo Gem Science社に勤務。

（以上、『ウイグル語＝Uyghur tili＝ئۇيغۇر تىلى』より抜粋。）

『ウイグル語＝Uyghur tili＝ئۇيغۇر تىلى』の売り上げの半分はトルコに暮らすウイグルの孤児やウイグル人女性の教育に寄付された。サリナさんによれば、既に千ユーロ近くを寄付したということだった。

文学修士サリナさんは、二〇二三年の下半期はわたしのこの研究のために心血を注いでくれている。師範の遺した詩集を再び開き、グルジャの文学書を開き、ムカームの古ウイグル語を読み解き直す。そうして懐かしいウイグルの記憶を引き出して、東京のわたしに話してくれる。『ウイグル語＝Uyghur tili＝ئۇيغۇر تىلى』の水色の表紙を撫でる。そこには三つの文字が並ぶ。

んァ　わたしゃ　グルジャダリャの雪の水
さりつぁなの
んァ　あなた　月の光のまばゆくて
見やれば　なぁがい黒川の
なかごろ浮かぶ銀の月
もってかえりゃこどもらの
今宵の飯にもなるかとて

双手にすくう雪の水
よいよ　よいよと　こぼすなァよと
白器に注ぐ月の水
覗けば白色　茶碗底
それじゃお月はどうしたと
手のひら覗けば月もンよう
三日月浮かべるダリャもンよう
三日月浮かべるダリャもンよう

8　今回飜訳したオゥステン ナフシスィの原文は、本文に載せたとおり、たった8行である。

人間って、舟みたいだと思う。言葉を胸に乗せて、河をくだって、いつか朽ちてしまう。言葉をうけとって、流れてきて、ほどづたって、そうして言葉をつたってウイグルがたどりつく

第4詩　アナティリム Ana tilim

人間って、舟みたいだと思う。
うけとった言葉を胸に乗せて、
河を下って、
いつか朽ちたら言葉をまた流して、
それをうけとってまた舟ができて、
ほら、ウイグルの言葉をわたしがうけとめるから、
それでこうやって日本の言葉で書いたら
岸から岸へと渡せるでしょう、
舟みたいに

ئگىلدىكەن ئالما شاخلىرى،
مېۋىسى قانچە ئوخشىغانسېرى.
كەمتەرلىك بىلەن ئادەم چىرايلىق،
سەتلىشىدىكەن غادايغان سېرى.

垂れ下がるリンゴの枝、
実が熟成するほど。
謙虚であれば人が美しく、
傲慢するほど見にくくなる。

Igilidiken alma shaxliri,
Méwisi qanche oxshighanséri.
Kemterlik bilen adem chirayliq,
Setlishidiken ghadayghanséri.

تېمىر تېيىپجان يېلىيېف Téyipjan Éliyéf (1930-1989)

二〇二三年四月二六日　品川

「そうですね！　ウイグル語の本には著名人の言葉や詩を入れましょう。リンチャン、これはとても良いアイデアですよ。わたしが選んで飜訳をつけますので、リンチャンがここをもっと良くしたいという場所があれば直してください。詩の言葉ですから、日本語の詩が上手な人がやるのがよいですね。」

数日後、「著名ウイグル人による名言.docx」というWordのファイルがサリナさんから本の担当編集者である母に送られてくる。サリナさんにとってウイグル語の語学本を出版することは悲願だった。ウイグル語を学ぶことが難しい現状で、日本に暮らすウイグルの子どもたちには、これから日本語で暮らしていくことになるかもしれないけれど、だからこそウイグル語を学んで話せるようになってほしいと。いまのウイグル語はたった数年間でも変わっていく言語ですから、言い方とか、外国語が混ざったりもしますから、できるだけ正しいときの、古くて、調整される前の文献をわたしが選んで、正しい言い方のウイグル語の本を作るんですよ、とサリナさんが宣言する。はじめはウイグル語のことだけ載せようと思っていましたが、だんだんとこれはウイグルの文化も載せなきゃいけないなと思いましたから、ウイグルの写真あちこちから集めて、木田先生にも見てもらって、ってがんばりましたね。リンチャン、何か足りないところとか、わからないところとか、これもっとあった方がいいですということがありましたら、言ってくださいね。

その背景があって、ウイグル語の格言や名文があれば載せたらどうかと提案したのだった。その一つがこれである。

ئگىلىدىكەن ئالما شاخلىرى،
مېۋىسى قانچە ئوخشىغانسېرى.
كەمتەرلىك بىلەن ئادەم چىرايلىق،
سەتلىشىدىكەن غادايغان سېرى.

Igilidiken alma shaxliri,
Méwisi qanche oxshighanséri.
Kemterlik bilen adem chirayliq,
Setlishidiken ghadayghanséri.

垂れ下がるリンゴの枝、
実が熟成するほど。
謙虚であれば人が美しく、
傲慢するほど見にくくなる。

ئىمىر تېيىپجان ئېلىيېف Téyipjan Éliyéf (1930-1989)

うーん。この飜訳だと、「実が熟成するほど。」の意味が通りづらいのと、「謙虚であれば人が美しく、傲慢するほど見にくくなる。」の対句がもったいない。わたしはそう思って、サリナさんに次のような改稿を提案した。

実るほど、

リンゴの枝は頭を垂れる。
謙虚であれば人も美しく、
傲慢であれば醜くなる。

Igilidiken alma shaxlir はそのままならば、
Igilidiken 垂れ下がる
alma リンゴ
shaxliri 枝
となるため、原文では、一行目に体言止めを用いて、二行目と合わせて倒置法を使うという技巧が使われています。この技巧を活かして訳すならば、

垂れ下がるリンゴの枝、
実が熟せば熟すほど。

というような訳になるでしょうが、これでは日本語のリズムがよくないんです。５６、６５、と締まらない印象を受けます。そこで、格言の覚えやすさのためにリズムを重視して、

リンゴの枝は垂れ下がる、
その実が熟せば熟すほど。

これで７５、８５（字余り）でリズムが良くなるんじゃないですか。サリナさん、日本語には五七調や七五調というリズムがあって、たたたたた、と、たたたたたたた、という五拍の句と七拍の句を繰り返し使うことで、日本の古典的な韻文に近くなるんです。さらに古典的な格言に見えるように、「枝」ではなく「頭」を使いましょう。これはあたまではなく、こうべと読むんです。それで、リズムを整えつつ、後半の対句に合わせて「○○なればなるほどに、▲▲が△△になる」の伏線として、「○○なればなるほどに」の構文を文頭で示して聞き手の気を引くことにしましょう。

実るほど、
リンゴの枝は頭を垂れる。

そうすることで、後半部分では技巧を活かしつつ、ほとんど原文直訳のような訳ができます。しかもですね、サリナさん。日本にもだいたい同じようなことばがあって、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と言うんですよ。学びを実らせ、徳を深めると、人は謙虚になるものだと。ほら、似ていますでしょ。だから、「実るほど」で始めれば、きっとそれだけでも意味が通じると思いますよ。

ئىگىلدىكەن ئالما شاخلىرى،
مېۋىسى قانچە ئوخشىغانسېرى.
كەمتەرلىك بىلەن ئادەم چىرايلىق،
سەتلىشىدىكەن غادايغان سېرى.

Igilidiken alma shaxliri,
Méwisi qanche oxshighanséri.
Kemterlik bilen adem chirayliq,
Setlishidiken ghadayghanséri.

実るほど、
リンゴの枝は頭を垂れる。
謙虚であれば人も美しく、
傲慢であれば醜くなる。

تېمىر تېيىپجان يېلىيېف Téyipjan Éliyéf (1930-1989)

「うん、いいですね。この訳に変えましょう！」
とサリナさんが笑顔になる。

二〇二三年一二月二二日　国際展示場

「前に、りんごの名言を飜訳したじゃないですか。今日はその人の別の詩を

飜訳しますよ。ティイップチャン・エリヨフですよ！」

サリナさんが興奮気味に話す。

「ああ、実るほど、りんごが頭を、みたいな名言ですね。ええと、本だと174ページのですね。そしたら聞き書きの方には、この名言も載せておいた方がよいですよね。メモしておきます。」

「そうですね。お願いします。見てください！　今日は『アナ ティリム』をやりますよ。日本語だと『母国語』ですね。」

彼女とこの詩の縁もまた深い。オーストラリアにいる友人が画像で送ってきてくれた詩とのことだが、その友人の父親こそがティイップチャン・エリヨフであるという。サリナさんの交友関係は想像よりもずっとずっと広い。

前回の打ち合わせの際に、サリナさんにこのままがんばれば、何か学会だとか賞だとかにも応募できるようになるかもしれない。複数の先生方からも応援されている、だからがんばりたいと伝えた。すると、サリナさん、そういうことならわたしももっと本気を出さねば、リンチャンの想いに応えねば、いま方針が変わりましたよ、わたしがリンチャンのすべての才能を引き出して見せます、ウイグルのこと全部教えます、わたしはリンチャンのための先生ですからね、現代詩だけじゃなくてウイグルの宝もやりましょう、せっかくなのでムカームをやりましょう、ムカームは世界遺産でもありますけど、ウイグルの宝ですから、すばらしい詩を飜訳しましょう、リンチャンは風邪を引いてはいけませんよ、毎日高いはちみつを飲んで、寝ないで書いてください、と息巻いた。そういうわけで第４詩にして方向転換、本研究は「ウイグル傑作詩歌飜訳集」になります。

（嘘）

とはいえ、全ムカームを飜訳しきれるわけもなく、それは生涯の宿題にするとして、第３詩に関連してイリィのムカームのみを取り扱うことにした。だとしても一篇が二十五ページで、二十三篇＋αあるイリィムカームを飜訳しきるのは天山山脈を越えるのと同じくらいに難しいのではないだろうか……

「リンチャン、今回の『母国語』も長い詩ですよ。これは現代詩ですけれどもね。」

８ページある……

「ティイップチャン・エリヨフをウイグルで知らない人はいませんよ。いままでの教科書にもこのひとの有名な詩を大人から子どもまで読んでいますか

ら。『母国語』は長い詩ですけれど、リンチャン、アイデンティティ、怒り、かなしみ、よろこび、すべての感情表すのに、母国語が有利なんですよ。リンチャンならわかりますね。

ですからこういう内容ですよ
わたしたちの母国語
愛を込めて声に出して心を繋げる言語である
愛する輝く母国語
そうですよね、リンチャン
何かに怒り、何かに抗するときには刀のように鋭く尖り
わたしたちウイグル民族を護ってきた母国語
わたしたちの心をつくり、頭をつくり、名前をつくった母国語
わたしがわたしの母国語で話しますから
リンチャンはリンチャンの母国語で書くのですよ」

native (adjective)
/ˈneɪtɪv/

1. [only before noun] connected with the place where you were born and lived for the first years of your life
   your native land/country/city
   Her native language is Korean.
   It is a long time since he has visited his native Chile.

2. [only before noun] connected with the place where you have always lived or have lived for a long time
   native Berliners

3. [only before noun] (sometimes offensive) connected with the people who originally lived in a country before other people, especially white people, came there synonym indigenous (1)
   The native peoples depend on the forest for their livelihoods.
   The island's native population began disappearing due to exposure to diseases.
   The festival is a celebration of native art and culture.

4. (of animals and plants) existing naturally in a place synonym indigenous (2)
   the native plants of America
   native species
   native to... The tiger is native to India.
   Some animals are in danger because their native habitat is being destroyed.

5. [only before noun] that you have naturally without having to learn it synonym innate
   native cunning
   He had to rely on his native wit.

6. (of a metal or another mineral) found in a pure state
   native gold/silver/copper
   Native copper was probably the first metal to be made into tools and weapons.

7. (computing) designed for or built into a particular system, especially using the language or computer code associated with a particular computer or processor
   Native apps still generally perform better than web apps, but the gap is shrinking.
   Early programmers worked in native computer code or machine language.

Oxford learner's dictionaries より

母国語。第一言語とは少し違う。母・国・語。ぼ・こく・ご。わたしの普段の生活では「母国語」という言葉は使わないかもしれない、とふと考える。敢えて避けている自覚がある。そういうニュアンスの言葉を使いたいときには、「ネイティブ」と表現することが多い。母国の言語を話すというよりも故郷の言語を話すという方がしっくりくるし、というか、わたくしの話す言語にはいわゆる「日本語」の区分がついているが、わたくしのもつ原語は、これまでわたくしに出会い、話しかけてくれたすべての言葉の縒りあわせというほかない織りであるのに、そこでは国家も時代もあとざりになるのに、「日本」への拘り抜きには日本語であると自称する必要がない、そう思う。誰もが生まれた場所の言葉を話すわけではない。生んだ親と同じ言葉を話すわけではない。国に生まれたわけでもない。東京に暮らす自覚はある、列島に暮らす自覚もある。渋谷のガストにも方言が交じる、松浦はナス！[9] と応える、アレックスは Adéu[10] と手を振る、木曜五限は aynu itak patek a=ye ro[11]、ひらがなを使う、漢字を使う。言葉、原語、ことば、話し言葉、聞き言葉、故郷の言葉、故郷、祖国、母国、母国、母国語、母国語、国の公用語、公用語、公用語があれば公用語ではない言語がある、でもタイトルは『母国語』。なぜ？　サリナさんの気持ちもわかる。永久に変わり果てた祖国を想う気持ちもわかる。でも。正しい言葉づかいという言葉、正しい日本語話者という言葉が差別の種を抱えていないか、気を遣う。自分が話す言葉に耳を傾けるあまりに、自分の話せない言葉に耳を塞いでいないか、不安になる。やっぱりサリナさんにはウイグル語で話してもらった方がいいんじゃないのか、慣れた言語で話した方が表現の幅が広いのではないか、いや、サリナさんが話す言葉の魂の部分を聞き取るべきなんじゃないか、これまでずっとそういう文章を書いてきたのではないか、オンラインで会える時代にわざわざ対面で会いに行って詩を読み続けているのはサリナさんの全身から発せられる言葉を聞きに行くためではなかったのか。

native も nation も natus に源を発するという。わたしに東京の故郷がある、でも東京が壊されて奪われたら？　親しい人がみんな日本語を書かなくなったら？　祖国が生まれるのは、祖国ではない国が押し寄せるから？　国に生まれるのは、国に生まれないことがあるから？「みなさん学生たちがいるから、わたしが先生になるのですよ」と小熊先生が教壇で話す。火星人がいるから地球人がいる。火星人がいる。火星人が来る。凄まじい破壊光線に焼かれて慶應義塾大学が壊滅。東京中に衛星マンションが新築。君たちは今日から太陽系語だけを話しなさいと言われる。小熊先生が連れて行かれる。小熊先生の子どもも連れて行かれる。衛星マンションは火星人でいっぱいになる。小熊先生の本が Amazon から消える。東京って何ですか、日本語って誰が話すのですか、そう言われる。

きみが話す言葉がきみになっていく
ふたりで話す愛があるのに

きみは異国の言葉を話す
わたしの言葉をきみは聴けない
わたしだけが辞書なんだから

成田さんは何のためにこの文章を書くの？

なりりん、こんな長いの読めないよ、時間もないし、詩なんて難しいし

リンチャン、リンチャンはわたしたちの宝ですよ

宝？

わたしたちの言葉聞いてくれて書いてくれてありがとうございます

Écrire est un acte d’amour. 書くとは愛の行為である。
S’il ne l’est pas il n’est qu’écriture. そうでなければ文字の羅列にすぎない。

リンチャン、信じてくれてありがとうございます

一九八五年四月　ウイグル

ئانا تىلىم
مۇھەببەت بابىدا چەكسىز يېقىملىق
، جىلۋىدار تىلىم
نەپرەت بابىدا شۇنچە شىددەتلىك
زۇلپىقار تىلىم
مىللىتىمىزنى،
خىسلىتىمىزنى
، ئىززىتىمىزنى،
ساقلاپ كەلگەن تۆھپىكار تىلىم.

アナ ティリム
愛があるから心で繋がる
耳にささやくウイグル語
わたしを護るウイグル語
わたしが話したウイグル語
わたしを話したウイグル語

「愛する母国語よ、あなたがあるからこの世の中ぜんぶ知った分かった理解した研究した。自分たちは何から来たか、何者かを理解した、という文章ですね。」

ئانا تىلىم
سەن ئاچقان ئەقىل كۆزىمىزنىمۇ.
سەن بىلەم چۈشەندۇق مۇشۇ دۇنيانى،
ھەم چۈشەندۇق،
چۈشەندۈردۇق ئۆزىمىزنىمۇ.
سەن بولغاچقا،
نەچچە مىڭ يىللىق ئابدىلەردىن،
ياڭرايدۇ سادا
چاقنىغاندەك گوياكى چېقىن.
سەن بولغاچقا،
ئالدىمدا ھازىر ھايات ئادەمدەك
شېئىر ئوقۇيدۇئاپرىنچۇر تېكىن
سېنىڭ بىلەن
ئالەمشۇمۇل سۆز قىلالىدى
ئۇيغۇر بالىسى.
سەندە جەملەنگەن جەۋھەرلەر بىلەن
ئىلىم دۇنياسىنى ھەيرەتكە سالدى
((كاشغەرىي))نىڭ ئۇلۇغ قامۇسى.
سېنىڭ جىلۋىدار نەقشىڭ بىلەن
يارالدى نەزمىلىك ئىنسانىي دەستۇر_____
بوۋام يۈسۈپنىڭ بەختنامىسى
سېنىڭ ((فۇسەھا))، ((بۇلەغا))لىرىڭ
سېنى مىسرالارغا تىزىپ ياراتتى

アナティリム
わたしは話した、なんども話した
草原を駆け往く風のようにわたしは話した
暖炉に燃える炎のようにわたしは話した
踊るように話した、うたうように話した
わたしたちは楽器
わたしたちは糸
わたしたちは図書
わたしたちは手紙
わたしたちは舟

大河をくだってゆく舟
季節がなんど巡ろうと
君をのせてくだる舟
この河をくだり、林を抜けて、砂地を踏んで、街道を往けば、
何千年先の君にも会いにゆけるのだから
この道が輝いてみえるのですよ
いまこうして歩いてきた道が

ئۇيغۇرچە غەزەلنىڭ نەمۇنىسىنى.
سېنىڭ بىلەنمۇ
نەۋايى تىزىپ بەخىت ئىتتى ئىلگە.
ئېسىل مەنىلەرنىڭ خەزىنىسىنى.
نامايىش قىلدى يۈكسەك چوققىدا
داستانچىلىق تەنتەنىسىنى.

سەن بولغاچقا،
تۇغدى زەلىلىنى يەكەن دىيارى.
(ئۇنىڭ غەزىلىگە تالاي شائىرنىڭ
مۇخەممەس باغلاشقا تۇتتى خۇمارى).
سەن بولغاچقا
نەۋبەتى شۇنداق گۈلدەستە تۇزدى،
خۇشبۇيى خۇددى خوتەن ئىپارى.

ウイグル碑文は或る夜目覚めて
石のなかから飛び出して
君の夢へと来てくれる
文字は躍る　言葉は躍る
君の夢へと祖母が来て
思い出話をしてくれる
レシピを書いた
日記を書いた
祈りを書いた
今日、書いた
『カシガーリャ』の百科も書いた

筆跡を刻んだ
文化を刻んだ
あなたで刻んだユスカサージャ
カシュガルの街の景色も
サムサの匂いも
あなたがなければわからなかった

سەن بولغاچقا،
خىرقىتىنىڭ سولىمىدى گۈلى،
قالىمىدى سايراشتىن توختاپ بۇلبۇلى،
گۈم بولىمىدى گۈمنام مۇناری.
سەن بولغاچقا،

フセハブレバ、美はしき友を呼ぶ声に
フセハブレバ、わたしが答える
フセハブレバ、恋の話も、どんな詩歌も、
フセハブレバ、あなたがあるから美しかった
わたしのうたが鳴り止まないです。
ボルボゥの囀りみたいに、春が巡って、飛び立って、
わたしのうたは鳴り止みません。

مىللەت نامىنى ياڭراتقان (ئۇيغۇر)سايرامنىڭ پۇشتى ئارمىيە
سايرامنىڭ پۇشتى ئارمىيە
مەرىپەتكە ئۇندەپ يۇرتىنى،
يېقىپ جاھالەتكە ئىسيان ئوتىنى،
(بولۇپ شېھىت ھەم يېرىم شېھىت)،
ئاشتى شېرىيەتنىڭ يېڭى بېتىنى.
سەن بولغاچقا،
خانتەڭرىنىڭ بۇلبۇلى لۇتۇن،
كۈيلىدى باھار ئەلچىسى بولۇپ،
ماركسىزم ھەقىقىتىنى

止められないです、わたしのうたは、誰にだって止められないです。
わたしがこうしてうたうから、花が枯れない、ポプラが茂る。
ピルッ、ピルッ、ピルリルリィ、ピルッ、ピルッ、ピルリルリィ
美しいうたは森にこだまする
モナールの上から呼び声がする
祈られる塔は倒れたりしない
わたしだってうたうのだから
あなたがあるから友人ができた
あなたがあるから故郷があった
わたしの好きなこの街も
わたしの好きなこの詩も
アナティリム、アナティリム、あなたが作ってくれたのですよ

ئەي، بىباھا ئانا تىلىمىز،
سەندىن ئاڭلىدۇق
دانالارنىڭ نەسىھەتىنى،
ئەجداتلارنىڭ ۋەسىيىتىنى.
سەن ئارقىلىق چۈشەندۇق ئېنىق
تارىخنىڭ قانۇنىى بېشارىتىنى

ウイグル人ですよと話すと、ウイグル、ああ、聞いたことありますよと日本人のみなさんも言ってくれることがありますよ。アナ ティリムよ、あなたがいるからわたしたち民族の名前を世界に言えた。ウイグルという名前。すごいじゃないですかぁ。

あなたがいるから河が流れた
人民みんな幸せになれるようになりました

あなたがいるからボルボゥたちが囀りつづける
そのうたのように春が来て
そのうたのように幸せが来た
囀りは心にこだまする
まるでマルクス主義みたいに
ん？

二〇二三年十二月二一日　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

「あなた新疆ウイグルの研究してるのですか？　なぜですか？　ウイグルですか、わたしはこの間ウイグルに行て来ましたよ。ウイグル人いまウイグルに入れないですか？　わたしはそうは思いませんけどね……　写真あげますよ。LINEで送ります。ウイグルについて聞きたいですか？　ウイグル自治区で一番面白いのはロシア族ですね。帝政ロシア時代に植民者として入り込んだ人たちですよ。ロシア族の場合、中国のTikTokにロシア語できないロシア人がいてそれが面白いですよ。ロシア族というのは中国の五十六ある民族の一つです。ロシア族のデメリトは歳をとたら太くなりやすいところですよ。あまり運動していないし、エネルギーの摂取は昔と同じですからね。はははは。伊犁（イリィ）は生活する価値はない場所ですよ。旅行する価値はありますけど。グルジャ？　聞いたことないですよ。東ロシアの農村だからくだらないです。ほらこのTikTokを見てください。この人たち踊てますけども住んでてつまらないところですよ。わたしですか？　住んだことはないですよ。ウルムチは大都市だから色々ありますけどね。ウルムチは故郷にはない地下鉄が走てますね。」

ゼミの後輩に話しかけられた。四川省出身で、新疆には何度か行ったことがあるからと、わたしの中間発表資料に目を通してくれる。本日の小熊研究会のテーマは「ポストコロニアリズム」。先週のデリダとフーコーに引き続いて、サイードなどを扱った。SFC（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）には留学生も多い。中国から180人、大韓民国から59人、インドネシアから17人、台湾から11人、米国から7人、タイから6人、インドからも6人、その他諸国合わせて339人の留学生を迎えている。（SFC公式WEBサイトより、2023年4月現在の報告。地域名はWEBサイトのまま。）留学生のうち、半数以上が中国から来た学生だ。彼らに交じってわたしもマルクス古典文学を読んだし、中国語の授業を取った。わたしが、人間は国家に産まれるわけではない、ルーツによって人格が決まるわけがない、わたしたちは人際に交わることができると日頃から主張し続けてきたくせに、かたくなに自分の研究内容を公にしてこなかったのは、正直に言えば、わたしの研究がどのように反応されるのかがずっと怖かったからだ。批判というよりも、否定されたらどうしようかと思っていた。アムネスティ・インターナショナルの報告と中国共産党の報告は異なるのが事実だし、もしわたしの文章がフェイクニュースだ！　だとか言われたらどうしよう。どうしよう。それだったら役に立たない研究ですねだとか言われる方がよっぽどマシだ。心の中で本当にごめんなさい、と思いながら、研究内容はまた今度教えるねと返事をする。

本当にどうしようかなと思う。インドネシア関連の研究をしているゼミの先輩が「あの人はインドネシアのことも下に見てきたよ」と耳打ちしてくれる。日本にだってそういう言説はよくあるよなあと思う。結局なにも言えないまま帰宅する。なにも言えないままパソコンに向かう。それで憂さを晴ら

すかのようにこの文章を書く。そういうときの詩は身悶えしている。君を救った国家、わたしを引き裂いた国家、誰かをおかしくした国家、あなたを肯定した国家。憎しみも祈りも、アナ ティリムに縒(よ)られていく。依(よ)り代(しろ)みたいだと思う。

「リンチャン、リンチャン！　ここ、ここですけど、リンチャンの思うとおりに訳し直しましょう。リンチャンが受け取った通りに。」

揺り起こされたような気がして、寝返りを打ちますと、わたくしは舟になっておりました。いつからか川底に横たわって、波にゆがむ月を眺めていたようなのです。真っ白い月がなにかを言いたげにこちらを見ているのですが、遠くてよくわかりません。るるゃ、るるゃと小波が揺れます。心地よく寝かせてくれます。また寝返りを打ちますと、そうではないと、小波が揺れます。遠くに山の陰が見えます。黒くて大きくて水平線いっぱいの山です。その山と目が逢います。川沿いの草原がざわめきます。遠くから馬の鳴き声が聞こえてきます。なにか、なにかを言いたいに違いない、しかしわたくしは舟ですから、もはや朽ちた舟ですから、歩いて近づくこともできません。声を聞くことができません。舟底がずんと重くなります。

二(ふた)たび小波がるるゃと揺れて、わたくしのからだものゆると揺れて、西から風が吹いてきました。厳しい雪の風です。しかし、あまりに重たい風でしたので、その重風に川が撥ね、わたくしの舳先がやや東を向きました。るるゃるるゃと水面が揺れます。揺れて揺れて揺れられて、わたくしの右肩から泥が落ち、わたくしの左肩から羽が生え、揺れて揺れて揺れられて、錆びた舟底が、水面へと持ち上がります。舳先が首をもたげました。わたくしが息を吸い込むと、冷たい空気が胸まで滲みました。滲み込んで、浮かびました。からだが軽くなっていきました。

今度ははっきりと月と目が逢います。山山と目が逢います。るるゃ、あなたは舟なのだから、泳いで泳いで、大河を遡って、その源を目指しなさい。あなたの帰郷を待つ者がいます。だから、泳いで泳いで、大河を登り、その頂を目指しなさい。声を聞きなさい。風の声を。声を聞きなさい、草の声を。大河をあがり、源へとたどりつき、もう一度河を流すのです。流し直しましょう。もはや河は泥のように濁り果てた。もう一度、澄んだ河をここへ流してくれないか。わたくしたちもじぶんを見たい。澄んだ川面に映りたい。

舟は運びます。すべてを。舟は届けます。すべてを。
流し直しましょう。リンチャンが受け取った通りに。

だから、わたくしが舟になったのです。

一九八五年四月　ウイグル

ئەي، بباها ئانا تىلىمىز،
سەندىن ئاڭلىدۇق
دانالارنىڭ نەسىھەتىنى،
ئەجداتلارنىڭ ۋەسىيىتىنى.
سەن ئارقىلىق چۈشەندۇق ئېنىق
تارىخنىڭ قانۇنى بېشارىتىنى

あなたがいるから河が流れた
あなたがいるから草木が咲いた
草木が咲いて川沿いにボルボゥたちが囀っている
そのうたのように春が来て
そのうたのように幸せが来た
囀りは心にこだまする

ۋە ئىنقىلاب دالالىرىنى.

شۇڭا قوغلىدۇق زۇلمەتنى سۆكۈپ
قۇچتۇق ئازادلىق پاراغىتىنى.

ئانا تىلىم،
ئۆمۈر كۆردۈڭ شۇنچە كۆپ يىل سەن،
بەردىڭ بىزگە نۇرغۇن ئەقىل سەن.
ئەزەلدىن بېرى
قەلبىمىزنىڭ ئەزىز ۋەكىلى ئىدىڭ
بىز مەۋجۇت ئىكەنمىز
يەنىلا شۇنداق ئەزىز ۋەكىلى سەن،
مەۋجۇتلۇقىمىزغا ئەڭ چوڭ دەلىل سەن.
بىز بۇگۈن يېڭى مەنزىلگە ماڭدۇق،
سەنمۇ جەۋھەر ئېلىپ جىمى زۇۋاندىن،
بېيىپ، تېخىمۇ بولغىن ئېسىل سەن!
ئانا تىلىم،
سۆيىمەن سېنى،
سەن ئۆمرۈمنىڭ جېنى-زىننىتى.
يايرامدۇ جېنىم،
ئاڭلىسام سېنى باي، ئۇز، پاك پېتى.
قاقشايدۇ جېنىم،
يېپىشسا ساڭا مايمۇن ئىللىتى.
تېخىمۇ ھار كېلىدۇ ماڭا،
تاپسا ئىناۋەت ئورىلىپ ساڭا
كازىزاپلارنىڭ ئىغۋا-تۆھمىتى،
بىشەملەرنىڭ ھازىزۇللىقى
ئالدامچىلارنىڭ ساختا ھىممىتى،
ئوغرىلارنىڭ ھارام ئوقىتى.

ああ、アナ ティリム、アナ ティリム
知らないということがなんとおそろしいことか
過去も足跡も潮流も、時代の流れもこれまでも、古代から現代までの暮らし
ぶりも、糸も筆跡も、革命も戦争も、
あなたがいるから考えられる
あなたがいるから暴君は絶え
あなたがいるから生きていける
あなたと共に年をとり
あなたと共に賢くなった
わたしたちが生きる限り、あなたはわたしたちの証、わたしたちが生きてい
る証なのだ
今日、歩き始めたわたしたちと
これからも歩むわたしたちは
あなたのおかげで生きている
はちみつのように、潤しく

لېكىن بىز يەنە ئەمىن شۇنىڭغا
ئىنسانىيەت تاپار كامالەت.
دەيدىغىنىنى ھامان دەپ بولۇپ
ئۇجۇقىدۇ ئاخىر لەت بولۇپ،
ئەقىل ئالدىدا خۇنۇك جاھالەت
پاكلىق ئالدىدا خۇنۇك جاھالەت،
پاكلىق ئالدىدا مەشئۇم قاباھەت.
ئەنە شۇ چاغدا
قىلار تەنتەنە
ئىنسان تىلىدا راۋان لاتاپەت.

ああ、アナティリム、アナティリム
おいで、こちらへ
手をつなぎ
深い地下まで根をはって
豊かな果実を実らせましょう
もっと甘くしたいのならば、やっぱりあなたが必要だから

ئانا تىلىم،
چىللايدۇ سېنى
تىل دۇنياسىنىڭ بەس-بەس مۇنبىرى،
يىلتىزىڭ چىڭ سېنىڭ،
زېمىنىڭ مۇنبەت،
مېۋەڭگە تېخىمۇ تولىدۇ شەربەت
قانچە پەرۋىش ئېيلىگەنسېرى.

ئۆسكەنسېرى ئەقىل زوقىمىز،
ئۇچۇپ نادانلىقنىڭ غەلدە-غەشلىرى،
جىلۋىلىنىدۇ سەندە مۇكەممەل
سەممىيەتنىڭ سۈزۈك ساداسى،
پەن ئىپادىسى،
سەنئەت تەسۋىرى.
ئاھ، ئۇنداق بولمىسا،
نېمە دېگۈلۈك،
ياراتمىسا تارىخ تەھرىرى؟
بۇ بىز ئۇچۇن ئۆلۈم ئەمەسمۇ؟
ۋە ((نەس باستىمۇ سېنى))دېمەسمۇ
قەبرىدە تولغىنىپ مەھمۇد كاشغەرىي
1985-يىل ئاپرېل

知らぬというのはおそろしいこと
あなたがいるから世界がきらめく
知識も芸術も文化もすべて
あなたがいるからきらめいている
ああ、わたしたちのアナティリム
わたしがあなたを忘れたら
詩を捨て、かつてと別れたら
あなたはわたしに問うでしょう
あなたはなにを遺すのですかと

わたしたちの言葉聞いてくれて書いてくれてありがとうございます
信じてくれてありがとうございます

アナティリム、どうして詩を書くのですか。
フセハブレバ、信じてほしいから、詩を書くのですよ。
フセハブレバ、信じてほしいから、あなたに話しかけたのですよ。

9　ありがとうの意。インターネットで使われる「語録」と呼ばれるジャーゴンのひとつ。

10　さようならの意。カタルーニャ語。

11　「アイヌ語だけを話しましょう」aynu itak（アイヌ語）patek（〜だけ、〜ばかり）a（4人称）ye（言う）ro（4人称の〜しましょう）

第5詩　ムケッディメ Muqeddime

二〇二四年一月十二日　国際展示場

「わたしたちが出会ったのは、まず2020年ごろからリンチャンがウイグルに興味がありまして、そうしていると、た、ま、た、ま、リンチャンのお母さんとサリナさんが出会って本を作ることになって、リンチャンは、サリナさんが日本語喋れるかもわからなかったのに、フシギナチカラで詩を、あのウイグル料理屋さんに持ってきたら、な、ぜ、か、サリナさんが食事するのもやめて紅茶も冷たくなりましたけど、リンチャンの詩をじーっと読んで、リンチャンウイグルの詩やりましょうと言って、リンチャンははじめはよくわからなかったけれど、フシギナチカラでよくわからないままサリナさんの言う通りに書いてみたら、どんどんすばらしい詩が書けた。詩の力わかりましたと。リンチャンのすべての才能サリナさんがわかっていて、リンチャンはなにか意義のあるものをやりたいと、よかったものを残したいと思った。人生すごく短い、なにが意義のあるものかわからない。ひとそれぞれ考え方が違いますから。ウイグルみんな中(ちゅう)アジア人でありながら、詩が好きな学生であるわたしにとっては、詩が命と同じくらい好きである、ティイップチャン・エリヨフ先生の心になって考えると、一つの民族の心を詩になって収めた方が意義あることですと思いました。」

ね、そうですよね、感動しちゃう。こういうふうに書いたら良いですよとサリナさんが言う。まったく知らない人同士が品川で会って、こういうふうに詩を書いた。運命ですよという。

今回飜訳したいのは、ウイグル民族の文化を代表する古典長編詩篇「ムカーム」の第一部「ラック」のなかの第一パート「チョン・ナグマ」の序詞「ムケッディメ」。ムカームはウイグルの古典長編叙事詩であり、伝統音楽である。さまざまな時代や地域において、詩人、歌い手、演奏家たちによって創られ、うたわれ、口伝てに継がれてきた民衆の音楽による組曲であり、特に、「十二(おんいつき)ムカーム」は伝統的なムカームとして知られている。ラックとは、その十二ムカームのなかでも、一つ目の組曲のことである。チョン・ナグマとは「偉大な音楽」の意味であり、十二ムカームの各組曲のなかの一構成の名称である。ムケッディメは古アラビア語由来の言葉で「はじまり」「まえがき」といった意味を表す。

そのはじまりを飜訳する前に、一旦、書いておくべきことがある。

その日、東京の夜にも雪が降りました。しんしんと冷えこむ、ひとりぼっちの雪のつぶ。交差点の信号にじんわりと光って、月の青白い光がこぼれていました。銀色の雪は、ゆっくりと地面に向かって落ちていきました。

第0詩　東京凜式 Tokyo Rinical

mek phe meu bak peu tel mek byak phe ミャ mek mek ミャク ミャク わたしは、ミャクによって、つぁられている みゃぐまれている バク バク myak いきわたる ミャグ わたしはいつでもじぶんを分岐することによって、生き延びてきました。分岐してきた数だけ、わたしがありました。歴史的なことだけがわたしを作ってきました。

わたしの事態が危なくなる度に、わたしはミャクしてきました。正しい位置と正しくない位置を定めることによって、元の分岐を捨て果て、新たしい岐点を分有し、等しく生り変わり、生き渡ってきました。ゴミとは、ミャグの先端のことであり、剥がれ落ちた内臓、切り取られた器官、わたしには関係のないもののことです。ミャグすることが増えれば増えるほど、わたしたちは人間になりました。それは薬があっても治せず、監獄があっても変えられない、天骨の性でした。わたしたちは元元、ばくばくと鳴らして生き続けているだけだったのです。

冬の帰り道に電信柱と目があいました
電信柱もこちらを見ていました
落ち葉の葉脈、中央分水嶺トレイル、霧ヶ峰の湿原、われわれは、ミャグている限り、つぁられている ミャグによって分かたれている ら mek phe meu bak peu tel mek byak phe ミャ mek mek mek phe meu bak peu tel mek byak phe ミャ mek mek ミャク ミャク mek phe meu bak mek byak phe ミャ mek mek 地ありつているミャグ 血ミャぐれている mek phe meu bak byak ミャグ mek phe meu bak peu tel mek byak phe mek phe meu bak バク バク 血ぁりつている 燃られりている ミャグ バク mek ばく ばく ゴミとは、ミャグの先端のことであり、剥がれ落ちた内臓、切り取られた器官、わたしであったものです。

（成田凜『ミャグ』前編より大幅に抜粋）

二〇二三年六月十五日　ー限「アカデミックライティング」授業中
「〈成る〉聞き書きの成り方：石牟礼道子『苦海浄土』におけるオーラリティの現在性・主体性・現場性から考察する表象の再帰性」発表後

「成田さんの発表は、人間はどこまでが個人なのかという問題に集約されると思います。」と小熊先生がコメントする。今回、この聞き書きを書き下ろすにあたって、わたしは自分の中にサリナさんを落とし込んだあとで、あ

らためて表象し直すことに努めていた。母の前でサリナさんの語りを真似してみたり、サリナさんと仲良くなった母がそれを見て「サリナさんはそういうふうに言うんだよね」とほほえんでくれたり、サリナさんっぽい表情をつくってみたり、フィジカルな面でも落とし込みは行われた。それは、時代とサリナさんの都合によって、サリナさんとの会話を録音することができなかったことに部分的にも起因していて、わたしは、当日に筆記したサリナさんとの会話のメモを見返しながら、記憶のテープを再生するように、サリナさんの身振り手振り口振りを自分の身体を使って再現する。わたしのブラインドタッチとフリック入力は、人の話す速さにほぼ追いついているため、それなりに密度のある光景がメモアプリに残っている。面白い点は、今回の聞き書きには、サリナさんとの会話の書き起こしだけではなく、詩の飜訳も含まれているという点だ。この飜訳はサリナさんとの打ち合わせ後に持ち越す「宿題」として、サリナさんから課せられていた。サリナさんとの打ち合わせの現場で飜訳を完了させるのではなく、後日、わたしが聞き書きの書き下ろしをしながら飜訳を完成させる。書き下ろしをするとき、わたしは、詩の飜訳のことを念頭に置きつつ、詩の内容を理解するために、サリナさんの詩の説明を思い返し、サリナさんの詩の説明の仕方を理解するために、サリナさん自身を思い返し、サリナさんを身振り手振り口振りし、わたしのなかに、ウイグル詩から連なる記憶の脈脈を再生させていく、という手順を踏むことになる。そうなるとやはり、「人間はどこまでが個人なのかという問題に集約される」のである。

わたしが自分の聞き書き方法論を〈成る〉聞き書きと呼ぶようになったのは、わたしの芸術活動を通じてのことだった。もともと、わたしは、後述する「〈憑く〉ぽえとりぃ」という活動で、〈相手に憑くようにして相手が言ってもいない言葉までも書く〉ような聞き書き詩作品を制作していた。その一つの成果として聞き書きの対象・相手である〈語り手〉たちができあがった作品を見て、「これだ。わたしは言葉にできなかったが、わたしの言いたかったことはまさにこの作品の通りだ。」と納得し、涙を流すようなことがしばしば起きた。はじめは「相手を大胆に、無理矢理に、代弁する」というやりかたに、自分自身でも懐疑的であったが、実験的にこれを進めるうちに、ただ〈憑いて〉〈詩〉を作るのではなく、〈成って〉〈聞き〉〈書く〉からそういうことができるのかもしれない、相手とテクストの上で交差し、相手がテクストのうえに産まれる何者かを自分自身であるかのようにまなざす、というようなことが起きるのかもしれないと考えるようになった。そのナルシズムはあやういと自分に言い聞かせながら、この方法論をもっと実験してみたいと欲した。相手にポエジーを合わせる、ということを越えて、相手の心の底に辿り着く旅をする、相手の言葉がわからなくても1時間2時間と黙って集中して、ずっと聞き続ける、ひたすらに相手の言葉だけになる、心がすっかり言葉になる、隣の客の声が聞こえなくなる、エアコンの音が聞こえなくなる、他の何も聞こえなくなる、ずっと聞く、聞きながら書く、書きながら見せる、そういうことをしていると、身体がどんどんおかしくなる。おかしく

なって、語り手の声と目の前のテクストのほかに依り所がなくなる。溺れているような感覚になる。息が詰まる。瞳孔が開いたままになる。語り手がじいっと画面を見つめる。テクストが書かれ続ける。テクストがわたしを置き去りにして画面の上に生まれていく。テクストが導いてくれる、この話の終着点に。研ぎ澄まされた技術、方法論はひとつの世界の境地を見せてくれる。書け！　これがわたしの宿命だった。

で、「人間はどこまでが個人なのかという問題」について、こう質問されたことがある。「自分の考え方と合わない人だったらどうするの？　あるいは、自分の知らない話題、言語、文化圏の話をされたらどうするの？」わたしもどうなるのか気になった。だから実験してみた。

英語日本語交じりの語り手　R.M.A.　との事例（2023/7/1 SFC 芸術祭にて）

R.M.A. さんは、わたしのこの取り組みを以前から知っていて、今回の芸術祭でブースを持つことを伝えたらまっさきに語り手になりたいと挙手してくれた。R.M.A. さんはインドネシアにルーツがあり、「英語で話しても大丈夫かな？」と言いながら、これまでの思い出と人生観を1時間まるまる語ってくれた。その語り口、雰囲気、声にまじってもれだす息の音、髪の揺れ方、そういうものもすべて織り込みながら書いてやれたらいいなと思った。R.M.A. さんに読めるように、できるだけひらがなを使って書いた。そのひらがなの感じが、書き進めるうちに、わたしが書きたい雰囲気と一致してきた。R.M.A. さんはこの詩についてなんども褒めてくれているようだ。「これはまさにわたしそのもの！　本当にすごい！」。

らふあ　なあふ
わたくしをまとううつくしのもり

すきとおる葉、すきとおるじかんに、
ひのかげはうらうらおとされます

すきとおるなつの樹は、わたくしのためいきをすって、
あおく　ざざめく　ゆれました

みつけにいきましょう　そう　らあふ　なふあ
わたくしのどこかにあるうつくしのもり

「わたくしのめが、みつけたのは、
あかい樹あかい森
おさないときのやまかじ」

「わたくしのゆびが、みつけたのは、
つまづくおんなのこたちのささやき
へんに　しずか」

「わたくしのうでが、みつけたのは、
ニューヨークのこうさてん、おおきなじなり
ジャカルタのおかあさん、
ジャズのかおるカフェ
コンピューターをたたくおと、
おとのなかにこんでいるわたし
すわるわたし　おとなしくすわるわたし
しゃがむわたし　おこられるわたし
およぐわたし　はしるわたし　おどろくわたし　ふしぎなわたし
もどるわたし　もどらないわたし　ないてるわたし　らあふ　らあふ
なかないで　わたし　もえる　まち　うらないで　わたし　わたしと
いろづくわたし　あかされるわたし　くるまれるわたし
わたしをくるむ　わたくしだけの　うつくしのもり」

らふ　らふ　ぁふ　な
らら　ふぁふ　なふ　ぁ

4歳の語り手　キリ　との事例（2023/7/1 SFC芸術祭にて）

キリさんにもわかるような語彙と書きようで作品制作を心掛ける意志が働いた。平易な単語とひらがなで構成された詩になった。キリさんの言葉だけを聞いていたかったが、隣に座るキリさんの母親の言葉（「最近好きなものはなんだっけ？　お砂じゃないでしょ、○○ちゃんでしょ。」など）が頭に入ってきて、あまり集中できなかった。キリさんの体力を考慮して、通常1時間のところを20分で終わらせたため、あまり成りきれなかった感覚がある。

こんにちは、
わたしは　きょうは
あなたと　ふたりで
ここに　ふたりの　おうちを　つくります

やよ、わたしたちを
ふわり　つつむ
よよ、わたしたちが
ふんわり　つくる

しっているのだ　わたしは
つくられているのを　しっているから
おうちがゆったりわらっているのを

やよ、わたしたちを　ふんわり　つくる
きょうは　ふたりで　おうちを　つくる

おじさんの語り手　まーちゃん　との事例（2023/9/27藤田研究会合宿にて）

親世代に憑くぽえとりぃを行うのは初めてだった。酒の場で突然書くことになったので、自分はまだ酒を飲んでいなくてよかったと思った。話ながら、相手のあたたかい性格と暖かい体温が伝わってきて、その息遣いや人生を記録してあげたい気持ちでいっぱいになった。「こりゃあいい、すげえなあ、りんは。」と言って喜んでもらえた。藤田先生やゼミの同期に見られながら書いたけれど、そのことは途中からまったく気にならなくなった。うまく〈成れた〉感覚がある。

昔から阿呆なんだよ、おれは

生き阿呆
げに阿呆
人好き阿呆で、
げみうれしみは朝べに夕べに、喋喋陽陽、おれは昔から

きくのがぁ好きなんだぃ、げにげに、きこえてへ、くるんだふ、げに、
声ではなくとも、そいつの陽だまりが、おれに差すんだよ、まぶしいのがすきなのではなく、あたたかいのがすきなのでもなく、
おれは、きくのがぁすきなんだよ、陽だまりが聞こえてくるから、
そのかがやくのが春でも冬でもあたたまに降るから、朝に差すから、
すきなんだよぉ、昔から

分けいるのが癖なんだよ、草はらにも、なんど見たゆるやかな坂、
なんど見たあぐら、知っているんだよ、路がなくとも、夏にも秋
にも、路がなくとも、雨上がりの夕べを、ほろげうる台所を、お
れは、路よりも、陽が差すのを好むから、陽が差すほうに歩んで
往くから、分けいるんだよ、こちらから、あちらまで、おれは、
昔から、阿呆だから

以上、「憑くぽえとりぃ（のちの成る聞き書き）」の実践例である。

相手のことがよくわからないままにはじまっても、相手が積極的にじぶんを明かしてくれるのならば、それに耳を傾けることによって、うまく書き起こすことはできそうな気がする。むしろ、方法論をリフレクティブに意識し、突き詰めているわたしよりも、語り手の側ががんばるというか、勇気を出す必要があるように思えた。わたしは筆であって、その筆をとるのは語り手なんだというような意識が心のなかに発生した。筆はまず握られる。相手の手に身を委ねる。

二〇二四年一月十二日　国際展示場

子ども産まないですというのは危ない考え方ですよ……　リンチャンは絶対に子ども産んだ方がいいですよぉ。若い頃にどんなに働いたとしても、リンチャンがんばって詩を書いたとしても、子どもいなかったとしたら、なにも残していないことになる。お金がすべてじゃないですよね。お金は努力の結果に来るものだとわたし思っていますけども。若い人たち、子ども産んで、日本から出て行かないでとしないと、日本語守れないですよ。

そうでしょう、とサリナさんが言う。

日本の「無理ゲー」のさなかでも、サリナさんにとっては切実な問題がある。その切実をどうやって理解しようか。

二〇二三年十月十四日　十七時　台東区　オーラム御徒町

『ウイグル語 = Uyghur tili』新刊発表会にて

「尊敬する皆様、今日は、文学の魔法が再び私たちを包む特別な瞬間です。新たなストーリーの扉が開かれ、私たちの心を魅了する言葉が広がります。この素晴らしいイベントに参加していただき、誠にありがとうございます。ウイグル語は、その美しい音響と豊かな文化に彩られた言語であり、わたしたちにとって貴重な学びの機会となります。でも、ウイグル語の保護者たち、研究者たちは既になくなりつつあり、わたしたちはこれを守り、子供たちに受け継ぐ責任を持っています。したがって今日、わたしたちの共同体の発展に向けて共に努力し、共に成長していくことを称えるべきです。

言葉は、文化と人間の心をつなげる架け橋であり、新しい言語を学ぶことは、新しい世界への扉を開くことと同等です。今日、わたしたちはウイグル語の学習において新たな一歩を踏み出します。この日、わたしたちは誇り高いウイグル語文化に触れ、この素晴らしい言語をより深く理解する機会に恵まれました。

新刊の教科書は、このような理解を深め、ウイグル語の美しさと複雑さを理解するためのツールです。この教科書は、言葉の魔法をあなたに伝え、文化への洞察を提供します。ウイグル語はウイグル人のアイデンティティとウ

イグルの長い時代の積み重ねを反映しており、その学習は深いリスペクトと理解を築く助けになるでしょう。

本日、わたしたちは待望の完全版を手に入れることができて、興奮しています。もちろん、これは著者あいさりたな氏の数年ではなく、数十年にわたる絶え間ない探究、研究の成果です。もちろん、この計画は夫人の夫であり、生涯のパートナーであり、同僚であり、親友でもある、あいアヒマディ博士の支援、協力、改良によって実現しました。それは、ウイグル語を理解し、ウイグル語を学ぶ人にとって、新たな旅の始まりでもあります。

日本の有名である詩人の相田みつをさんの名言です。

毎日毎日の足跡あしあとが
おのずから人生の答えを出す
きれいな足跡には
きれいな水がたまる
トマトにねぇ
いくら肥料をやったってさ
メロンにはならねんだなあ

サリナさんは、自分の人生に綺麗な足跡を残る、世代と民族に奉仕するために、多くの困難を経験してきました。以下、サリナさんに講演をお願い致します。」

（サリナさんから届いた原稿ママ）

サリナさんが出版した『ウイグル語 = Uyghur tili』の出版記念で開催したパーティーで、わたしは日本語の司会を担当した。或る晩、サリナさんから電話がかかってきて、「日本語の司会は誰がやるかとなりました。それでウイグルのみなさんみて、それはもうリンチャンしかいないですとなったです。」と言われ、わたしは照れながら「メルヘメット」と感謝を発音した。当日の原稿は任せてください。こういう内容を読んでほしいんですと、サリナさんが事前に原稿を渡してくれる。できるだけその原稿の通りに、サリナさんがきっと丁寧にパソコンで調べながら、細心の注意を払って書いてくれた日本語を、わたしは尊重しながら、わたしのこの口で、発音していく。

「ウイグル民族文化を残すことはとても大切なことです。わたしたちウイグル民族として、この誇り高い言語を話していきましょう。みなさんも日本民族の大切な言葉を残したいでしょう。『ウイグル語 = Uyghur tili』のYouTube の動画では、わたしはウイグルの民族衣装着ました。リンチャンは日本の着物着ました。日本民族にも大切なことがありますよね？　ウイグル民族にも大切にしていることたくさんあります。」

そうですよね、とサリナさんが言う。

二〇二三年六月十五日　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスメディアセンター

うつくしきわが祖国、うつくしき日本民族というスローガンにも、「混じりけのない純粋な民族」のニュアンスが含まれうる。「サントリーのCMに起用されているタレントはどういうわけかほぼ全員がコリアン系の日本人です。そのためネットではチョントリーと揶揄されているようです。DHCは起用タレントを含め、すべてが純粋な日本企業です。」化粧品会社DHCの吉田嘉明会長の（有名な？）文章にも象徴されるように、過去から脈脈と続いてきた、混じりけのない日本民族、天皇のすまうわが祖国、純粋なものは尊い、尊いものは美しい、そういう論理がどこかにある。美しき勁き国へ、自民党よ、そんな日本を取り戻せと叫んでいるのは政治家だけではない。わたしの友人や、友人の父母だって、そういうふうに話す。「あなた、日本語のアーティストをやっているの！　日本語は世界でももっとも難しくて美しい言語だから、そりゃアートにもなるわよね。すばらしいことね。」と声をかけられたのは、今年の七月のことだった。わたしは咄嗟に、「いや、わたしは小熊英二先生のもとで勉強しているんです」とかいう返答をした。焦ったあまりに、まったく飛躍した返答をした。本当は、わたしが、日本語を書きながらそれを美しいと形容し、その歴史的な系譜を一本線に結んで、その尊さをナショナリズムに結びつけることの危うさを説明しておきたかった。日本語が世界でもっとも難しくて美しい言語であるなどということはない。頭の中で『単一民族神話の起源 ――〈日本人〉の自画像の系譜』[12]と唱えた。でも、うまく言葉にできなかった。時間がなかった。声をかけてくれたその人は、三十秒もしないうちに隣のブースへと去って行った。

やっぱり日本では「純ジャパ」や単一民族神話は流行りだった。そういう思想はアウシュビッツと同じだよ、と放課後の3年5組の教室で田中を説得しようとするわたしに、清水くんだけが肯いている。アドルノじゃないけどさぁ、ダメだよ、民族浄化は。清水くんがまた肯く。わたしたちの担任の大庭先生は日本史のなかでもたぶん、近代史の戦争史のあたりが専門だった。そういう社会科の授業だった。わたしたちの世界史の先生の五十嵐先生は、初回の授業でわたしたちにサイードの『オリエンタリズム』のコピーを配布して一段落ずつ音読させた。でもわたしたちのクラスメイトは、コンビニのネパール人の発音がひどくてわからなかった、お金を吸うために日本に来ないで欲しいと平気で言う。その口で源氏物語を音読する。その口で夫婦別姓婚は日本人の心を引き裂くからよくないと言う。わたしに向かって言う。その口で百人一首をうたう。その口で東大以外は大学ではないと言う。別に全員が東大に入るわけでもないのに。その口で、成人式の日、わたしに、SFCは慶應じゃないだろと言う。その口で、山月記を読む。その口で、単位がなくて人権がないとか言う。その口で、風姿花伝を学ぶ。その口で、日本語が一番美しいと言う。飽きるほど、飽きるほど聞いた。飽きるほど聞いた。飽きるほど繰り返された。飽きるほど、飽きるほど繰り返された。毎日繰り返された。久しぶりに行った同窓会で、誰も、ガザのことを知らなかった。

知らないなんて、嘘をついているのだと思った。ドキドキした。この聞き書きは見せられないと思った。クラスメイトは、春から社畜になったと、ついに奴隷になったと、無邪気に笑った。わたしの聞き書きには、やましいところなんてひとつもないのに、ここにいる誰にも見せられないと思った。その公明なやましさが、「テクスト」と「社会」と「責任」を不可分にした、ような気がした。途端に邪な光がわたしを照らした。

正直に言えば、わたしにははじめから、「そういう社会的な文学を書きたい」という欲望があった。「正しくありたい」と思うあまりに、現実を物語として考えてしまっていた。物語の勇者として、あるいは、重要な吟遊詩人として、この地球に登場してみせたかった。だから、そのことがわかっていて、サリナさんが来るウイグル料理屋さんに自分の詩を持っていった。すべてのひとに、運命のように、それぞれの役割があるというのが好きだった。サリナさんは西からやってきたウイグルのお姫様で、わたしが詩人、クラスメイトはわたしたちの物語を輝かせる凡庸の巨悪、自分自身に神話を見ていた。それと同時に、そういう自分がいることを恥じていた。わたしはみじめだった。わたしは卑しかった。平家物語を諳んじてみせた口で、クラスメイトの無邪気を笑った。夜と霧をめくった指で、このテクストを打ち続けた。はずかしい。折り合いのつけられない悩み事のすべては、理論を学べば解決すると思っていた。だからまず、このテクストの執筆を進める際に、方法論を極(き)めようとした。なにが事実なのかが問題だった。飜訳をしようとするサリナさんをそのままに受け止め、そのままに受け止めようとするわたしをそのままに受け止めるために、自分の卑しい下心と、納得できないアイデンティティと、抑圧される人権の問題を、同時に解決しなければ、この文学を書く資格すら与えられないだろうと思っていた。サリナさんは、自分の思うままに話してくれる。文字にして書き記されなかったものは後世に残されていかないという非情の史観からか、書き残したもの、口に出したものならば、（ほとんど必ず）正しく残ると感じているように思える。だから、ウイグル人が書いたウイグル語の語学本にこそ意義があるし、ウイグル人が飜訳したウイグル現代詩であることが重要だと念押しする。日本国内には、ほかにも数冊のウイグル語本やウイグル詩の本があったが、いまはそれは読まずに、サリナさんの話だけを聞いて欲しいと言う。サリナさんにだけに心をチューニングさせるために。サリナさんは運命を重要視する。さきほどの第5詩の冒頭のように。わたしは彼女を代弁してみたい。でもわたしの口から発せられるのは、いつだってわたしの言葉であった。わたしと彼女の心と頭がチューニングされなかったとしたら、わたしは彼女を代弁できるだろうか。テクストを打ち込むわたしの指先に、いくつもの意図が結わえられている。親指に意図が結わえられている。人差し指に意図が結わえられている。中指に意図が結わえられている。薬指に、小指に意図が結わえられている。だって絶対に意図が結わえられている。このタイトルのこの冊子を手に取ったあなただって、わたしに意図を結わえた。親指が人差し指にクロスする。糸が絡まる。キーボードを打つ指が止まる。折り合いのつけられない研究背景に、第0詩が挿入される。極められないから、ぜんぶ詩にした。「詩

というのは、他者に共有されることを拒否しながら、既存の言語とは違う形でやることで、言語を社会的に切り離そうとする営為のことだと思いますよ。あくまでわたしの考えですけどね。」と小熊先生が両手を挙げていつものように笑った。[13] 極められないから、泣きながら詩を書いた。後光なんて差さなかった。2023年の冬には、我々は蛍光灯の下でコンピューターを覗き込んだ。誰にも読ませられない文章はChatGPTに読んでもらった。ChatGPTが「文学の力を通じた声の発信」だとか「多元的な視点の提供」だとか「文学と翻訳の重要性の強調」「異文化交流と理解の促進」「記憶とアイデンティティの探求」「文学の枠を超えたアプローチ」といった項目を列挙して、「総じて、この文学制作は文学を通じて社会的な問題に焦点を当て、感情や記憶を通じて共感を喚起し、多元的な視点を提供することで、ウイグルに対する理解と意識の向上に寄与すると考えられます。」なんて言って、かなり適当に相づちを拍(う)ってくれたときにも、わたしの中で、いくつもの記憶といくつもの想像が反響していた。指に結わえた糸を伝って、いくつもの記憶といくつもの想像が送られてきた。わたしが受信した。「わからないまま書くから、面白いんじゃないか。わからないものができあがるから、面白いんじゃないか。」と三田のサイゼリヤで友達と笑い合った。そのわからなさは、無知のことではなかった。どれだけのことを知っていても、わたしたちにどんな理論があっても、実は、この世界には他者がいる。他者がいるから、わたしたちは言葉を話した。

筆になるのか、人間になるのか、選んでください

二〇一二年五月二十四日　石川・能美

NOMI国際交流協会ホームページの2012年5月24日の記事より

「サリタナさんの講演会」

以下、講演会の案内チラシからの転載です。

◎当地がウイグルの教科書に

数年前に北陸先端大学院で研修されたウイグル自治区（中国）のジャラリディンさん（大学教授）が帰国後、母国ウイグルの小学校の教科書に大学院周辺で見聞した町の美しい景観や住民の人柄を紹介された。

教授の教え子で、現在埼玉県で国際交流をしているサリタナさんが、その内容を宮竹小学校の子どもたちに話すことになり、その機会に地元の人たちにも報告していただくことになりました。

◎交流を通じて、ウイグルと日本の架け橋に

ウイグルはシルクロードのオアシスといわれ、多くの日本人観光客が訪れている所です。

サリタナさんは、いろいろな形での文化交流が行われることを望んでいます。また宮竹小学校でも国際理解を通しての心の教育を重視しています。

ぜひ、交流が成功するように多くの方が講演会に参加されることをお願いします。

演題　ウイグルの教科書に紹介された大学院周辺のようす

講師　埼玉県　外国人非常勤教師

国際交流イベント・アドバイザー

阿依（アイ）サリタナさん（埼玉県在住のウイグル人女性）

日時　6月1日（金）　宮竹小学校　午後7時30分

6月2日（土）　宮竹コミュニティセンター　午前9時

講演内容はほぼ同じです。

主催　東部地区振興会・宮竹小学校PTA・宮竹町公民館

二〇二三年十月十四日　十九時　台東区　オーラム御徒町

『ウイグル語＝Uyghur tili』新刊発表会にて

「ئەزىز قېرىنداشلار بىلەن ئۇچراشقان ئەڭ گۈزەل مىنۇتلىرىمىزدا ئەلۋەتتە ئۇيغۇر مەدەنىيىتى، مىللىي سەنئىتىنى تىلغا ئالماي ئۆتمەيمىز. نۆۋەتتىكى مىنۇتلىرىمىزدا ئۇيغۇر مەدەنىيىتىنى ئۆگىنىپ، ئۇنى تەتقىق قىلىپ ياپونىيەلىك دوستلارغا تونۇشتۇرۇشتەك ئۇلۇغ مۇساپىدە قەدەم بېسىۋاتقان ياپونىيەلىك دوستلارنىڭ سەنئەت نومۇرلىرىدىن هوزۇرلىنىمىز.」

ウイグル語を担当する司会のひとの言葉に続けて、わたしがマイクに日本語を向ける。

「親愛なる友人たちとの素晴らしい瞬間で、ウイグル文化と民族芸術を最高の形で紹介したいと思います。ウイグル語、そしてウイグル文化を学び、それを元に日本人の方々に紹介している、日本人の大切な友人たちの芸術的な才能を楽しましょう〜」

くるくるくると踊り子が舞う
体の周りに円を描くように、両手はすべらかにうたう
鳥が舞う　女性が舞う　時の流れが見える
踊り子の名前はビフ
彼女は話す

「初めてウイグル音楽が好きになったのは８歳のときでした。ウイグルの自治区を認識したのは中学の頃で、ウイグル料理に関心をもって、大宮まで、電車に乗って大冒険で食べに行ったんです。そのときにポロ（という料理）の解説をしてくれたのがサリナさんだったんです。それで、『ウイグル人の方にお食事の説明をしてもらえるなんてなんてハッピーなんだ！』って思ったんです。２年前にディリさんのコンサートに出た時にサリナさんが激励して抱きしめてくれて、Facebook でも愛情深いコメントをくれて、心の栄養になるような応援ありがたいなと思っていました。そんなあるとき、数日前です。わたしのウイグル音楽の先生にここ（『ウイグル語 = Uyghur tili』新刊発表会）に来ることを話したら、（わたしとサリナさんは）大宮に住んでいたときに会ったことがある！　と（言われて）そこで記憶が繋がったんです。サリナさんはあの本を子どもたちのためにって思いで出版されました。こういう場でウイグルの伝統舞踊をさせてもらうのは、最も気が抜けない場面だって思うんです。」

長い細い三つ編みを何本もさげて、彼女はくるくると回った
サリナさんって本当にずっとがんばってるんだね、と乾杯した

二〇二三年七月十六日　十八時九分　詩友・原田くんからの LINE

俺が好きな成田さんの詩は制作過程、出力の方法が入り組んでいて、複雑。けどその複雑性はある理論・法則に従っているために整然とした印象があり、表現としての構造美がとてもいい。そこにある内実もいい。今回の詩もそう。

その人の語る言葉はその人の歴史である、と思う。つまり個人の言葉にはそれぞれ奥行きがあって、その奥行きにはちらほらと個人の経歴が見え隠れするもんだよねということだけど。それを踏まえて。

ここでおこなわれている実践は超人技的で、それはたとえば DVD の裏側にある虹色のキラキラを肉眼で読み取り、その DVD で再生されるはずだった映像内容を、発話によって伝えるような行為だと思う。ただ成田さんが書き起こした言葉は、ここで想像されている情景は、サリナさんの歴史を単に再生しているのではなく、再編しているはず。特定の人間の歴史を再編するという行為はわりと大胆だと思うし、それがある種のコミュニケーション、そして表現として成立していることには、まだ俺の気づききれていない大きな

意味があるはず。特にこの詩のように深刻な社会批評性が含まれる場合はそう。社会と個人の感情は連動しているはずだし、なんというか、この詩は小さな小さな個人の言葉が、その言葉を語る個人を投影し、そうして投影された個人からさらに社会＝世界を投影している印象があって。語り手の介在というのもそうなんだけど、つまり個人と社会の接続が間接的に紐づけられ、本来の言葉のエネルギーが部分的に不可視化されている。けど語り手はその言葉のエネルギーを丁寧に拾い上げていて、再編に成功している。だから読者は個人の切実な感情と、その根底にある問題を知らず知らず突きつけられる。見えないはずなのに莫大なエネルギーがこっちに送られてくるものだから、一読しただけでは雰囲気に圧倒されて、「分かったつもりになっている状態」に留まっちゃうんじゃないかな。だけど繰り返し読むことで、縫い込まれた言葉の糸すらも情報として受け取れるようになって、そこにある複層性が本当の意味で理解できるようになる……のか？？？　自分で書いていて思ったけど、やっぱりこの複雑な構造がとてもいい！と思う。読めてよかった〜！

二〇二一年七月四日　湘南自治会準備会「対話祭」メッセージ

「どうしてこんなに通じ合えないんだろう。わたしたちはいつも全然わかりあえない。日々、そう思う。あるいは、どうしてこんなに通じ合うのに、これほどいのちが痛く共鳴するのに、昨日も今日も脳天気でいるのはなぜなんだろう。そう思う。わたしたちは必然的に他者と共に生きている。それは、口々に異なる言葉を語りながら、しかし必ずその言葉を分かち合っているということである。

（中略）日本という社会において、……、わたしたちひとりひとりの尊厳は、残念ながら守ろうとしなければ守れないあまりに儚く尊いものである。（中略）わたしたちの大学生活がわたしたちが望むようなものではなかったとき、その理不尽は決して個人の問題に帰着してしまうようなものではない。わたしたちは、みなひとしく、SFCの未来を決める権利を持っているはずであり、その権利と権利を守り続ける努力を以ってして、大学という社会を変えていくことではじめて、ひとりひとりの理不尽が本当の意味で解けていくはずだ。だが、この権利は、この声は、実際には届きはしない、そう思っていないだろうか。これまでの人生の中で、一度でも、この声が社会を変えたことがあったか。不安と無力感と無関心の濃霧の中で、どうして未来のことなど考えられよう。そう思っているだろうか。

かなしい。あまりにかなしい。分かち合いたい言葉のひとつひとつに耳の一つすませられないなら、それはとてもかなしいことだ。（中略）未来を決めていくのは、わたしたち全員だ。だからわたしたちは、たとえ通じ合えなくとも、声に耳を傾け、みずからの言葉を発して、互いを尊重し続けたい。そのための対話だ。対話がなされるように、自治会が機会を用意することを約束したい。そんな未来ではきっと、対話のあり方そのものもきっと常に模

索することになりそうだ。

少なくともわたしたちがこうして未来を考え続けることで、さまざまに交わされる言葉のひとつひとつに耳をすまし対話をし続けることで、SFCは常に拓けた未来への可能性の種（dynamis）であり続けられる。それこそが湘南自治会準備会の探究してきた「SFCらしい自治」のあり方で、かつ、永遠に模索するほかないSFCの一側面なのである。

今回の対話会では、さまざまな対話の機会を設けてみた。協力してくれたすべてのひとに感謝と愛を。このメッセージを読んでくれたすべてのひとびとへ祈りを。ともかく伝えたいメッセージはひとつだけだ。わたしたちは全然無力なんかじゃない！その一言には、その一票には、絶対に意味があるから、諦めないで、未来を。どうか、一緒に創っていこう。

E-FES　Dialogue At Home
責任者　成田凜
主催　湘南自治会準備会」

「対話祭」は「朗読あり討論ありプレゼンあり音楽ありの、24時間のべつ幕なし対話ばかりのオンラインパーティー」として、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの学生自治会設立承認投票の前夜に開催された。わたしはもともと、詩や音楽を交えた広義の「自由な言論の場」にあこがれと希望を抱いていた。大学生活の二年間をそうした学生自治活動に費やしてきた。

わたしの自治会設立運動の理論的な背景は、ハンナ・アーレントだった。言論の活動、人間と人間が直接に関わりあう活動をいわゆるアーレント用語の「action」として意識した。言論の活動、人と人の直接の交差には、勇気を出したactionが必要なんだ、古代のギリシアの市民たちのように、自分を明かして、表に出てこなきゃいけないんだ。同時に、音楽や詩のような、アーレント用語「work」の領域にありつつ（＝不死で永遠の物物を創り、人間と人間を物を介して結ぶような行為）、actionに近いような芸術物たちを介して、言論を公明（あか）るく永久に物化（のこ）し、保障することができるんだ、だからわたしたちも、言論の自由の保障において学生自治会を機能させるべきなんだ、というような、アーレントを応用する理論を展開していた。

だから、言論が大事、自分を明かして公にでてこよう、詩も大事、詩があればactionの領域を物としてこの世に残していける、というような考えの延長に、自然に『憑くぽえとりぃ』を行った。この対話祭で、はじめて『憑くぽえとりぃ（成る聞き書き）』があった。以来、わたしは相手の語りを詩に起こすような活動をしている。

二〇二三年六月　ポートフォリオ「成る聞き書き、憑くぽえとりぃ」

「成る聞き書き、憑くぽえとりぃ」

初出：

2021年7月4日

慶應義塾大学公式イベント「E-FES」内で初めて公開

制作にかかる時間：

1時間から3時間（事前予約制）

制作方法：

路上の似顔絵屋さんのように、目の前の相手についての作品を執筆します。

①「こんにちは！」予約していた語り手がやってきます。（学生も赤ちゃんもおばあちゃんも大歓迎！）

②事前の注意説明をします。「作品はもしかしたら発表するかも！良いですか？」

③それではスタート。語り手が自由に語り始めます。わたしはその語りを聞き、相槌を返しながら、同時に相手に取り憑くようにして詩作品を執筆します。

④相手はいつでも作品の執筆状況を見ながら、語り直したり、語りを止めたりすることができます。画面共有しているってことです。

⑤いつしかお互いに納得する終着点が見つかる瞬間が訪れます。そこで作品制作が終了します。

⑥できあがった作品は相手にプレゼント。その場で手紙にしたためます。

画期的な点：

○即興型対話詩という新しい文芸手法

○語られなかった言葉に注目する新しいインタビュー法

○芸術のセラピー効果をより手軽に

その作品の一例：

『KはKの一部である』

KはKの一部である。

Kはふたつから生る層体をひとつに結わふ生命のくくい。

Kの機能は複製の機器で、Kの手足は永遠の象徴、Kには生きていくのに十分なだけの臓器と財産と考えがあるが、Kには知識も愛すらあるが、Kはあるときじぶんの一部が

じぶんじゃないことが不満になって、捨ててしまった
手も
足も
手も足も
手　足
その手足、指、親指、爪、爪先、爪先が切ったありとあらゆる肌
その肌からこぼれてしまった血、血の構成要素
そのすべて　そのすべてを
拾い集めて
生きなおす　なおす　なおす　治る　治るのを待つ
その手　そのKの手　そのKの指
指はぴくぴくと曲がり、
Kの知らないあいだにKの知らない文字を書く
書く　書かれる　そう　こうして書かれるK
こうして思われるK　の　Kのすべて　Kの一部

『KはKの一部である』の作品背景（Fさんのプライバシーと秘密を守るために、部分的に実際と異なる描写をしています。）：

「お父さんはわたしのことが嫌いなんです」席に着いてから三十分。軽い自己紹介と雑談の後で、語り手のFさんはぽつりと話し始めた。「お父さんはわたしのことをいつも非難します。わたしが話しかけても無視します。でも、わたし、思うんです。お父さんのこと、すごく嫌いだけど、お父さんとわたしは血の繋がった親子だから、わたしは絶対にお父さんみたいな人間になっちゃうんだろうなって。」Fさんは、人間を人間たらしめるのはDNAという遺伝の仕組みだと話す。親がどれだけ自分にひどいことをしてきても、自分もいずれ親のように自分の子どもにひどいことをしてしまうのだろうと、人生を悲観する。Fさんは、自分は遺伝されたもの以外には何も持っていないと言う。人生をゆっくりと振り返りながら、総括していく。「人生はきっと決まってるんです。勉強とか、読書とか、……わたしがどんなに努力をしても殴られつづける理由は、わたしが悪い人間だからなんです。どうせ、ひどい人間になるのに、なんでわたしは生きてるんだろう……」ここでようやく、パソコンの画面にはじめの一文が打ち込まれる。「KはKの一部である。」Fさんはじっとパソコンを見つめる。そのまま二行目が打ち込まれる。「Kはふたつから生る層体をひとつに結わふ生命のくくい。」どんどん打たれていく。この間、30分以上の沈黙が続いている。不意に、Fさんが口を開く。「わたしは、愛されていいのでしょうか……」ふと、わたしがキーボードから顔を上げると、Fさんの頬には涙が伝っているのに気づく。わたしはタイピングし続ける。「書く　書かれる　そう　こうし

て書かれるK　こうして思われるK」「の　Kのすべて　Kの一部」。午後4時の教室は時計の音で満たされていた。

「成る聞き書き、憑くぽえとりぃ」の可能性：

元々、「憑くぽえとりぃ」は大量の自作の詩を学習させたAIによる詩作実験から発想を得た試みでした。実験をしていた2020年当時は、まだAIの言語アートがそこまで盛んではなかった時期であり、AIを使うことに対してどのような評価をすればいいのかに戸惑っていました。はじめは、AIという擬似的な人間を道具として使うことに抵抗がありましたが、よく考えてみれば、人間は太古の昔から道具という他者を使って物を作ってきたということに気がつきました。楽器を使って自分には出せない声で音楽を作り、金属を加工して自分では産めない形を製造する。「ものづくり」とは、他者を介して世界に向かう方法だとも解釈できます。自分ではないものから産まれるものは、必然的に自分の予想を超えてきます。その点こそがものづくりや創作活動の醍醐味だと考えました。あらゆるものづくりを〈他者との対話〉だと捉えることで、〈他者〉の反応や自分自身の変化をより楽しめるのではないでしょうか。

二〇二三年一月三日　三時十七分　詩友・原田くんへのLINE

わたしもね、好きでこういう風に想って、化け物みたいに筆を執り続けるんだよ。きっと前世で筆だったんだね。成りたくて人に成ったに違いないよね。だから夜になるとまた筆にもどるんだね。そうじゃなかったら、ただの化け物だね。市中できっと噂されていたに違いない。明かりのない裏屋から筆の音が絶えず聞こえてくる、見れば長い黒髪が戸という戸から這い出しているではないか、あの家にはたしか髪の短い女っこだけが住んでいたというのだから、筆が化けて何か悪さをしているに違いない。恐ろしいから切ってしまおう。筆も、髪も。そうして切られた髪が玉の川に流されて、果たして怨みか執念か、川を黒く黒く染め上げていったので、川の名前を黒神川と呼ぶのである……

二〇二四年一月十三日　東京

相手が話し、わたしが書く、このコンセプトで前述の詩制作（「成る聞き書き、憑くぽえとりぃ」）を行ってきた。今回の〈記憶と想像の聞き書き文学〉にも同様のコンセプトがある。わたしたちは言葉を話した。わたしたちは、他者がいるから言葉を話した。言葉を聞いた。言葉を書いた。話し、聞き、書く、のあわいにわたしたちが立っている。

筆になるのか、人間になるのか。

テクストを書くことに、言葉を発音することに、言語を飜訳することに、やっぱりそれほど自信はない。恥ずかしい。でも、会ったこともないひとのために、こうして書き残す。人に言葉が生るのだから、不朽の言葉に不朽の人が成るのだから、恥ずかしさも違和感も悩みも怒りも現実もフィクションも記憶違いも先生も友人も明日も去年もWEBも碑石も祈りも願いも織り込んだ永壽のテクストをコンピューターに束ねていく。筆でいるだけでは不倫理、筆がないのも非力、筆があっても勇気がなければ、勇気があっても自由がなければ、自由があっても心がなければ、テクストが身もだえする、テクストが燃えている、テクストが怒っている、筆なり、人なり、書くことができるのだから、聞くことができたのだから、語られることができたのだから、書く！

わたしの方式で。

その日、東京の夜にも雪がしんしんと降りおちました。
雪のひかりと交差点の青信号に混じって
月明かりは銀色に光っていました。
哀しげに光っていました。

その銀光に混じって
聞こえた泣き声
あれはなにかと子どもが問うので
耳をすますと
あなたの声にも似ている
あなたの言葉によく似ているのは
あなたがまだ幼くて地球の何も知らなかった頃に
あなたに話しかけつづけた
わたしたちの友人がいて
その人は海の向こうにすんでいるので
海のこちらの言葉は話せないから
涙を流して
湖に流して
河に流して
わたしたちに呼びかける
その涙が
砂漠を越えて
海を越えて
月明かりを伝って
こちらへと届くので
わたしたちの耳元には

ひとしずくの静寂が聞こえてくるのですよ

その静寂を口にくわえて
あなたが東京の空を飛ぶ

成れないですよ、普通、その人には。
でもね、わたし思うんです。たまには成れる、たまには……
みゃぐみゃぐしてみたいです、たまには
成るために必要なのは、わたしの勇気、わたしの知性、わたしの想像、
わたしの集中、わたしのわたし、あなたの勇気、それから他にもたくさんありますけど。
おかしなことですが、たまに思うんです。
わたしとあなたが脈されている、その論理性が歴史のことではなく、ただここにいて見つめあうという関係の中に生まれてきたら、なんだかうれしいかも、とかって思うんです。詩的な感性です。わかりあえることやわかりあえないことから逃げたくないんです。
そのために一旦、筆になるんです。変なことですが、こう、一生懸命に書いていると、あるとき、ある一瞬だけ、筆になれるんです。そうしたときに書いたものは、いかなる不自由に晒されようと、いかなる歪曲をかけられようと、そのあとで、わたしの人間として大切にしていたい部分に呼びかけてきてくれる気がするんです。わかりますか。

12　小熊英二『単一民族神話の起源――〈日本人〉の自画像の系譜』「結論」より抜粋

日本民族起源論では、決定的な定説はない。人は星をつないで星座を描くように、断片的な史料をつなぎあわせて自説を形成する。だが本書でみてきたのは、国際関係における他者との関係が変化するたびに、自画像たる日本民族論がゆれ動くありさまだった。多くの論者は、日本民族の歴史と言いつつ、じつは自分の世界観や潜在意識の投影を語っていたにすぎない。

人間にとって、自分の過去を自由に語れることほど、魅力的なものはない。自分は汚れなき純血民族の一員かもしれないし、先住民族を征服した雄々しい騎馬集団の直系かもしれない。聖書に描かれた白人種の落胤かもしれないし、稲をたずさえ南の島から渡来した農業民の末裔かもしれない。形式道徳に縛られない自然児の子孫かもしれないし、異民族を安らかに同化した経験があるかもしれないし、女性が平等に遇された母系制の世界に住んでいたかもしれない。日本民族起源論がいまも昔も人気が絶えないのは、こうした夢を託せるいちばんの場だからだろう。

現代でも、民族の起源から「日本人」の性質を語り、それをもとに現代を論じる人びとは少なくない。だが冷静に考えてみて、民族の起源とされる数千年、数万年前と、現在の政治や社会のあいだに、何の関係があるというのだろう。両者を結んでいるのは、数千年前の列島の住人がすでに「日本人」であり、その性質が一元的に決定でき、かつそれが現在まで連続しているという、暗黙の前提しかない。

（中略）

日本にかぎらず、ほとんどの国民国家は、自分たちの起源の神話をつくっている。だが多くの神話の雄大さとは裏腹に、神話を求める心理の背景にあるものは現在からの逃避である。自分が〇〇人であるだけで誇ってよく、相手が××人であるというだけで攻撃してよいと正当化してくれる神話をもつことは、非常に楽なことだろう。

過去の神話化の本質は、他者とむかいあって対応をはかる傾わしさと怖れから逃避し、現在にあてはめたい自分の手持ちの類型を歴史として投影することなのだ。本書でとりあげた多くの論者の朝鮮、台湾、中国、南洋諸島、アイヌ、「欧米」、そして「日本人」観がひどく類型的で、それが歴史観として正当化されていたことは、すでに十分すぎるほどみてきた。そこには、現実に生きている人びと一人ひとりの姿は、ほとんど感じられない。人間が生きてゆく以上、あるていどの類型化はやむをえない。だが、直接にむかいあいながら少しずつ類型をつくる努力を怠り、わずかな接触の衝撃にすら耐えきれずに神話の形成に逃避し、一つの物語で世界を覆いつくそうとすることは、相手を無化しようとする抑圧である。この逃避こそ、あらゆる神話の起源にほかならない。

本書の結論は、いたって単純だ。神話に対抗することは、ある神話を滅ぼしてべつの神話にいれかえること、たとえば単一民族神話を批判するために混合民族神話をもちだすことではない。求められているのは、神話からの脱却だ。それは、若干の労力を要する。年齢と経験を経るごとに、人間の知識在庫は蓄積され確信を増し、一方で相手と一人ひとり誠実に対応する体力は低下してゆく。その過信と疲労の隙間に、神話は忍びこむ。だが、そのことに意識的となり、神話に囚われる一歩手前で踏みとどまるだけの力は、誰しももちあわせているものと言じたい。

異なる者と共存するのに、神話は必要ない。必要なものは、少しばかりの強さと、叡智である。

13

小熊先生はしばしば両肘を直角に曲げて両手を上にあげて笑う。だから、ゼミ生のあいだでは、小熊先生の真似をするときにはこうやって両手をあげて笑うのが通例である。

成れないそれはしの思人ないうにいはでんすよ、ですね、普通
にはたれ成るうんでもすたまねぐみ……みやぐしてはまにた。

再び、第5詩 ムケッディメ Muqeddime

（ウイグル伝統楽曲ムカーム第一部ラック『ムケッディメ』書き起こし）

سەنتارىم تارىغا جان رىشتەسىدىن تار ئەشىپ سازلىسام،
さたああああああああぁぁああああああぁぁああああああああああ
ああるがあちゃるがんんりふしぃ
りすふしぃいいいいいいいいいいいぇいいいえいえいいえええええ
むかたっついしさたああああむ

ئانىڭكىم نالەسىدىن بىنەۋانىڭ كۆڭلىنى ئاۋلىسام،
あねええええぇぇぇえええええええゆうんなあれしいなわああああねえええ
びいなわああねええええええぇぇぇええええええええん
くううねええあぶさああええあえるるううううううううううう

مۇقام ئالسپ مەقام ئىجرە مەقامى دىلغا جان قىلسام،
まるかあああああぁぁぁああああああぇあああああ
あむまああねるかええむしれええええええええ
まるかはむにいいいめええええにめえええええええ
りびるっさらあああああああむ

مەقاملارنىڭ ئاتاسىنى ھۆسنەيىنىي ئەجەم دەرلەر،
むまむめはああああめええええめるひっっむさるさあああるへい
あねむおむでへいいいいいいいいへえええええええへえええへえ
おんびぃでぃめんちょるさああむうううううううむううむ

بۇلاردىن يۇقارىكىم يەردەئى بەيادىنى چالسام،
めまかあむのにええええんおっとぅしぃにいいいえええええ
うわあああああああんあああいうふうせぃむううう
あじぇんんむううええええええええゆぅへえええええぃぃぃぃぃぃ

بەيادى ھەق تەئلا يادىدا چالسام بەيا-بەيكىم،
うらああああああああびりぃむぉおぶりぃきぃいいいむ
へるでぃいいいいぃぃいいへええええへえええへええええい
ばやあでぃいいめええんえちょるうさああむうううううううふううう

كۆڭۈللەر بنەۋا بولغاننى بلسەم نەۋا چالسام.

ばやああでぃいいいいへえええんあぶどおおっやちゃるさああああむ
ちゃるさあああうあううううううああうううあああああおおむ
ぺいやああむぺいてぃいいいへえええへ

ئارالاپ چالسام ئۇششاقنى. غەزەلنى راكغا يەتكۈزسەم،

くゆぐうううるなああううううらんでぃいらわんむっっふるせゅむ
うるせゅうううううええうええええ
あああなわああああちぇるせええええうううううむ

شەبستانۇ سەھەرلەردە مۇشاۋرەك،پەنجگاھ چالسام.

あらああああああああおああああああおおああ
あぶちゃるさっむむっしぃいでぇえええ
がじゃるにぃいいいいいいえいいえええあっぐりぃきえええるっさあああああむ
しゃびいいいいええええうすかぶっるせえええへええさむしゃうへええ

ئراقۇ چەببيات،ئۆزھالدا فەيزىكم يەتەر بولسا،

むしゃうれええいいいぃぃえええええへめえええええいうええええい
うえぺぇんじがああああちゃるさあああむうぅぅぅふぅぅぅぅぅうううう

تلەپ خۇرشدى ۋەسلن سۇبھى دەمدە چەھارگاھ چالسام.

いらあくちぇええむべやあっくちゃるさあああむ
うああぺいじぇいちいいちぇええびてぇえええるさあああむ
うううううぅぅぅぅうううふふうううう
てぃれえええええへえええくるしぃいでゅぺんでええでええびてんでええ

يەتپ ۋەسلگە ھممەتنڭ جۇدالق تاغدن ئۆتسەم.

すっっびてんでえええええうううううえええへええええ
へえええいいちゃあれがああちゃるさあああああむうううううう

ئۈچپ ۋاسلڭ شەرابدن قلپ تەڭكەش سەگاھ چالسام.

へりでぃいめしれっうううゆううあああえええええええ
へえへでっすぐむうにいいいへ
ぼろぉおいいいいいいええええいいいいいいいいええええいえ
めすとゅむとぅすなああへ

كەل ئەي مەشرەپ قەدەھ سۇنغلى بولاين مەستى مۇستەغرەق

べぶりぃいいいえええへえええむけえっでぃさりぃいけんめでぃけえええ
あようだるりでぃいいいいえいいいえ

بر ئەلگە كاسەئى تەنبۇر برگە جامى مەي ئالسام.

でぃぃいいいりいいいいひいいいいいりいいいい
じゃあむねえいいいいあぶさあああるぅぅぅるぅうううぅぅぅぅ

二〇二四年一月二十六日　二十時　調布　前頁の書き起こしについて

「ムケッディメ」はウイグル伝統組曲「ムカーム」の序曲にあたるような音楽であり詩であり踊りである。サリナさんから借りたビデオ『On ikki muqam』の第一巻を聞いて、その詩の音楽をひらがなに書き起こしたものが、前頁の「ウイグル伝統楽曲ムカーム第一部ラック『ムケッディメ』書き起こし」である。0.25倍速、0.5倍速、1倍速、2倍速と再生速度を変えながら何度か聞き直して、書き取った。「ムケッディメ」のようすと、ムケッディメに反応する筆者の耳をありかたを感じ取って欲しい。また、ここで表記されているのはアラビア式ウイグル文字であるが、ムケッディメはもともとチャガタイ文字で書かれており、コンピューターではチャガタイ文字を表せなかったため、このような表記になっている。

映像を再生し始めると、サタールの弦の音が幾重にも震えながら響いてくる。馬の鳴き声のような、草の鳴き声のような、長いばゆばゆの音に、ちゃるちゃると小さく弦を指で弾く音も混じっている。サタールの音だ、これが噂に聞くサタールの音だ、と思っていると、長く伸びたばゆばゆに、伸びやかな男の人の声が重ねられる。すさとぅぅぅうあああああああある……平たい声でウイグルのことばが発音されて、ああ、「サタール」という言葉から歌い出したのだな、とすぐに気がつく。低いのか、高いのか、わからないような声で、サタールを左手に抱えた男性が、真昼の陽光に照らされた緑広がる峰峰を眼下に眺めつつ、歌い始める。若いのか、年をとっているのか、わからない声で歌う。二十代なのか、五十代なのか、もしかしたら七十代なのかもしれない、どんな年齢だとしても、不思議と納得できてしまいそうな、一喉多重の声が、サタールのばゆばゆの音に混じっている。声は震えながら山の尾根と谷が繰り返すように高く低く抑揚するが、声色や声質が変わるわけではない。なにか、ひとつの言葉をながくながぁくのばして話すかのような、コミュニケーションを行う発音ではなく、音を巨大な大地に響かせるために、西から東へと、北から南へと、馬馬も駆け、緑の館が広がり、湖面が揺れる大地へと、広く長く遠くへと届けるために、かぎりなくひきのばすような、そういう声で歌われている。そう感じる。だから、ひらがなで書き起こした。ひとつのことばが、ながくながくながくひきのばされていく、そのさま。

二〇二三年十二月二十二日　十二時　国際展示場

「ムカームの説明については、本に書いた通りで良いですね。」

とサリナさんが話す。後日、本の担当編集者である母に「[Muzika（ムズィカ）]音楽」の章のテクストデータを送信してもらう。

――[Muzika（ムズィカ）]音楽

ウイグルには古典音楽、民謡（民族音楽）、舞踊音楽、物語音楽、現代音楽などがあります。

古典音楽　Klasik muzikiliri（キラシキ　ムズィキリリ）

ウイグルの代表的な音楽といえば、Muqam（ムカーム）と呼ばれる古典音楽です。複数の楽曲が連続して演奏される組曲のことで、2005年にユネスコの無形文化遺産に登録されています。伝統的な楽器を用いて演奏され、旋律に特徴があります。

ムカームは、短い序曲のMuqeddime（ムケッディメ）、楽曲であるNeghme（ネグメ）、叙事詩であるDastan（ダスタン）、舞曲であるMeshrep（メシュレップ）の4つのパートから成り立っています。長く自由な旋律から曲が始まり、特徴のあるリズムへと変化し、徐々に演奏の速度が上がっていきます。

ウイグルの地域ごとに異なるムカームが存在しますが、南西部のカシュガル地域で演奏されているムカームは、12ムカームと呼ばれ、約300曲で構成されています。16世紀には、ヤルカンド・ハン王国第2代国王Sultan Abdurashid Xan（スルタン アブドゥッラシード・ハン）の妻で詩人の音楽家Amannisaxan（アマンニサハン）によって、民間に存在していた歌舞音曲が整理・体系化され、古典音楽の集大成であるムカームの基盤となりました。

ムカームは“一つ演奏するのに2時間かかる”といわれる長い音楽です。12ムカームをすべて記憶して演奏できる人はほとんどいないといわれ、お祭りや祝いの席ではムカームの一部が演奏されるケースがほとんどです。カシュガル地域にあるMekit（メキット）県では、12ムカームよりも古い様式のDolan muqam（ドラン・ムカーム）がよく演奏されています。

12ムカームの名称

Rak（ラック）
Chebbiyat（チェッバヤット）
Sigah（シガッ）
Chargah（チャルガッ）
Penjigah（ペンジガッ）
Uzhal（ウズハル）
Ejem（エジェム）
Oshshaq（オッシャック）
Bayat（バヤット）
Nawa（ナワ）
Mushawrek（ムシャウレック）
Iraq（イラック）

「では、ムカームのビデオを持ってきましたので、見せますね。リンチャンは……まずはこれを見ながら、感じたままに書いてみましょうか。」

と言って、サリナさんがPCでムカームのDVDを読み込んで再生ボタンを押す。ゆったりと音楽が流れ始める。その音に重なるように、低い声の男の人があぐらをかいてサタールを手に悠悠とうたう。狼の遠吠えのように天をあおいで、呼びかける。草原が映る。山が映る。ラクダに乗って砂漠を移動するキャラバンが映る。湖が映る。古ウイグル語でうたわれる。

「これは雪解け水が解けてできた湖ですよ。川魚は南の方のひとしか食べませんよ。裕福の民族ですね。このようにして、ムカームではひとびとの生活習慣を伝えているんですね。わたしは会社に忘れ物をしたので、リンチャン、このビデオ見て感じたままに詩を書いてみてください。」

そういってサリナさんは部屋を出て行った。わたしに古ウイグル語がわかるはずがない。でも感じたままに詩を書くしかない。ビデオが流れ続けている。画面を凝視しながら、音だけに耳を澄ませながら、必死で詩を書き留めた。映像の長さは全部で1時間6分3秒。その間一秒も休まず書いた。誤字を直す時間もなかった。本当の憑くぽえとりぃじゃないか……などと思いながら。

以下、成田凜、必死のメモ詩（誤字脱字・原文ママ）

序章

わたしたちがここに居て
産まれてきた
生きているということ
ただそれだけのなかに長く続いていくわたしたち
わああ、ああああ、ああああ
ありがとう
寄与（原文ママ）、森よ、湖畔よ、命を暮れたすべてのもの
わたしに教えてくれた美しい文化
歌えるということ
想えるということ
母よ、父よ、ここに産まれた君の末永い幸を祈ります
赤子よ、小さい赤子よ、きみが泣くから教えてあげるのですよ
君を愛して君を来るんだ母上や父君は君が生まれるまでずっとm（原文ママ）ほほえみのなかで暮らしてきた
ミツバチ、熱いお茶、からからに干上がりそうな日にも土の壁が護ってくれた君の家
煉瓦の窓から、顔を出す女の人、イスラーム模様に寄りかかって眠る初老の男性
三つ編み、花束、日の束、寒い日も暑い日も、月が白く燃え上がる火も、君たちの産まれる日まで、永遠にありがとう
そのすべてにありがとう
ここで高らかに歌い続けます、永遠に

一部　チャガタイ「ブリンチターザン　はじまり　1」

王様の部屋にお姫様が生まれた
誰もが歌い、緑に囲まれて、桃色の衣を
来て、鳥たちのように舞い踊る、祝福の踊りがある
誰もが楽器を弾いて、踊った
新しい日を祝った
細い指先をたやらかに掲げて歌い、わたしたちは風に風に風になります
もしどんな日が来たとしてつも
一緒に燃えましょう
一緒に歌いましょう
一緒に祈りましょう
美しい眉　美しい唇　美しい衣服　美しい食べ物　美しい言語に　祝福をしましょう
わたしたちの姫よ　わたしたちの姫よ
わたしたちの王よ　わたしたちの王よ
ほがらかに笑いましょう
太陽に感謝しましょう
太陽よ　太陽よ　神様よ　神様よ
美しい山　美しい水　美しい河　美しい砂漠
祈りましょう　祝いましょう
ありがとう
母なる王よ　父なる王よ
緑色の輝く殿で美しい実を採りましょう
祈りましょう美しい景色
美しい湖畔　美しい水しぶき
美しい雪山　美しい春　美しい夏　美しい季節がくるので
新しい命が芽吹くのですよ
命の水よ、ありがとう
國の過去を教えましょう
母と父はあるとき森で出会った
美しさに父君は目と心を奪われた
二人は目配せをした
母君が振り返って
父君の眼の中には三つ編みと赤い花が残った
……（以降、４千字程度のメモが続く）

二〇二三年十二月二十二日　十四時　国際展示場

「リンチャン、どういうふうに思った？」

と帰ってきたサリナさんがわたしに尋ねる。すっかり体力が尽きたわたしが「ウイグルのこと少し分かった気がします」と答える。

「十二ムカーム（おんいつき）は、みんなそれぞれの服を着て集まって踊ったり、祭をお祝いしたり、その時代は王の時代なので、お姫様を好きになるのは狩人たちですね。男性は女性を好きになることが多いよね。

歩くようになると踊る
話すようになると歌う

わたしたちにはこんな言葉があるんです。小さいときから、音楽、芸術を自然に身につけるんですね。画像見たら分かるけどみんなが幸せな時代だった。王がコントロールしてるんです。十二ムカームをここまでまとめるんです。歌うたって踊る、うたったり踊ったりしたとき、王がハンターにでたとき、美しいメロディーを聴いて、カルン　ティンタンタンタンの音楽を聴いて探し回るんですね。あるときに寄った村で、美しい女性が歌っていたのに気がついた。そのメロディーだったんです。女の人たちが水瓶で水を運んでいるとき、彼女の声の美しさだけではなく、あまりの美しさに惚れてしまった。王の身分を隠して狩人として会いに行くんです。家に行って、彼女に歌ってもらう。彼女は男性の前で歌うことはできないので、家の中で歌ってあげると、彼はありがとうと言います。彼が王なのはわかっていたので、彼女、アマンニサハンは、お父さんに許可をもらって王についていった。彼女は歌が上手。お父さんから習ったんですね。彼女が音楽をまとめなければならないといったとき、王がそれに賛成しました。彼女はあちこちに行く必要があった。色んな地域の有名な御学者たちを王の所に集めて、苦労して研究してまとめます。まとめおわったところで三十八歳くらいで子どももなく終わった。でもムカームは彼女が残した宝ですよ。言葉が分からないリンチャンにも恋愛小説だとわかりましたね、すごいことですよね。恋愛というのはすべての民族の生活習慣とこれまでの時代の痕跡をすべて残したウイグル民族の宝です。アマンニサハンも色んな名前があったなかからこういうのを探したんですね。ムカームは、音楽に残したウイグル民族の記憶の教科書とも言えますねえ。」

サリナさんはその後4時間かけてムカームの解説と内容の説明をしてくれた。ムカームのすべてを訳すのも、一章に当たる「ラック」だけを訳すのも量が多すぎて大変だ、というわけで、ラックの中の序詩にあたる「ムケッディメ」だけを訳すことになった。

「ラックは三つのタイトルに分かれています。

1、チョン　ネルメ　クスミ

ムケッディメ

ブリンチ　タ　アズザッ
ジュラ
サネーム
チョン　サリカ
テューティンチ　アハーム
メルゴォーリ
ピシレェーウ
メルゴォーリ
チョン　ネグ　メク　チューシュル　ギスィ

2、ダスタン　クスミ
ブリンチ　ダスタン
メルゴォーリ
シキンチ　ダスタン
ウーチンチ　ダスタン
メルゴォーリ

3、メシレップ　クスミ
ブリンチ　メシレップ
ブリンチ　アハン
シキンチ　アハン
シキンチ　メシレップ
ブリンチ　アハン
シキンチ　アハン
メシレップ　チューシュル　ギスィ

というふうになっています。全部合わせて 4492 行ありますね。止まれずに２４時間踊り続けられる音楽です。」

「じゃあさっそくムケッディメの飜訳をしていきましょう。」

二〇二四年一月十二日　国際展示場

ムケッディメの飜訳作業は二度行われた。一回目は、二〇二三年十二月二十二日に、二回目は年をまたいで一月十二日に。

一回目　二〇二三年十二月二十二日の飜訳の手順

①まず、筆者成田が、ムカーム第一部ラックのビデオを視聴しながら感じたことを詩にのこす。

②次に、サリナさんが自身の PC に入っているウイグル語辞書を参考しながら、古ウイグル語で書かれているムカーム第一部ラック序曲ムケッディメを、

一行ずつ成田に口頭で説明する。

二回目　二〇二四年一月十二日の飜訳の手順

①まず、成田が、萩田麗子著『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』をひととおり読む。

②次に、成田が、サリナさんに対して、萩田先生の飜訳を説明する。

③その説明を聞いて、サリナさんが、飜訳を自分なりに補足・説明・修正する。

④成田とサリナさんのあいだで何往復かの質疑応答をして、訳のエッセンスや方向性を確定させる。

その二（ふた）またの手順を踏まえて、ムケッディメを日本語の詩にしてみよう。

二〇二四年一月二十一日　横浜

わたしにとっての飜訳には、ふたつの方向性がある。直訳と意訳、そのようななまぬるいものではない、（完璧な）逐語訳派と（命をかけた）再生派である。

ここでまたしても駿台予備校時代の思い出を挿入。お茶の水二号館に通っていたわたしは、午後の授業終わりには神保町の古本街へとでかけ、いわゆる古典文学、近代文学をあさるのが趣味だった。ある日の英語の授業にて、先生が飜訳について語ることがあった。「飜訳には、伝統的に二つの派閥がある。」先生は吉川幸次郎と大山定一の往復書簡『洛中書問』をひいて、そう述べた。授業後に先生に詳しく尋ねると、後日『洛中書問』のコピーをくれた。本編を読んでみたいと思い、神保町の古本屋を渡り歩いたが、結局一年かけても見つけられず、断念。結局、大学入学後に慶應の三田キャンパスから取り寄せて読んだ。『洛中書問』は簡単に要約すれば、次のような手紙である。

吉川幸次郎によれば、（少なくとも学人としての飜訳は）原語にかかるあらゆる力学を丁寧に表しきった逐語訳、完璧な国語による言語の再構築こそ飜訳の理想である。

（文人の翻訳に対して）学人の翻訳は、それとは道を異にすべきであります。それは真実の掩蔽を悪む精神が、すみずみ迄もみなぎり渡ったものでなければなりません。（中略）広く原語が帯びるだけのものを、つまりもとの言語がその言語の世界の中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で国語の世界で象徴し得る国語、それを検索することでなければなりません。完全にそうした役目を果し得る国語は、あり得ないということも出来ますでしょう。しかしそれをほぼ完全に果す国語は、いかなる場合でも、必ずあると、僕は僕の経験から、ほ

ぼ確実にいうことができます。

つまり僕のいう翻訳とは、二つの民族の言語という矛盾した存在の中に、統一した方向を見出そうとする努力であります。

かくして思い当った訳語が、音声的にも原語との類似、ことに多くは子音の類似を示すことがあるのは、面白いことであります。近頃ではそれを逆用し、訳語をさがしあぐねた時には、まず音声の類似した国語を凝して見たりしています。

原文よりも、より以上の明晰度を、またより以上の文学性を、注入しようという意識は、文士の翻訳としてはともかく、学人の翻訳としては、殊に抑えらるべきでありましょう。それは真実の掩蔽であり、学人として、莫大の罪だからであります。（中略）「私が最も腐心したのは、正義原文の曖昧なところを、むりに明晰にせぬことであった。私は、明晰な国語を捜すよりも、むしろ不明晰な国語を捜すのに、苦労した」（中略）現在の国家に最も必要なものは申す迄もなく科学性です。

使う人、使う場合によって千差万別、一一に意味を異にする言葉、それがどの辺にさまよい、落ち着いているか、それを測定するのが、文学研究の道であり、そうした測定を可能にするのは、言葉の使用者、すなわち話者の心理を洞察することによってのみ可能である。つまり、文学の研究というものは、言語を資料とする人間学でなければならぬむねを、前便では申し述べたのでありますが、そうした人間学としての言語研究が行われてこそ、はじめて翻訳は可能であります。

（大山に対して）詩の翻訳は何よりも「詩」でなければならず、戯曲の翻訳は何よりも「戯曲」でなければならず、小説の翻訳は何よりも「小説」でならぬからであるむねを、いっておられます。しかし「詩」とは何でありますか。「戯曲」とは何でありますか。「小説」とは何でありますか。「詩」「戯曲」「小説」という概念を成立させるものは一つ一つの具体的な作品であり、一つ一つの作品を成立させるものは実に一つ一つの言葉です。むろん一一の言葉の集積は統一した方向をもつ故に作品が成立するのであり、あまたの作品は、統一した方向に流れる故に、「詩」「戯曲」「小説」という概念が、凝結するのでありましょう。従ってこの統一の方向を重視して、一一の言葉は或いは犠牲に供すのも已むを得ないとする態度も、可能でありましょう。貴説はむしろそちらに傾くようであります。しかし一一の作品を度外にしては、「詩」「戯曲」「小説」というものはなく、一一の言葉がなければ、作品は存在しません。しからば、「詩」ら、「戯曲」は、「小説」は、実に一一の言葉の中にあるという見方も可能であります。従って一一の言葉を丹念に追跡し、翻訳し、かくして丹念に移された一一の国語によって、再び「詩」を、「戯曲」を、「小説」を、リコンストラクトするという態度も可能でありましょう。私はこの態度を固辞するものであります。

これに対して大山定一は、飜訳は強烈な宿命、命をかけて発せられた原語の「再生」であると反論する。

立派な翻訳はあくまで強烈な文学創造の精神からうまれねばならぬ

翻訳は西洋文学の学問的研究とは何のつながりもなく、もっぱら日本文学者ときての自覚と実力が翻訳の可否を決定する

僕が翻訳の問題を考えたい要の中心を一言で申せば、詩の翻訳は「詩」ではなければならぬ、戯曲の翻訳は「戯曲」でなければならぬ、同様に小説の翻訳は「小説」でなければならぬ、ということに尽きるのであります。（中略）シェークスピアは決して「あるかあらぬか」などと可笑しな言葉は語っておりませぬ。（中略）シェークスピアは to be or not to be というわずか五語の言葉に、はっきり彼の生命の全体をかけています。だからこそ古来多くの学者が苦心してさまざまの解釈をくだしてもなお解き切れぬ大きな問題がのこるのだと僕は考えます。（中略）このハムレットの大きな無際限の問題を戯曲的に生きた言葉でとらえたのでなければ、僕は翻訳でないと思います。そこまで行って、初めてそこから本当の文学研究が出発するのでないでしょうか。

（吉川の言葉を引用して）「文人の翻訳をなし得る能力をもちながら、しかも敢てそれをなさざる学人にして、始めて学人の翻訳をなし得るのであり、逆にまた学人の翻訳をなし得る能力をもちぬがら、しかも敢てそれをなさざる文人にして、始めて文人の翻訳をなし得るというのが、事実であるように感ぜられます。鴎外、二葉亭は、おそらく後者の例でありましょう」とありましたが、僕は全部そのまま賛成であります。ですから、小生がさきに、「外国文学研究家がただ外国語が読め、外国の事情の一端を知っているという理由から、文学作品の内容を多からず少からず正直につたえただけのものになっては、翻訳という仕事は所詮通弁の仕事とおなじく、随分くだらぬものよと言わねばなりません」と申したのも、外国の事情の一端を知り、外国語をかじっただけで一応外国文学が読めると申したのでは毛頭ありませぬ。（中略）翻訳である以上はすみずみまで親切な愛情がゆきとどき、入念の仕事でなければならぬ、と申したつもりです。

翻訳の「忠実」ということが、ぼんやり僕等が考えているほど明白でないことがわかります。翻訳はどのように忠実であってもEbenbild（相似）ではありません。翻訳は結局 Wiedergeburt（再生）であるといわねばなりません。何よりも愛と親切の仕事であります。

原作を読みとる一個人の心のはたらき、原作をうつしとるめいめいの眼のはたらき、即ち解釈、理解、追体験、別な国語による表現、というような困難な個別的操作を経なければならぬ以上、翻訳は「再生」であると定義するのが最も確実のようであります。

僕が所謂学人の翻訳、文人の翻訳を一つにして、いや出来るだけ二つをちかづけて考えたいというのは結局翻訳は Können（可能）でなくして Sollen（当為）であるという理由にもとづきます。自己の学力や才能で出来るという翻訳には、まだ一枚になり切っていないものがあります。是が非でもしなければな、ぬ、出来るか出来ぬかなど構っていられぬという「宿命」の切迫した場合において、初めて一枚になった翻訳が出来ると言えましょう。

学問も芸術も翻訳も創造も、研究も移入も、すべて打って一丸とした大きなイデーのもとに、強烈な人格の行として実現したい

詩の翻訳はどこまでも「詩」でなければならぬ。（中略）その一点において、翻訳は尋常なコンメンタール以上に深く作品の奥にはいらねばなりません。翻訳は註解や総釈のように部分的な理解にとどまってはならぬものです。むしろ世間普通のコンメンタール以上にこまごまとゆきとどいたもの、血と血が触れあって一つにとけたものが「翻訳」であると申さねばなりません。

心広く直にして、きつくひつぱらず、少しもたゆまず、心のかたよらぬやうに、心をたん中におきて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎの刹那もゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。

これは宮本武蔵の「五輪書」の言葉です。こういうものが翻訳家のこころの構えでなければならぬと僕はかたく信じています。

（以上、大山定一、吉川幸次郎『洛中書問』1974 より引用[14]）

この聞き書きで記されている飜訳のプロセスは、ウイグルで育ち、ウイグル古典文学を研究し、日本でも文学研究を行っていた在日ウイグル人に、ウイグル語で書かれた詩を飜訳説明してもらったものを、日本語の詩人（アーティスト）である筆者が聞き取って、さらに強度のある日本語の現代詩に飜訳していく、というものである。そこには、「美しいウイグル語を美しい日本語へ」という第1詩執筆時のスローガンに続き、読み手と共に現実の海に潜りながら、「願いながら書く、困りながら書く」という第2詩の思い、「文学に託す時代（とき）の資料」という第3詩の意識、「憎しみも祈りも、アナ ティリムに縒（よ）られていく。依（よ）り代（しろ）みたいだと思う。」「流（やく）し直しましょう、リンチャンの受け取った通りに。」「だからわたくしが舟になったのです。」と受け継ぎ流れ、託されていく、国語の性（さが）を受け容れる第４詩、「書く！」第０詩へと、飜訳活動の変遷を通じて変化を繰り返しながら、編まれていった飜訳プロセスへの意識がある。主題「在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳を通じた〈記憶と想像の聞き書き文学〉」が表すのは、本研究の対象と方法論である。「在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳」が対象であり、〈記憶と想像

の聞き書き文学〉が方法論である。かつ、現代詩飜訳は〈聞き書き文学〉の全文をもって完了するため、対象の中に方法論が含まれ、方法論の中にもまた対象が含まれるという循環入れ子構造になっている。第1詩を例にとって説明すると、

十月頃、冬が訪れる。アフテェィレッ（ポプラ）の葉が落ちる音で、ひとびとは冬の到来を知る。東京には四季が巡るが、北緯にして八度高い（おおよそ札幌と同じくらいの緯度）ウルムチには、夏と冬が交互に巡る。そういえば、この間、アイヌ語を大学で習ったときにも、サㇰ（夏）とマタ（冬）が繰り返すというようなことを聞いたなと思い返す。

چاڭچۇن دېگەن بەكمۇ يىراق جاي
بارالمايدۇ مەن تىنغان ھاۋا
ھەر ئويغانسام روجەكتە كۆزۈم
تالا قارا، ئۆيمۇ قارا.

ياپون تىلى ئىچىدۇ ئاستا
كۆزلەر تامان ئاققان رېڭمىنى
كىم ئۆگىنەر مېنىڭ تىلىمنى
سۈرۈشتۈرسە مەنمۇ بىر لوغەت.

1995-يىلى، ئۈرۈمچى
(ئايالىمغا)

遠い遠い日本へと　飛行機にわたしのことも乗せて連れて行って
連れて行かないで　ここへいて

「『日本の学校で日本語を話していたら、きみはきっと、心も日本になってしまうだろう』と言っているんですよ。それがさみしい。だから、彼は、こう続けるんです。」

きみが話す言葉がきみになっていく
ふたりで話す愛があるのに
きみは異国の言葉を話す
わたしの言葉をきみは聴けない
わたしだけが辞書なんだから

二〇二三年六月三日　十四時　新宿

「この人の詩は、十人が読めば十通りの読み方ができる詩ですよ。難しい詩ですけれども、はっきりと書くのではなくて、一つの言葉に色んな意味を込めて書いているから、誰が読むか、いつ読むかで変わります。りんちゃんがウイグル語でこれを読んだら、また全然違うように思うと思いますよ。」

「わたしが、りんちゃんにたくさん説明します。ウイグルのことたくさん知ってもらって、心をウイグル人にして、ウイグルに行ったことがなくても、ウイグルに居るような気持ちになってもらいます。そうしないと詩を訳せませんから。りんちゃんの詩はとても素晴らしいから、一緒に知って、一緒に作っていきましょう。」

この箇所では、次のような順序で文章が続けられ、その総体として「サリナさんから成田凜が聞いた『アワズスィズ ティル』の飜訳」が文字に起こされている。

①筆者によるウイグルの空想紀行
←
②ウイグル語『アワズスィズ ティル』の原文のテクストデータ
←
③ウイグル語『アワズスィズ ティル』の原文に付録されていた執筆年、場所の情報のテクストデータ
←
④サリナさんの『アワズスィズ ティル』についての説明をもとにした筆者の日本語現代詩
←
⑤サリナさんが行った『アワズスィズ ティル』の説明の文字起こし
←
⑥サリナさんの『アワズスィズ ティル』についての説明をもとにした筆者の日本語現代詩
←
⑦日付、時刻、場所
←
⑧サリナさんが行った『アワズスィズ ティル』の説明の文字起こし
←
⑨サリナさんの発言の文字起こし

このように、詩とサリナさんの説明、サリナさんの言葉そのもの、筆者がサリナさんから受け取った印象、といったものは飜訳と不可分に密接して描かれていく。方法論と対象の循環入れ子構造により、「なぜ飜訳するのか」「なにを飜訳するのか」「誰がどのように飜訳するのか」という問いが常に自分自身に対して発せられることになった。それゆえ、第1詩、第2詩、第3詩、第4詩、第0詩を通じて、目的意識や方法論は転転と代わりながら執筆されていた。

飜訳には二通りの方向性があると意識しつつも、わたしのウイグルへの理解では、完璧な逐語訳を行うには全然足りなかった。というか、「学人の飜訳」

ができなかった。だから魂をかけた「再生」もできなかった。サリナさんは「直訳ではなく、まるい飜訳をしましょう」と希望した。わたしの目の前で、サリナさんはウイグルから日本へ持ってきた大切な本を一ページずつ飜って訳して聞かせてくれていた。だから常に「在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳」を通じた「〈記憶と想像の聞き書き文学〉」を意識していた。飜訳という学問のことをいったん脇に置いて、藤田先生の文化人類学的なゼミのなかで聞き書きという方法論に専念できたのは、サリナさんの態度、およびサリナさんへのわたしの態度だけが理由ではない。現代詩の執筆、現代詩への飜訳（執筆）を行っているという意識がわたしのなかにあったからなのだろう。現代詩にアイデンティティと絶対の自信を持つわたしにとっては、「現代詩を書いていればいい」というのはとても気が楽であった。韻文、文化のコードといった表象のルールをしりぞけた、反発の自由表現としての「現代詩」は、「なんでもありの表現技法」であったから、『アワズスィズ ティル』の明らかなところも曖昧なところも、サリナさんが訳しきかせてくれたことをわたしが日本語にしながら飜訳をすすめるという複雑な構造も、現代詩になら詰め込めるだろうと考えた。難しそうだけれど上手いことやれば、まあなんとかなるだろう、と。

サリナさんは、一度、ひとりで「ムケッディメ」を読んで、じぶんで辞書を引きながら、わたしに対して飜訳説明を試みた。その後、日付を開けて、萩田麗子先生が日本語に飜訳した「ムケッディメ」をわたしから耳で聞いて、あらためて翻訳説明をしなおした。サリナさんは自分が萩田先生の文章を読むのに時間がかかってしまうからと、リンチャンが代わりに読んでくれますか、とわたしに尋ねた。その萩田先生は、『ウイグル十二ムカーム（维吾尔十二木卡姆、新疆ウイグル自治区研究学会・古典文学研究会編』を元に翻訳したと書いている。

本翻訳は一九九七年に北京の中国大百科全書出版より出版された『ウイグル十二ムカーム（维吾尔十二木卡姆、新疆ウイグル自治区研究学会・古典文学研究会編』をもととし、ミスラ数、曲数も同書を用いて算出した。

（萩田麗子『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』2014）

サリナさんは「ウイグル人がウイグルの伝統詩ムカームを訳すことにたいへんな意義がある」と意気込み、萩田先生の詩を確認、添削するかのように参考にした。

ムケッディメのような古典韻文詩にはいくつもの（それなりに厳格な）書き方・読み方のルールがある。だから、普通、飜訳をしていこうと思うと、まず第一に原文の言語を十分に読める必要があり、その上で、その詩史や韻文・ルールの理解、表象コードの理解などが必要で、それらを日本語に逐語的に訳していくことになりそうである。例えばこれが大学受験の外国語のテストだったら、わたしはそのように訳したことだろう。しかし、そのように「厳

格に」訳そうと試みても、時空間を隔てるふたつの言語の崖を渡す橋が逐語訳的に完璧なときにも、読者の側に原語の持つ「力」を伝えるためにはまた他の工夫が必要になるかもしれない。

萩田先生の『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』には、次のように詩の飜訳、ムカームの魅力について記述されている。

詩というものは、厳密な意味で翻訳は不可能である。他の言語でもとの詩の韻律を表現することができない以上それは仕方のないことである。詩の美しさは半減するか、あるいはそれ以上に損なわれるであろう。また、十二ムカームの歌詞の翻訳には、それ以外にも難しい点が生じる。十二ムカームの歌詞の約三分の二は冒頭で紹介したガザルという定型詩で占められているのだが、ガザルはイスラム神秘主義と深く関わりながら発展した詩であるから、比喩と象徴の約束事を知ることがどうしても必要で、注釈の部分が多くなってくるからである。十二ムカームの歌詞を味わうために、ここでは比喩と象徴の必要最小限の説明をしておく。（以下、ガサル、スーフィー、それらに連してムカームのコードの説明が続く。）

ウイグルのムカームが成立するには音楽の力、舞踊の力、そして詩の力が必要であり、どれか一つでも欠けたらそれはムカームではなくなる。ウイグルのムカームは歴史の大きな荒波にさらされ、滅の危機に顔していたが、今、多くの研究者の力により、その存在を広く世界に知らしめることとなった。しかし、研究者たちが復活させたというよりも、ムカーム自身が力を持っており、研究者を利用して己の復活を図ったように思われて仕方がない。ムカームは人にそう思わせるほどの魅力を持っているウイグルの文化遺産なのである。

現在では映像機器やインターネットを利用して、映像化された十二ムカームの舞台を楽しむことができるようになっている。本訳とともにそれらの映像も楽しんでいただければ、さらに十二ムカームを深く味わっていただくことができるであろう。

萩田先生は、次のように注釈を附しながら、韻律をできるかぎり守って次のように「ムケッディメ」を飜訳した。（以下、萩田麗子『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』2014 より）

この命撚（いのちよ）りて　我がサタール（1）の絃と成さん
その音色（ねいろ）　不幸なる者が心　慰め癒さん

ムカームに深く身を沈め　心にムカームの魂　留め置かん
天　我をして愛の道に導きたれば　あの人の前にて奏（かな）でん

フサイニー（2）　アジャム（3）は　ムカームの祖と言うなれど
さらに高みに位（くらい）する　美しきバーヤート（4）の調べ　奏でん

崇高なる王を想い抱きて　バーヤート弾き続け
心悲しき者（ビーナワ）　在（あ）るを知りたければ　ナワー（5）を奏でん

ガザル（6）をラーク（7）に添わせ心高ぶらせ　時にウッシャークを奏で
日毎夜毎（ひごとよごと）　ムシャーワラク　パンジガー弾き続けん

イラーク　チャッパーヤート　オズハール弾きて心の魅かれたれば
太陽の如きあの方との逢瀬（おうせ）を願い　朝（あした）にチャハールガー奏でん

別離の苦しき山を乗り越え　あの人との逢瀬　叶いたれば
喜びの酒飲みて　あの人に伴（あわ）せ　スィガーを奏でん

さあ　マシュラブよ　美酒（うまざけ）飲みて　心ゆくまで酔わん
タンブール（8）片手に取りて　いま一つの手に　酒杯掲（かか）げん

（1）細長いと共鳴胴を持つ全長一メートル半ほどの弓で弾く弦楽器。
（2）（3）ともにムカームの名称。
（4）十二ムカームの第九番目のムカーム、バーヤートには、旋法の名称のほか、古代ウイグル語で「神」の意味がある。
（5）十二ムカームの第十番目のムカーム、ナワーには、旋法の名称のほか、「（賞賛または嘆きの）声、歌、メロディー」の意味があり、ビーナワーのナワーの音に掛けてある。
（6）主に愛を主題として詠まれる定型詩の名称。
（7）十二ムカームの第一番目のムカーム、ラークには、旋法の名称のほか、「曲調」という意味がある。
（8）細長い棹と共鳴胴を持つ全長一メートル半ほどの、バチで演奏する弦楽器。

萩田先生の訳し方は、どちらかといえば逐語訳に近い、とサリナさんは考える。「この先生の訳し方はウイグル語のそのままですね。いいですね。」と言う。サリナさんは十二月に翻訳を試みた後、3人の友人に連絡して、ムケッディメに追加の詳しい説明をつけてもらったという。そのうちの一人がショークレトヤセン shohret yasen さん。春から東京藝大の研究生になるという方だ。協力してくれた方として名前と紹介を載せてもいいかとサリナさんの SNS の DM を通じて聞くと、

「姐…要不写 新疆艺术学院作曲教师，新疆民族乐团特邀作曲家吧 因为东京艺术大学顺利的话4月份才入学 ju…还没进学校」

と言って、その略歴を教えてくれた。そのショークレトヤセンさんほかがつけてくれたのは、

①古ウイグル語の本文の起こし（萩野先生の本によれば、これはチャガタイ・トルコ語らしい……）
②現代ウイグル語での説明文

という二つの文章だと言って、サリナさんが印刷された紙を見せてくれた。

サリナ「一聯（れん）目はどうなっていますか？」
わたし「前回のサリナさんは、『サタールの弦にわたしの命の愛を糸にして仕付けたよ』『音楽を通じてこの世の中の不幸な人たちの心を慰め

たい』と言って飜訳しています。」

サリナ「先生はなんと訳していますか。」

萩田麗子訳「**この命撚りて　我がサタール（1）の絃と成さん**
その音色　不幸なる者が心　慰め癒さん」

わたし「わたしのこの命を撚って、つまり、わたしの命や過去を糸みたいにこう束ねて、という意味ですかね。この命を撚りて、我がサタールのつる……げん……に成りたい、成りますよ。その音色が、不幸なひとの心を慰めて、癒やすだろう。こういうことを古語みたいな文体で訳しています。」

サリナ「そうですか、そうですか。それならほとんど一緒ですね。そうやって訳してください。」

こういうふうに飜訳の確認作業が行われた。

サリナ「二聯目はどうですか。」

わたし「前回は、『誰かがわたしの必要であれば助けてあげたい。ムカームを学んで、ムカームを染みこんで、ムカームを大事にしてわたしの命にしたい。何かを愛する心、メロディの前に、わたし、ムカームを弾きたい』と言っています。」

サリナ「ふうむ。先生は？」

萩田麗子訳「**ムカームに深く身を沈め　心にムカームの魂　留め置かん**
天　我をして愛の道に導きたれば　あの人の前にて奏でん」

わたし「ムカームに深くからだを沈めて（手を下に指さす）心にムカームの魂を（心臓に指先を向ける）留め置こう。天がわたしに、愛の道（にょろにょろと手をくねらす）へと導かせてくれたら、あの人の前で奏でよう。」

サリナ「ああそうですね。ムカームの中から自分の場所を選んで、ムカームをわたしの心に刻みたい。神様わたしに恋に落ちさせたら、わたしはその恋の前でムカームを弾きたい。そういうふうに訳してください。」

サリナ「三聯目はどうですか。」

わたし「えーと、どこだろう……（手元のメモの三聯目の説明に該当しそうな場所を探す。）これかな。『ムカームのおとうさん・ムカームを研究した人、全てを与えてきた。この音楽の続きを永遠に引き続けたい。彼らから学んだもの永遠に引き続けたい。永遠にこの偉大な、壮麗な、音楽を弾き続けたい』です。」

サリナ「あー、そうですか？　先生は？」

萩田麗子訳「**フサイニー（2）アジャム（3）は　ムカームの祖と言うなれど**
さらに高みに位する　美しきバーヤート（4）の調べ　奏でん」

わたし「フサイニー、アジャムはムカームの祖、お父さんと言うけれど、それよりさらに素晴らしい美しいバーヤートのメロディ……トーン、

音色、調べ……？　を奏でたい。です。」

サリナ「そうですね。「ウふュセイん」と「アジェんム」をムカームのお父さんと言えば、わたしは彼らのもっと上の「ベェヤット」という音楽を弾きたい。」

わたし「「ウふュセイん」、「アジェんム」ですか？　フサイニー、アジャムとは少し発音が異なっているように聞こえました。どっちで表記しましょう。わたしが聞いたままのと、萩田先生の表記と。」

サリナ「フサイニー、アジャムじゃなくて、ウふュセイん、アジェんムですねぇ。「ベェヤット」は9番目ムカームですよ。ここは萩田先生の訳を使いましょう。」

わたし「　　」

わたし「はい。」

サリナ「四聯目はどうですか。」

わたし「終わるまで弾く、命があるかぎり。これを永遠に弾きますか。壮麗な……　これはほら、サリナさんが自分の名前の由来だって、ほら、偉大な、音楽であるから、賢い人たちがつくった音楽であるから、心を失ったとき、もしわたしがそれに気がついたら、音楽を弾き続けたい。短い短い……？　音楽ぅ、長い長い……？　……？　短く短くひきながら？　長く続く音楽にしたい。です。」

サリナ「先生はどうですか。」

萩田麗子訳「**崇高なる王を想い抱きて　バーヤート弾き続け**
心悲しき者（ビーナワー）　在（あ）るを知りたければ　ナワー（5）を奏でん」

わたし「あー、すばらしく、えらく、尊い王を思って（腕で自分を抱きしめる）、バーヤートを弾き続け、悲しむ人がいるのを知って、いや、悲しむ人たちのために、ナワーを弾きたい。ビーナワーとナワーで掛詞ですね。そういうふうに訳しています。」

サリナ「そうですね。神様のことを考えながら「ベェヤット」弾いたら、心が痛んだ人たちのために「ナワー」を弾きたい。というふうになります。」

（ここでサリナさんに電話がかかってくる。一旦休憩になる。サリナさんを待っているあいだ、わたしは萩田先生の『ウイグル詩史』に目を通している。）

わたし「五聯目、いいですか」

サリナ「五ですか？　五……　五……　えーと、ペンありますか。」

わたしが鉛筆を貸すと、サリナさんが手元の紙に聯数を書き込む。

サリナ「はい、なんてありますか？」

――前回のサリナ「最後はながくラクに繋げてほしい。美しい朝、美しい日々に、ムシャウラク（ペンジガフ）を弾きたい。ムシャウラクというのは、演歌、民謡みたいなものですよ。時代の変化と、各時代の死なないヒーローと学者と研究者が

いるから、ということですね。」

わたし「前回のサリナさんは」

サリナ「前回じゃなくて、先生はなんと言っていますか？」

萩田麗子訳「**ガザル（6）をラーク（7）に添わせ心高ぶらせ　時にウッシャークを奏で**
日毎夜毎（ひごとよごと）　ムシャーワラク　パンジガー弾き続けん」

わたし「ガザルをラークに添わせて、心を高ぶらせて、時にウッシャークを奏でて、朝にも夜にも、ムシャーワラク、パンジガーを弾き続けたい。です。」

サリナ「ラックをプロみたいに弾きたい。ウッシャークも弾きたい。場合によって、ムッシャーウラッキとペンジガーを、朝か夜を引き続けたい。ということですね。」

わたし「六……」

わたし「サリナさんは、『そのひとたちの広さ、心の安定さ、そのひとたちの死んだら行く先を祈りながら、長い音楽を弾きたいです。音楽からその人たちの平安を願いたい。』と言っていました。で、萩田先生は……」

萩田麗子訳「**イラーク　チャッパーヤート　オズハール弾きて心の魅かれたれば**
太陽の如きあの方との逢瀬（おうせ）を願い　朝（あした）にチャハールガー奏でん」

わたし「イラーク、チャッパーヤート、オズハールを弾いて、心が魅了されたら、太陽のようなあの人とのぉ、会ってぇ、恋ぃ……したりとか、愛、

したいぃ、と願って、あしたに、チャハールガーを奏でたい。と言っています。」

サリナ「そうですね。正しいですけど、ここの説明は先生の説明をそのまま使ってください。イラック、チェンミアット、満足したら……　ん、彼女はなんと言っているの？」

わたし「『イラーク、チャッパーヤート、オズハールを弾いて、心の魅かれたれば』です。」

サリナ「うーん。」

サリナ「もしも、イラック、チェンミアット、ウズハオル、弾いて満足したら、朝は日昇る美しさを願ってチャハルガ弾きたい。こんな感じですね。」

わたし「七聯目はこうやって説明していましたよね。『すべてのアルサン、生きていること、恋愛すること、豊かな生活に感謝を言いながら、別れる山を超えたい。この山は、ただの山のことではなく、良いことと悪いことの山だって。美しい甘い飲み物を飲んで、心を豊かにしながら、シガッを弾きたい。」

サリナ「彼女はなんて訳しているの？」

萩田麗子訳「**別離の苦しき山を乗り越え　あの人との逢瀬　叶いたれば**

喜びの酒飲みて　あの人に伴せ　スィガーを奏でん

わたし「『別離の苦しき山を乗り越え　あの人との逢瀬　叶いたれば
喜びの酒飲みて　あの人に伴せ　スィガーを奏でん』」

わたし「意味を説明しますね。別れる苦しみの山を乗り越えて、あの人との会うことが叶ったら、喜びのお酒を飲んで、あの人にあわせて、スィガー、シガッのことですよね。お酒を飲んで、音楽を奏でたい。という風に訳しています。」

サリナ「OK。同じことじゃないですか、だいたい。」

わたし「あ、でも、彼女は苦しみの山って言っていましたけど、サリナさんはアルサンは苦しみもよろこびも両方ある山だって言っていましたよ。」

サリナ「そうですね。偉大な夢を実現して、別れの山を越えて、別れ山からのべきれないじゃないですか。実現できない夢を乗り越えてって、実現したいけどできないよね。別れ山から渡って、大きな夢あるけど実現しないから、別れの山から渡って、って、ここ恋の話ですね。お酒のミサを飲みながら、シガ、と言っているというふうにとるんです。」

わたし「なるほど。」

わたし「先生は苦しみの山と訳していましたけども……」

サリナ「そうそう。」

わたし「サリナさんは苦しみも喜びもあると。」

サリナ「そうそう。」

サリナ「先生は別れる苦しみが喜びもあるから苦しみと訳したんですね。お酒……　ここぉ、どういうふうに訳したら良い？」

わたし「先生は酒って書いてましたけど、イスラーム教なのでお酒は飲まないはずですよね。」

サリナ「ここ酒ととっていいかどうか……　発泡したジュースと言ったらどうですか　すこしお酒になりますよね？」

わたし「発酵のことですね。」

サリナ「そうです。日本語で訳すると酒しかないか？　発酵？　したら？　お酒になりますよね？　括弧のなかいれてお酒と書くか？　日本語ならお酒と書くか。」

わたし「ちょっと上手くやってみます。」

サリナ「シャラップといいます」

わたし「しゃ？」

サリナ「（なにかをメモして消す）ここ書かなくて良いよ」

わたし「はい。」

サリナ「ハラックというとお酒なんですけど、シャラップといって果物酒と先生訳している。こういうふうにするか、わたしたち。」

わたし「なんとか上手く訳してみます。」

わたし「はい、ラスト、八聯目でーす。」

わたし「さあ　マシュラブよ　美酒飲みて　心ゆくまで酔わん
　タンブール（8）片手に取りて　いま一つの手に　酒杯掲げん」

わたし「これはですね、さあ、マシュラブよ、おいしい酒……おいしい酒でいっか、[15]を飲んで、心ゆくまで酔いましょう！　タンブールを片手に取って（左手でタンブールを掴むような仕草）、もうひとつの手にお酒を持って（右手で杯を持つ仕草）、掲げましょう（両手を掲げる）。という意味ですよ、だいたいは。」

サリナ「わたしは何と訳していましたか？」

わたし「みなさんここへ来て、メシレップをやりましょう。乾杯をして、ある女に恋をした。杯をかわす。すべてを愛した。いけるかどうかを伝えたい。片方の手にタンブルをとって、もう片方の手に甘い飲み物をとってやりたい。……です……」

――前回のサリナ「声を甘さにしたいってことですね。これは、詩じゃなくて歌なので、古代のことばなので、そういうことがあります。音楽で言葉を甘えてあなたに恋したいか、甘いジュースの心の愛、甘い愛を囁きたい？　っていうことですね。」

サリナ「はい、先生と同じですよね。」

わたし「先生は、メシレップをマシュラブと訳していますよ。」

サリナ「ああ、そうですか……？」（サリナさんは、わたしの発音がカタカナ発音だったため、メシレップとメシュレップとマシュラップとマシュラブの発音の違いに気がつけなかったらしい。[16]）

サリナ「メシレップというのは、村のなにか、大きな、みんなで集まって歌ったり踊ったり楽器弾いたりするんですね、それがメシレップです。祭や本の出版記念などでもみんなで集まって歌ったり踊ったりしますが、メシレップというのは、そのなかでも別の集まりなんです。」

サリナ「だからここの、えー」

サリナ（手元の紙をもう一度じっくり見る）

サリナ「『来て、おおい、メシレップ』というのは、先生は人の名前だと思っているみたいですね。」

わたし「あー……」

わたし（先程、五聯目を訳す前の休憩時間に速読した萩田麗子『ウイグル詩史』を思い出す。）

わたし「たしか、待ってください。ええと……この本の中に……」

萩田麗子訳「メシュレプはアラビア語のマシュラブ（madhrab）の発音が変化したものである。メシュレプはもともと「水を飲む場所・泉」という意味であった。転じて「酒を飲む場所、神の教えを汲み取るところ、霊感の泉」などの意味が加わった。」（萩田麗子『ウイグル詩史』2023）

わたし「だそうで、メシュレプとマシュラブは由来が同じみたいです。で、萩田先生によればムケッディメの作者はマシュラブだって……」

サリナ「踊ったり歌ったりお酒飲んだりしているのがメシレップです。人の名前ではないですね、これは……　例えば、「おおい、リンチャン、来て」ということ先生が受け取っているんですけど、十二ムカームでは絶対に個人の名前出てきてないじゃないですか。」

わたし「メシレップは結局、みんなで歌って踊っているそういう会のことですか？」

サリナ「そうです。」

わたし「メシレップはそういう会のことですが、ムケッディメを書いたのもマシュラブというひとで、あれ、たしか、えーとペンネームみたいな概念があったってさっき本で読んで……　ちょっと待ってください、待って、」（わたしは萩田麗子『ウイグル詩史』をぺらぺらとめくる。）

サリナ「ムケッディメがはじまりの意味、まえがきと書いてあります。」

わたし「そうですそうです、で、そのムカディメを書いたのが、マシュラブというひとで……」（『ウイグル詩史』をぺらぺらとめくりながら。）

サリナ「十二ムカームをまとめたのはアマンニサハンです。そのなかにラクがあって、そのなかのムケッディメ、あれ！　古代作者のマシュラブですね。」

わたし「この先生は、マシュラブとメシレップは語源が一緒だと言っていますよ。」

サリナ「ああ、ここは、二つに訳すことが可能だね。お酒をのんで　音楽弾いて、幸せになりましょうというのと、リンチャン、酔っ払いましょう、というのと。」

サリナ「メシレップというひともいるんですね。」

（ここでわたしが萩田麗子『ウイグル詩史』から探している箇所を見つける。）

萩田麗子訳「例に挙げたガザルでは最後のベイトにこのガザルを詠んだマシュラブ（mashrab）という詩人の名前が挿入されているが、これはペンネームのようなものでタハッルス（takhallus）と呼ばれる。」（萩田麗子『ウイグル詩史』2023）

萩田麗子訳「最後の詩句には詩人のタハッルス takhallus が詠みこまれるが、必ず入れなければならないというものではない。タハッルスは「雅号」という意味に近いが、厳密に言えば同じではない。もともとは「危険から逃れる、安全になる」というアラビア語に由来し、自分の素性を隠したい者や政治的な危険を避けたいと思う者が、仮の名として使用したのではないかとされている。しかし時代が下ると多くの詩人は自分の詩の雰囲気に合う言葉や師匠のタハッルスと関連づけた言葉を用いるようになり、詩の中に効果的に詠みこむことに工夫を凝らすようになった。」（萩田麗子『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』2014）

わたし「このタハッルスなんじゃないですか。」

サリナ「ああー、メシレップというのは人の名前で訳そうか？　来てという

言葉使うと人の名前かもしれないと思う。『リンチャンきて、いっしょに酔っ払いましょう』ということになる。『えい、メシレップ』ということになると、ああ、新年来た、」

わたし「新年？」

サリナ「ああ、祭きたということになる。どちらにしようか？　彼によれば、メシレップというパーティーもあれば、メシレップという作者もあるみたいですよ。」

わたし「彼と言うのはさっきの藝大の人ですか。」

サリナ「そうですよ。シャーメシレップという有名な作者もある。でも彼わかんないね〜　適当に勉強しているから。さあどうする？　リンチャン、さあどうする？」

わたし「両方の意味を訳せますよ、上手く訳せば。」

サリナ「詩を書いたのがメシレップというひとで、さあメシレップ来てくださいというのも正しいとわたし思っている。アマンニサハンがいちいち書いたわけないですね。書いたのを整理したんですね。」

サリナ「……」（PCを操作する）

サリナ「ちょっと待ってくださーい、出てきたよ。（辞書をわたしに見せる。）メシレップ。この詩はナワイー。この詩はメシレップ、この詩はウェイダーノ。これをまとめてきたね彼女は。わたしたちビデオ見て訳しましたね。（PCの辞書を見ながら）ああメシュレップというひとがいたんですね。ナワイという有名な学者と共に、メシュレップという人もいるんですね。ここではメシュレップですけど、最後はメシュレップというんですね。矛盾しているんですね。最後のメシュレップのところは人物にして、ここ人物にして、下にメシュレップのもうひとつの説明を入れてください。カダヒということあるじゃないですか。カダヒとは「はい」とこういうこと。これがあるなら、人物じゃないとおかしいじゃないですか。作者だそうです、有名な。どっちにしますかね。」

わたし「どっちの意味も汲めますよ。日本語にも掛詞はあるし、タハッルスの説明をすればわかってもらえると思います。」

サリナ「うーん。どっちで訳そうか……」[17]

二〇二四年一月二十一日　横浜

難しそうだけれど上手いことやれば、まあなんとかなるだろう。いままでの通り、このように聞き書きを文字に起こしていけば、聞き書きの方がわたしに上手いやり方を囁いてくれるだろう。はじめは二重の飜訳過程をどう織り込もうかと悩んでいたが、こう書いてみると、もう十分に二重性のテクストを書いてきたような気もする。それに、『ムケッディメ』の内容の意味を伝えるという観点では、萩田先生の飜訳を載せたし、サリナさんの説明も文字起こししたのだから、いまさらわたしが古典詩に忠実に訳しても蛇足なの

かもしれない。

だから主眼はやっぱり「サリナさんにとってのムカーム」「サリナさんにとってのそのウイグル詩」に向かう。わたしたちが翻(めく)り、言葉の意味を考えて説明訳したのは、サリナさんがウイグルから持ってきていたムカームの古い本、ムカームのビデオ、サリナさんがPCに保存していたウイグル語の辞書、サリナさんのウイグル古典の知識、萩田先生の二冊の本、その二冊の本の古文調の言葉を現代の易しい日本語に言い変えて伝えようとしたわたしの知識、……そういった三つ以上の複数のテクスト&オーラリティ&メモリーである。サリナさんの心はウイグル語の上を走り、かつての故郷へとかえり、千年以上も昔の祖国へと旅立ったかと思えば、目の前のわたしを見つめてくる。わたしの精神もまた、サリナさんに導かれて行ったことのないウイグルのかつての風景を歩き、御茶ノ水の駿台二号館に座っていたあの日に翻(と)びかえり、記憶のあいまをぬって、今日の冷やっこい横浜に戻ってくるのを繰り返す。その言葉と記憶と人のたゆたう宇宙(れきし)を泳ぎ、翻(と)ぶように訳(はな)す、わたしがいる。サリナさんがいる。マシュラブがいる。

14 細かいことだが、引用する際にはその全文を自分で手打ちして複写することを心掛けている。コピーアンドペーストや、OCR（Optical Character Recognition、光学文字認識）技術は便利であるが、この聞き書き内に引用されるためには、一度、その一文字一文字が肉体的に筆者を通されることが（なぜだか）必要になる気がする。

15 美酒を「おいしい酒」と意訳するのはあまりに説明不足である。サリナさんには「勝利の美酒」のニュアンスを伝えるべきであったが、このときわたしは疲れていて、説明しきれなかった。

16 ムカームのカナ表記について：サリナさん著『ウイグル語 = Uyghur tili』とサリナさんが信頼するウェブサイト、アブドセミ・アブドラフマン『ウイグル音楽の歴史と現在：十二ムカームを中心に（文化遺産のデジタルアーカイブ DSR MUSIC）』と萩田麗子『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』ではそれぞれ異なる。『ウイグル語 = Uyghur tili』では、Rak（ラック）Chebbiyat（チェッバヤット）Sigah（シガッ）Chargah（チャルガッ）Penjigah（ペンジガッ）Uzhal（ウズハル）Ejem（エジェム）Oshshaq（オッシャック）Bayat（バヤット）Nawa（ナワ）Mushawrek（ムシャウレック）Iraq（イラック）。『ウイグル音楽の歴史と現在：十二ムカームを中心に（文化遺産のデジタルアーカイブ DSR MUSIC）』ではラク、チャッバヤート、ムシャーヴァラク、チャハールガー、パンジガー、オズハール、アジャム、オシャーク、バヤート、ナワー、スィガー、イラーク。『ウイグル十二ムカーム――シルクロードにこだまする愛の歌』では、ラーク、チャッバーヤート、スィガー、チャハールガー、パンジガー、オズハール、アジャム、ウッシャーク、バーヤート、ナワー、ムシャーワラク、イラーク。また、この聞き書きでは、発音の仕方が伝える意味に注目して、筆者が聞き取ったままに表記する場合もある。

17 メシレップおよびマシュラブについて、ここで改めて整理する。

・メシレップとマシュラブは語の由来が同じだと言われている。（メシレップがマシュラブに由来する）

・語の意味は大きく分ければ二つある。①みなで集まってお祝いする。歌って踊るために集まるお祝い。　②人名。このムカーム・ムカッディメを書いた人物の名前。

・サリタナさん著『ウイグル語 = Uyghur tili』では、「メシュレップ……何世紀にもわたってウイグル文化の中で受け継がれてきた伝統的な慣習のひとつ。楽器演奏と踊り、会話を交えて、文化的な習慣の伝承や絆を育む文化儀礼の集い。2010 年にユネスコの無形文化遺産に登録された。」と説明している。

飜(ほん)ラク序(はじめ) Muqeddime

（ウイグル伝統楽曲ムカーム第一部ラック『ムケッディメ』に寄せて）

うラぁっーっく らーっクっー ッらぁーぁらはるラぁ
ッラ わたクぅシ らっーァク わたシ ッッらーぁは
あらふ わたクシ の らぁつる いのち の すべて
ッッララ ララーく ららーぁく らぁぁく わたくし
い ッ いッ いッのマニか ハ っラ っラ よられ
つぁられ ながく のびれる ララァサターるゥなりて
ッァ らーくっ らーくッ ッァ わたくしの いのち
つぁするところなく悉(ことごと)く あますとこなく悉く
しろい 絃(つる) へと つるぁられて おりました
わたくしの 永い ねがいは ッらー ァらァ しゃラーァッ
ッあの くるしむ あのひと そのひとを
すくう ひとすじの 絃に なること
わたくしの ッァ さーァたァルの 永い ねがいは
その ラッァーッらーるァ 音楽を つぁすることなく たゆねること
ゥは わ た く し が くるしむ あのひと 不幸の そのひとの心
癒し 慰め もうしあげますため ッぁ らぁーく

ムかァんむに 心ゆだね
ムかぁーッむに 絃 さしあげて
らぁーくッ に こころ よりそいゆけば
天にわたくしのい い の ち むかってゆきます ます ぁりて
天は わたくしに 命のたまむけいたしまして
わたくしに愛の道をみちびいてくれるがゆえ
わたくしがその道をゆき
わたくしがならすサたァるのおと
不幸(ふしあわせ)な人を慰め癒すがゆえに
天がわたくしに愛の道をおしえ、わたくしはあのかたへあいにゆく
その道において、サたァるの絃と成り、ッァ、永い糸によられ
わたくしはムかァむとなる
わたくしがムかぁムとなり、ぅふさっイにィん、あじゃんュむとつづく
音楽があったとしても、わたくしの い の ち ムがぁムに っぁ りて
らっらッーッックぅくぅのばぁバャーァぁトッを
うみ かたり つくり かなでますがゆえ

わたくしが　あなたの　むュかーァむになる
あなたの　天の　おはす　らッあの　天の　たかいこと　ふらつぁれし
あなたの　天の　おはします　わたしの　あおぐ　天の　ばァーやァト
らぁッツぁ　天を　あおぐしぐさで　バァやぁト　ば　ぁ　や　ぁ　と　っ
か　な　で　つ　が　い　ばる　ばぁャァトのしぐさが
かなし　かなし　かなし　しっ　しツ　しツ　しぐさ　さぐ　さぐし
さぐし　さぐし　しびシ　びィ　びシ　びィ　さぐし　ビひ　さぐし
びヒ　なはと　かなし　さぐさむ　びひ　なはと　なは　ひきつけたまふ
そのしぐさ　つらねる　ねリ　ざる
ならばる　ばざる　が　ガざはる　ガザる　は
ラぁーァク　の　よりそい　い　ひ　の　ひの　わたくしの
明くる朝も暗がる夜も寄り添い連ねる奏でがあるゆえ　ムッかァぁはは
でィッッっめっメ　なが　んなが　永絃の音に　い　の　ち
命がひとひらゆだられる

言絶えることなく、何時しか四辺は霧砂の夜になる。朝に肇た聲という聲の奏という奏が、今やアルタイを超え、森という森、湖という湖を越え、霧の如く舞い散る砂原の砂という砂のあらゆる一片を拾いあげ、草原のすべての草のひとつひとつを撫でながら、天馬のように軽く、天禽のように速く、幾つもの言霊をしたがえて、果てなき地上を駆け飜んでゆく。その音は葉樂、その音はハラク、ムシャハラク、パンジィガーっァ、いラぁーック、ちゃッぱァやぁト、ぅォヲズはァァル、四辺に満ちて、言悉くひろげふやす様の、太るいことこの上なく、陽しいことこの上なく、この地に満ち満ちて、ひとびとをすくいいやし、木々をすくいいやし、悉くをすくいいやし、悉くがよられてゆく、一つの絃とよられてゆく、一つの絃の音に、地平線が満たされてゆく、木魂される、その夜に、太るく陽しいその人へと、一つの道が開かれる。開かれるが故、むかぁムはうたいまつ。すくはれるがゆえ、むかぁムは寄り添う。幾度、離別のアルタイを登り、その度にうたいまつことになったとしても、タんぶゥーゥルかかげ、共に祈りあおぐ仕草の草の　の　ッ　ッァ、ラァーッックは、永遠に、はじまりへとよみがえり、一たび、二たび、三たび、幾たび、この地へ再生される、ムかぁァーッむは再生の音、むカーっっムはくりかえされる音、むかぁむにはじまりむかぁはむにおわる、この音、永遠に、この命も、永遠に、あなたの、あなたの、あなたのもとへ、む　ッ
あァるラッっくむかぁァァッディっッっ
メめメっッッはじまりにおわるはじまり
にうたうしがッッすぃがッましゅれっぷぅぷ
のッッッ飜りかえされるムかでぃっっ
まぇェへ

祝盃をあげましょうと、あまくうるおして、わらいましょうと
両手をかかげてわらう　いつもどおりに

へぇえせんうぅせん、いきかえり
ゆさかえり遊星の舟のみあげる
てふりそその糸の雨つ
詩集を翻訳せき書
あるじめぐり憶い想い
地上にるらきてた
虹がつ聞い砂
帰郷すらるる

第6詩　終わりTamam

へぇえせん、うぅせん、いきかえり
舟のみあげるゆら遊星の糸屑砂雨がふりそそぐ
憶い想って詩集を飜り、聞き書きてぁるじめっ訳せたら
地上に虹が帰郷する

死んでいくときは天国に行って欲しい
十二ムカームは永遠にあなたと共に

（十二ムカームの編纂者・アマンニサハン死すとき、
夫・スルタン アブドゥッラシード・ハン一世の言葉）

二〇二四年一月二十二日　三時　東京

アマンニサハン
خانىش ئامانىسا خان
Xanish Amannisaxan（1526-1560）

ウイグルの古典音楽「12ムカーム」をまとめた若い音楽家アマンニサハンは、16世紀のヤルカンド・ハン王国第2代国王スルタン アブドゥッラシード・ハン1世（Sultan Abdurashid Xan）の妻です。カシュガルの貧苦な村で生まれ、幼い頃より父親から音楽を学び、数々のウイグル楽器を弾きこなし、その歌声も大変優雅であったといわれています。書家、詩人としても有名で、ウイグル農民の姿と生活ぶりを反映した多くの詩を残しています。偶然彼女に出会ったスルタンは、その素晴らしい音楽才能と心に響く詩に一目惚れし、13歳という若さで、王妃として宮殿に迎え入れられました。妃となった後も贅沢な宮殿生活に溺れることなく、ウイグルの各地域に散在していた伝統音楽の整理・体系化に力を注ぎ、ウイグル古典音楽である「12ムカーム」の集大成を作り上げました。1560年に難産のため、34歳という若さで亡くなっています。

مۇقام جاھاندا تاڭنىڭ ساباسى،
جانانغا جانكى قالۇن ساداسى،
ھېچ تەڭ كېلەلمەس بۇلبۇل ناۋاسى،
ئالەمدە يوقكى بۇنىڭ باھاسى.

Muqam jahanda tangning sabasi,
Janangha janki qalun sadasi,
Héch teng kélelmes bulbul nawasi,
Alemde yoqki buning bahasi.

ムカームの世界は暁の美しさ、
愛する人への魂のカロンの音色、
比べるもののないナイチンゲールの声、
世界に比類なきその価値。

ムカーム……ウイグルの古典音楽・旋律、カロン……琴（ウイグル楽器）

（阿依サリタナ『ウイグル語 = Uyghur tili』2023より、アマンニサハンの項から引用。）

「では、最後にアマンニサハンの最期の言葉を飜訳しておしまいにしましょうか。アマンニサハンについての説明は、わたしの本からとっておいてください。」

この聞き書きのためのサリナさんとの飜訳はこれが最終回。ラストを締めくくるのは、ウイグル史きっての天才音楽家・アマンニサハンの言葉。彼女こそ十二ムカームの編纂者であり、十二ムカーム完成を成し遂げ、その後難産で三十四歳で若くして亡くなってしまったという。

今回の飜訳には、「ماليكه ئامانىساخان / malika amanisahan / uyghur kona kino filim」というYouTubeで視聴することができたアマンニサハンについてのウイグル映画の終盤に、アマンニサハンが書き残した紙（遺書詩）を王様が拾い上げて涙ながらに読む、というシーンがあり、その紙に書いてある詩を用いている。

サリナ「アマンニサハンの詩という特別な詩はないですけれど、彼女の十二ムカームに対する気持ちの詩がいくつかあります。アマンニサハンが若くしてなくなったときに王様が言った詩をやりましょう。」

わたし「サリナさん、これはどのような史料をもとに作られた映画なのですか？　わかりますか？」

サリナ「これは王様の残した……　映画でしか残っていないですよ。かつてUigurにいたときに王様の映画を見たことがありますけども。たぶん以前あったものに基づいています。とりあえずは「映画より」と書けばいいですよ。」

YouTubeの停止ボタンと再生ボタンを細かく押し続け、詩が書かれている紙がもっとも明瞭に映るシーンを探す。ようやく見つけて、サリナさんがじぃと画面を覗き込んで読む。「リンチャン、ちょっと待ってくださいね。ええとこれはなんて書いてあるのかな」。

サリナ「紙に書いてあったのは、アマンニサハンに書いた詩ですね。というのは、『風が私の友であって、私の悲しみを風から吹いていった
聞いたらお父さんがわたしより先に飛び立った
パパのために　夜は昼間に　昼間は夜に
寝ていない、ということですよ。
この悲しみをわたしは受け容れられず、わたしは寝ることができなかった
ムカームのためにわたしは哀しんだ
哀しんだ、悲しいことが多かった　お父さん亡くなって、ムカームはまだ整理できなかった
自分に言い聞かせた

あなたは強い
がんばれ
悩まないでわたし
哀しまないでわたし
あなたの愛する王様が戻ってきてあなたを助ける
わたしが助けに飛ぶ鳥・チョウチョ、タルワナと言いますね。
タルワナが飛んできてわたしの王様が
それを信じて
わたしの夫』
という内容になります。」

بولدی شامال ماڭا ھەمرا دەردىمگە بولۇپ ھەمدەم كېتىپتۇ مېھرىبان دادام
ئۇ دۇنياغا مەندىن ئاۋال
ھەم دادام. ئۇچۇن ئۆتكۈزدۈم كېچىلەرنى ئۇيقۇسىز
مۇقامنى دەپ ھەسرەت چەكتىم دەردىمنى يۇتۇپ
دەردىمنى يۇتۇپ ئاھ كۆڭلۈم بولىدۇ قىل قايغۇرمىغىن قۇتقازغىلى پەرۋانە سۇلتانىڭ كېلور

風がかなしげに吹きとおる
聞けば父はもうかえらないのだという
朝も夜ももう巡らない
だがムカームの夜明けはすぐそこ
つよくあれ、わたくし
書きたまえ、わたくし
そうして日日を過ごしていると、風に吹かれて一匹のタルワナがひらりひらりと飛んできて、わたくしの愛する王を載せて、きっと助けにきてくれる。
どうかわたくしを信じてください。夫よ、わたくしを信じてください。

エアコンの温風が肌にかかる
そろそろ原稿も終わりなのだという
そうなると、いよいよ荘厳され、召されそうになってくる
ムケッディメが完遂され、就寝の刻が近づいている
つよくあれ、わたくし
書きたまえ、わたくし
そうして日日を過ごしていると、スマホが鳴って、一本の電話がサリナさんからかかってくる。

「リンチャン、卒論の具合はどうですかぁ？」

前回のムケッディメ飜訳では、逐語訳派と再構築派を軽く紹介しながら、複数のテクスト&オーラリティ&メモリーをわたる「飜訳」をどのように行うかのひとつの実践例、わたしなりの答えとして、『飜ラク序 Muqeddime』を書き上げた。その注釈・サブタイトルには、

（ウイグル伝統楽曲ムカーム第一部ラック『ムケッディメ』に寄せて）

という文を入れた。三田の詩の授業（「人文科学研究会」および「人文科学特論」、「文章と表現」[18]）では、「〈寄せる詩〉を書きなさい」という課題が課せられることがある。学生たちは「〈寄せる詩〉ってなんだ……？」と疑問を抱き、Google で検索してみては、なにひとつひっかかる単語がなく、「？」の精神で宿題に取りかかる。（とある人文科学研究会の放課後に、田町駅前

のタリーズで「寄せる詩」について感想を言い合ったところ、誰も〈寄せる詩〉の明確な定義を発見していないということが判明した。）前回のムケッディメの飜訳では、この定義不明瞭な〈寄せる詩〉のわたしなりの方法論と〈成る聞き書き、憑くぽえとりぃ〉のふたつを組みあわせてみたつもりだ。

〈寄せる詩〉のわたしなりの方法論

・原文に〈寄せる〉意識で書く

・そのために、原文をよく理解する

・そのために、原文を暗唱して何度も何度も諳んじて人に聞かせる

〈成る聞き書き、憑くぽえとりぃ〉の方法論

・その人の発する原語に〈憑く〉意識で書く

・その人やその原文に〈成る〉意識をもつ

・その原語や原文を自分の中にとりこみつつ、自分の外にも自分をおいて、その〈外〉の領域に作品を生成する

・そのために、一時間以上の時間をかけて、それだけに集中する

上記二つの方法論を組みあわせ、わたしは横浜駅で一時間以上『ムケッディメ』のエッセンスというか、サリナさんの飜訳説明というか、萩田先生の翻訳文というか、そういったものの混在文を何度も口に出して読んで歩く生きムカームとなっていた。そうしてできあがったのが『飜ラク序Muqeddime』である。この方法論が、わたしの筆のすすみ具合に対して効果的であったのは、『ムカッディメ』自体が、韻文やウイグル古典詩としてのルールにさえ目を瞑れば、各聯を何度繰り返しても、また、どのように組みあわせて読んでも上手くいくような詩だったからではないか、とわたしは考えている。再現実験ができるかというと、おそらくそうではない。飜訳というのは常に自分と他者の双方から引力を受けるものである。

なんにせよ、重要だったのは、この聞き書きを書くときに、常に背中を押してくれたひとたちがいたということだ。藤田護先生は、論文ということを意識せずに、とにかくこのまま書き進めようとおっしゃってくださって、そのおかげで自由に言葉を解放しながら書き進めることができた。職業編集者でもある父母はすごく面白い、驚くべきクオリティだと褒め続けながら、明け方まで何度も読んでくれた。弟は真夜中にミネストローネを作ってくれた。叔父さん、叔母さんは、わたしをライブに誘ってくれた。そのおかげで中央アジアの音楽や、民謡アレンジにダイレクトに出会うことができた。原田くんは幾度も書き直した文章をその都度読み返しては手厚いフィードバックをくれた。ダニエルと佐々木とありーちゃんもフィードバックをくれた。詩の友人たちに出会う機会をくださった笠井裕之先生と朝吹亮二先生にも感謝。漢字が難しいとアレックスが言ってくれたおかげで、振り仮名を意識的に増やせた。松浦は一緒に自治会を作ってくれた。結局、その自治会活動の終わりに、わたしは適応障害になって断筆することになったのだが、だとしても、

わたしの言論への姿勢を育み、『成る聞き書き、憑くぽえとりぃ』の土壌を作った自治会には、まあまあ感謝している。自治会史から「対話祭」の歴史が消されつつあることには納得がいっていません。三年間ゼミでお世話になった小熊英二先生は何度も本文中に引用されて、そういう形でも心の支えになった。『成る聞き書き、憑くぽえとりぃ』で語り手になってくれた三十名のみなさんもありがとう。そのひとつひとつが助けになりました。それから、祖母の喜久子さんがいなければ、おそらくわたしはこれほど詩を書く人生は送らなかっただろう。保育園までの道をわたしの手を引いて、詩をうたいつづけたあの日日が、二〇二四年一月二十二日にまで繋がっている。

サリナさんと家族のみなさん、本当にありがとうございました。サリナさんの今日までのありとあらゆる努力と運命がわたしたちを結び、このようなテクストをつくりました。本当にありがとうございました。

二〇二四年一月十五日　十六時　東京

「りんちゃん　こんにちは
りんちゃん卒業論文の内容を全部メールで私に送って、一回全部読んで見たいです。
よろしくお願いいたします。
（中略）
原稿を確認したいです。今日時間がありますので　今送って下さい。
さりなより」

サリナさんからメールが届き、これまで送っていた原稿とまだ送っていなかったテクスト原稿をA4のPDFにまとめて送信する。提出締め切り2週間前に、改めて120ページ（当時）、5.0MBのデータ量を見て、安堵の気持ちと天にも召されるような気持ちと、いやまだまだ修正があるに違いないのだからとびびりあがる気持ちが入り混じって、おかしな情緒になった。

翌十六日夜、サリナさんから電話がかかってくる。

「リンチャンこれ読みましたけど、直してほしいところたくさんあります。まず、詩の感想文だけ入れて。自分の話入れてあげたのはリンチャンがそう感じて欲しかったからです。最初リンチャンとわたしが話したのは、ここで

わたしサリナという名前入れたならば詩そのものが訳してほしいけど、わたしの気持ち、考え方入れてほしくない。わたしの気持ちなら、日本に来てからずっと1日目から日記ある。リンチャンがこう書いてどう思うか。これはちょっと直してほしいですねえ。まだまだ直して欲しいと思うけど、詩の内容だけ入れてほしいです。もっと綺麗な言葉に直してください。タイトルがサリナさんによる現代の訳なので、わたしの気持ち考え方入れて、といえば、わたし個人の話なので入れて欲しくないです。わたしがどんな人かというと『ウイグル語』の本に載せた自己紹介があるので、それ使ってください。」

サリナさんの私的な考えや事情を、この聞き書きに載せるのはやめてほしい、やめた方が良いのではないか、とサリナさんから依頼と提案をされた。わたしは、「(ウイグル人である) サリナさんのウイグル語現代詩飜訳の過程、そこで発話されたさまざま」に意義を見出して、これまでの聞き書きを行っていたので、そして、そのことは六月からサリナさんにも話していたので、サリナさんの提案には、一瞬、頭が真っ白になった。サリナさんは付け加えてその他の事情も丁寧に説明してくれた。

真っ白なページのうえに
話せることと話せないことがある
唯(た)った二文字の熟語ひとつとっても、心は針のように尖ってしまう
唯(た)った一行のことを話すだけで、人生の花が枯れていく
わたしたちにはまだ時が追いつかない
ゆえに、唯(た)った一文字が貫いた未来は
わたしたちの未来を暗く暗く染め上げる

リンチャン、だからここは綺麗な言葉に直してください……

その直後からずっと、藤田先生にアドバイスをいただきつつ、わたしはサリナさんと話し合いを重ね、第1詩からここまで大きく改稿していた。どう書けば「上手くやれる」のか。サリナさんにもわたしの書いた日本語の意味が伝わるように今一度電話で丁寧に解説しながら、すべての文字を追ってもらい、テクストを検討し直した。サリナさんとの相談の末、サリナさんが完全に納得のできる原稿がここまで読んできた通りの原稿として仕上がった。改稿にあたっては、注釈や詩、振り仮名といったテクストの辺境たちが役に立った。原稿を直しながら、サリナさんの心もわたしの心も揺れ続けていた。ある部分の描写を入れるべきかどうか、日によって意見が異なった。サリナさんは日本語が母語ではないから、わたしの書いた文章を読み、それを日本語で議論することには、わたしの想像以上の苦労があったことだろう。ありがたいことに、サリナさんはすべてを読み、返答を反(かえ)してくれた。サリナさんは、自身のプライベートや信念、時勢的事情に関わる箇所だけではなく、ウイグル語の表記やわたしの日本語の表現方法もすみずみまで丁寧に読んで、チェックをしてくれた。修正箇所をPDFに書き込んで送ってくれた

り、電話で直接話したり、時間がない中で工夫しながら確認作業を行った。アラビア式ウイグル文字は、普通のキーボードで打つのがとても大変であり、サリナさんはアラビア式ウイグル文字を書き起こすために、スクリーン上のキーボードから一文字ずつ文字を選んでクリックして入力している。

ウイグル語は、もともと「ウイグル語のためだけの文字」を持っていないので、アラビア文字を借りてくることにしたが、ウイグル語の発音にはアラビア文字では表しきれない音もあるので、「ひげ」を使ったり、色々工夫して書くことにしたのだ。1950年代にはキリル文字を使っていた。1959年から1982年までは、中国語で使われる拼音（ピンイン）式の文字とウイグル語用の「新文字」を組み合わせた「ラテン式文字」が採用されていた。短い期間にウイグル語の表記は入れ替わった。それもあって、コンピューターでウイグル語を表記するのは難しかった。だから本当に大変なのだ、とサリナさんは『ウイグル語＝Uyghur tili』を執筆しながら、担当編集者である母に語っていた。アラビア式ウイグル語フォントが手に入るまでは、母はサリナさんの打った文字を画像化して本の紙面を作っていた。「もう、だから、本当に大変なんですよ！　リンチャン、わたし一文字一文字打ってみていますよ。」

修正の現場の例を三つ紹介する。修正前の文章は載せられないので、なんとなく想像しながら読んでほしい。修正はリアルタイムで行われた。（修正した箇所は太字で表記した。）

例1

《修正後の文章（第4詩「二〇二三年十二月二一日　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス」より）》

……憎しみも祈りも、アナ ティリムに縒（よ）られていく。依（よ）り代（しろ）みたいだと思う。

「**リンチャン、リンチャン！　ここ、ここですけど、リンチャンの思うとおりに**訳し直しましょう。リンチャンが受け取った通りに。」

揺り起こされたような気がして、寝返りを打ちますと、わたくしは舟になっておりました。……

《サリナさんとの修正作業》

サリナ「（二つの段落に挟まれた「　」のセリフ全体に、サリナさんからのバツ印がついている。）リンチャン、ここ見ましたか。ここ消してください。ダメです。」

わたし「はい、わかりました。消します。……今、消しました！　できれば、元のセリフの「訳し直しましょう」という言葉は残しておきたいので、こういう風に変えるのはどうですか？」

サリナ「OK」

例2

《修正後の文章（第1詩「一九九七年　コォルラ　見聞」より）》

も、も、もし、もし、もし、もし、夜に、夜に風がとまって、とまって、ぎょろりと目をあけたら……（略）……どうしようもなく、家は燃えていて、あるいは、それが見間違いだったとしても、朝起きたら、おふとんからでて、庭へとでて、道路を見て、目を開けると、そこには知らないお城がいて、お城みたいな怪物がいて、大きな怪物がいて、大きな怪物の中で赤血球みたいな赤い細胞たちがずっと行き来していて、大きな怪物も、その赤血球たちもぜんぶぜんぶこちらをぎょろりと睨んでいて、睨んでいて！……（略）……だからもう夜は笑わない。笑いません。その日から。その日からはもう笑いませんでした。

《サリナさんとの修正作業》

サリナ「（「コォルラ見聞」の段落すべてにバツ印がついている。）ここもダメですね。」

わたし「こういうふうに詩に書き換えるのはどうでしょうか……？　これもダメでしょうか。」

サリナ「これならＯＫ。リンチャン上手ですね。」

例3

《修正後の文章（第3詩「再び、二〇二三年十二月十八日　品川」より）》

リンチャン、伊犁（イリィ）というのは中国語の読み方で、当て字です。もともとウイグル語ではグルジャという土地です。

《サリナさんとの修正作業》

サリナ「ここの「イリィ」ですけど、「中国語では伊犁（イリィ）と呼びますが、ウイグル語では（グルジャ）と呼びます。」ここういうふうに直したらどうですか。」

わたし「そうですね。イリィはカタカナじゃなくて、漢字表記にカナのルビを付けることにしましょう。」

サリナ「そうですそうです。グルジャには漢字表記はないですから、カタカナだけですからね。」

以上、修正の現場より。

およそ三〇〇件を超える修正を丁寧に直して、確認して、二人でくたびれ果てながら、ひとつの言葉を他の言葉に直し、良い修正も、悔しい修正も、二人は心を燃やしながら、正していく。正されていく。考えながら、抗いながら、どうしようもなく、正されていく。

真っ暗ないつかのどこかで
話せることと話せないことがある
時が来るまでよいから
闇夜に消えたなにかいずれかを
どこかに隠しておいてください
唯(た)った数文字の現実において
わたしの心が炎のように揺れうごいてしまう

そうして二人で苦労しながら、なにかとなにかのバランスをとり、上手いことやったのがこの「在日ウイグル人サリナによるウイグル現代詩飜訳を通じた〈記憶と想像の聞き書き文学〉」である。話すということ、書くということ、読むということ。そのすべては、わたしたちがおのれの記憶と想像をめいっぱいに働かせながら、おのれにいまいちど応答することなしには為し得ないことであった。あなたを見つめる、あなたを書く、しかしこのわたしが、あなたではないわたくしが、あなたを書く。この最大の矛盾に立ち向かうために、わたしたちにはなにができたのだろうか。あなた、そしてその目に照り反(かえ)るわたくし自身へのまなざしを、わたくしはどう書けばよいのか。聞くとは何か、話すとは何か、読むとは何か、書くとは何か。〈飜〉〈訳〉するとは何であるのか。

大切だと思っていた原稿が削られていくとき、どうしようもなく、デリートボタンを押していくとき、そこで失われていった文字が、その文字が描いていた現実が、この世界からなかったことにされているようにも思えた。書くという行為、書いてきた行為が蓄積してきた戸惑いも願いも救われも智慧も、剥がされていけば、すっかり軽くなってしまって、紙というものはこんなにもかんたんに、どこかへ行って帰らなくなる。

剥がされゆけば散りゆけばきっと
重ね縒った永い布紙　命糸ほどかれて弛み

「てんでん　かみがみ　ほどかられ
　てんでん　はらばら　ほどかられ」

命糸手繰られず　命紙飜(めく)られず
たどぉれないなら、ないことだよ、ないこと、ないこと、わすれられたこと、わすれぇられる、ほんも、かのように、ないことないことだよ、わすれられ、なくされゆけば、もぉやされ、けぇされゆけば、ないことないこと、ないことだよ。かかれなければ、さえ、ないこと、いずれにもないこと。

「ゆぇ　てんでん　いといど　ほどかられ
　ゆぇ　てんでん　はらばら　ほどかられ」

誰ぞ糸かと糸塵跡に涙する
その糸　縒り反し　縒り反し
てんでんばらばらほどかられいと
目を凝らし、涙をかけるその人その目にその糸が
縒り反し　縒り反し
照り反し　照り反し　その目に
糸の故郷が見えては消えて　消えては見えて
ちかちかと光る　一糸の
燃屑、糸屑、星屑の
太るいことこの上なく、陽しいことこの上なく
星り輝いて、散ら散らに故郷へと降りそそぐそのさまの
虹るいことこの上なく、哀しいことこの上なく
幾千幾万の雨糸が縒り描く
虹の故郷が
よく見える

二〇二四年一月三十日　夕方　東京・猿田彦珈琲　筆者〈訳〉

『訳す』というのは、意味を考えて、解釈して、話す、というような意味があるみたいなのね。意味というのは、わたしは、現実の解釈のことだと思うから、Real に対する Reality のことだとも思うの。何が言いたいかってむしろ、Reality を分かるためには、Real がわかんなきゃいけないってこと！この説明、まだ洗練されてないかなあ？　第2詩にも書いたんだけど……もう少しがんばって説明してみるね。

わたしは、ウイグル語をちゃんと勉強しているわけじゃないし、正直日常会話とか本当に少しの文法がわかるだけで、もう完全に初学者で、だから、第5詩にも書いたんだけど、逐語訳としても命がけの飜訳としても全然できるはずがなくて。自信がないっていうか、わかるよね、うん。で、サリナさんもまた、文学専攻で、古ウイグル語だって勉強しているとはいえ、やっぱり『わたしは詩が好きだし、言語研究者ですが、詩の翻訳の専門家じゃないですから』って遠慮するところがあるのね。

だけど、わたしは、サリナさんっていうひとりの人とこうやって向き合って飜訳する……この場合は、読書する、がいいかな。読書しながら相手に向き合うっていうことそのものが尊くて大切なことだと思ってるんだ。サリナさんが現実 Real にどう向き合って、サリナさんの Reality を構築しているのか、ウイグルの詩を飜訳することでこれが浮かびあがってくるんだよ。Reality って言葉を使ったのは、「歴史観」とか「世界観」みたいな言葉に収斂させたくなかったからだよ。サリナさんというそのひと、そのひとりにとってのあらゆる現実、という意味を込めて、Reality って言ってるの。

重要な論理として、わたしは、詩というものはそもそも読み手のもとに生まれると思っているの。この場合、書き手も読み手に含むからね！　誰かが読んで、そこにポエジーなり、詩の感じなり、詩的な心なりを感じとったときに……　簡単に言えば心が揺さぶられたときに、テクストやら映像やらそのメディウムが詩 Poetry になる。そう思ってるの。だから、サリナさんがテクストという Real のなかに何らかの Reality を見つめている、そのとき、Real が Reality へと変わり、Reality も Real として現れ直し、サリナさんの心も撼(うご)いたその瞬間、そこに詩が生まれる。詩が誕生する。

だからわたしも書き手であり同時に読み手として、この聞き書きを書きながら、いくつもの Reality と Real を構築して、聞き書き文学というひとつの Poetry を生み続けてきた、ということになるわけだ。人間それぞれに〈現実 Real - 世界 Reality の相互変換構造〉がある。ここには、サリナさんとわたしの二重の〈相互変換構造〉が書かれている。それがテクストとして描かれてわたしの元に Poetry として生まれ直す、そのすべての仕組みをなんとかがんばって説明する、これが、訳すっていう言葉に託したわたしの意図と想いなんだ。」

ゆぇ　てんでん　いといど　ほどかられ
　ゆぇ　てんでん　はらばら　ほどかられ

希雨(まれあめ)ゆえによろこばしい
希雨(まれあめ)ゆえに命をたすく
虹雨降る星に虹雨布が織られゆく
縦虹こめていったん反して
横虹するりといったん反して
ゆぇゆぇ　たんたん　おられゆる
ゆぇゆぇ　えんえん　おられゆる
千切られ剥がされ解かれた糸が空から降ってくるたびに集め、
えんえん、たんたん、おりおりの、一生かけて織り直す

縒(よ)り反(かえ)された糸で編み上げられた布を見て、或る人は布であると答え、また或る人は星であると答え、また或る人は国境であると答え、同じテクストであったとしても、まぁた別のものを見ているんですね、と誰かが研究会で呟いた　じぃっと見つめる　耳をすます　織り目に目を凝らす　織られ音に耳をすます　それぞれの布とそれぞれの星とそれぞれの国境が、それぞれの手によって解(ほど)かれていく　なぜ作られたのか　なぜ生まれたのか　なぜこんなことになったのか　なぜ話したのか　なぜ聞いたのか　それぞれの手のなかに解かれていく

二〇二四年一月二十七日　夕方　東京　サリナさんから筆者の母へ

「リンチャンは天才ですよ。ウイグル語、ローマ字、日本語、複数の言語で綺麗になってわかりやすくなっています。本当にわたしが言ったところ全部綺麗に書いてくれた。リンチャンこうやって書いてくれて、わたしが『ウイグル語』で書いたアマンニサハンの内容もムカームの名前もそのまま使えた。うれしい、うれしぃな。」

二〇二四年一月三十日　夕方　東京・猿田彦珈琲　筆者〈飜〉

ゆぇ　てんでん　いといど　ほどかられ
　ゆぇ　てんでん　はらばら　ほどかられ

虹色に織られる雨糸の糸
飜(たぐ)りかえして訳(よ)りなおせば
何色だろうと虹(あか)るく
何様(なによう)だろうと哀(まぶ)しく

ゆぇ　にじにじ　へぇえせんうぅせん　ひかり　かがやいて
　ゆぇ　なにいろだろうと　かがやいて

砂漠のカラワンに雨が降り
わたしたちのあいだの海にも雨が降り
列島にも今日、雨が降る
幾千幾万の雨糸織られて照り返し
目のなかに虹　輝くこと虹のごとく
虹(うつく)しくまなざす　虹(きれい)にかきなおす
hesen-hüsen
虹　虹

本当に美しい言葉というのは、わたしは虹色の言葉だと思うんです。サリナさん。虹色の言葉は照り返すんです、わたくしたちの言葉を。わたくしたちのありさまを。わたくしたちに降り注いだ雨糸のひとつひとつを、わたくしたちは驚きながら、哀しみながら、歌いながら、縒(よ)りなおしてきました。糸を布に、布を糸に、思いたぐり、見つめることで見つめられて、まなざすことでまなざされて、輝くことで輝きかえされる、もし、この世に美しい言葉があるとしたら、そういう言葉であるはずです。そうでなければ、わたしたちは、ただ話すだけ、ただ読むだけ、ただ聞くだけ、ただ書くだけ。発した言葉がこんなにも反響する、こんなにも誰かを撼(うご)かすから、hesen-hüsen と、きらめていている。

何を書きたいのか。
虹の言葉を書きたいのです、わたしは。

それで、わたしは、なぜ書いたのか。
すくわれたいから書いたのではないでしょうか。

どうして生きていくのかがわからなくなる日には、わたしを結わえている糸を紐解いて、くるりくるりと紐解いて、くるくると回りながら、目を回らせながら、こんがらがるあの日と、こんがらがるこの日を思い出して、あの人の言葉、あの教科書で見た言葉、あの映画で見た言葉、あの本で読んだ言葉、あの先生の言葉、あの友達の言葉、糸みたいにすぅっと思い出して、人差し指に絡めて、親指に絡めて、中指に絡めて、くるりくるりとひっぱりだして、嫌な言葉も嬉しい言葉も拾い集めて、泣きそうな言葉もまったくわからないままだった言葉も思い集めて、忘れていたわたしと、忘れていたその日が交差するところに、一本糸をくるりくるりと絡めて印して、今日この瞬間へと持ってくる、あの人を、あの教科書を、あの映画を、あの本を、あの先生を、あの友達をふたたび模倣（ミメーシス）して、ここに生き返らせる、今日この日に、哀しいことも、楽しいことも、わたしのなかに生き返らせる、口のなかと、お腹のなかと、手のなかに、憎しみも、祈りも、生き返らせる、忘れていたことをすくいとる、わたしがそうしてすくいとるように、誰かもわたしをすくいとる、未来において、わたしが何度でも生き返る、すくわれていく、上手に生き飜（かえ）すこつはよく聞くこと、よく聞いて、よく思い出して、よく考えて、糸をたぐる、たぐりよる、たぐりよる先に、あなたがいる、わたしがいる。

18 「文章と表現Ⅰ」は詩・小説・戯曲といった「文芸作品」の創作方法をワークショップ形式で学ぶ授業である（慶應義塾文学部人文社会学科設置）。年度によって担当教員が異なる。2021年度および2022年度ではサブタイトルに「『三田文學』への誘い　文芸創作講座（1）」と冠して、慶應義塾を拠点とする文芸雑誌『三田文学』の編集長である粂川麻里生先生が担当した。2023年度にはサブタイトルが「文芸創作講座（1）」と変わり、詩は笠井裕之先生、小説は荻野アンナ先生、評論は小平麻衣子先生が担当したとシラバスに記載されている。

参考文献、影響を受けた作品

翻訳で取り扱った本

第1詩　ئاۋازسىز تىل アワズスィズ ティル Awazsiz til

・Abduqadir Jalalidin（アブドゥカディリ・ジャラリディン）. كۆيگەن دېڭىز Köygen dengiz（コイゲン デンギズ：燃える海）. Shinjang milletler neshiriyati, 2001/6.

第2詩　كارۋان قەسىدىسى カラワン カスィディス Karwan qesidisi

・第1詩と同じ。

第3詩　ئوستەڭ ناخشىسى オゥステン ナフスィ Österg Naxshisi

・Hoshur Mämtimin（メンティーメン・ヲォショル）. ئىلى خەلىق تاخشىلىرىنىڭ تاريخىي بايانى Ili xeliq naxshilirining tarixiy bayani（イリィ地域の民話・民謡の潮流）. Milletler neshiriyati 民族出版社, 2006/6, ISBN:9787105077205.

第4詩　ئانا تىلىم アナティリム Ana tilim

・Tiyifchan Eleyef（ﾃｨｲｯﾌﾁｬﾝ・ｴﾘﾖﾌ）. Tiyifchan Eliyef sheirlirining ikkinchi toplam（ﾃｨｲｯﾌﾁｬﾝ・ｴﾘﾖﾌ全集　第Ⅱ巻）. Shinjang xeliq bash neshiriyati, Qeshqer Uyghur neshiriyati, 2014/12.

第5詩　ムケッディメ Muqeddime

・Qurban Barat（クルバン　バラット）. مۇقام تېكىستلىرى Muqam Tekistliri（ムカーム）. Shinjang yash ösmürler neshiriyati, 1986/8.

・On ikki muqam（十二ムカーム）. Shinjang Ün sin neshiriyati, 2005.

第6詩　アマンニサハンの詩

・Yasinjan sadiq choghlan（ヤスンジヤン　サティック　チョグラン）. مەلىكە ئامانىساخان Melike Amannisaxan. Shinjang xeliq neshiriyati, 2003/5.

第6詩　映画（Amannisaxan Uyghur movie）

・مەلىكە ئامانىساخان / malika amanisahan / uyghur kona kino filim. YouTube, 2022/07/01, https://youtu.be/fh4b_w2r2eM?si=KecTDsbvNxvDC15Z.

サリナさんが翻訳の参考にした図書

- ئۇيغۇر كلاسسىك ئەدەبىيات تىزىملىرى (維吾尔古典文学一覧) ウイグル語版 . カシュガル師範大学出版社 , 1982/10, pp. 370.
- هازىرقى زامان ئۇيغۇر تىلى (現在維吾尔語) ウイグル語版 . 民族出版社 , 1983/12, pp. 331, ISBN: M9049.
- ئىلىپبە (知字課本) ウイグル語版 . 新疆教育出版社 , 1991/6, pp. 126, ISBN: 7-5370-1426-4.
- ئۇيغۇر ئۆرپ-ئادەتلىرى (維吾尔族習俗) ウイグル語版 . 新疆青少年出版社 , 1996/8, pp. 226, ISBN: 7-5371-2309-8.
- هازىرقى زامان ئۇيغۇر تىلى گرامماتىكىسى (現在維吾尔語語法) ウイグル語版 . 新疆人民出版社 , 1996/9, pp. 743, ISBN: 7-228-02252-1.
- يۈيۈك تىلچى مەھمۇد قەشقەرى (語言巨匠：麻赫穆德・喀什噶里) ウイグル語版 . 新疆人民出版社 , 2000/8, pp. 234, ISBN: 7-228-05877-1.
- كۆيلەر خانىشى — مەلىكە ئامانىساخان (音楽皇后：阿曼尼薩汗) ウイグル語版 . 新疆人民出版社 , 2003/5, pp. 121, ISBN: 7-228-08014-9.
- شىنجاڭ پىداگوگىكا ئۇنىۋېرسىتېتى ئىلمىي ژۇرنىلى (ئىجتىمائىي پەن جىلدى) ウイグル語版 . 新疆師範大学学報編集部 , 2010/12, ISSN: 1007-8908, pp. 93.
- هازىرقى زامان ئۇيغۇر تىلىنىڭ ئىزاھلىق لۇغىتى (維吾尔語詳解辞典) ウイグル語版 . 新疆人民出版社 , 2011/11, pp. 1446, ISBN: 978-7-228-13933-0.
- مەۋجۇتلۇق تەشنالىقى (存在渇望) ئايدۇقادىر جالالدىن ئىنگلىيىدە كۆرگەن — ئاڭلىغانلىرىم (存在渇望) ウイグル語音読 . 民族音像出版社 , 2014/12, ISBN: 978-7-88705-860-7.
- 100 مەشھۇر ئۇيغۇر 1- توم (100 人のウイグル名人第一集) . ウイグル語版 . イスタンブール トルコ , Sutuq bughraxan 出版社 , 2017/12, pp. 454, ISBN: 978-605-68021-0-2.
- 100 مەشھۇر ئۇيغۇر 2- توم (100 人のウイグル名人第二集) ウイグル語版 . イスタンブール トルコ , Sutuq bughraxan 出版社 , 2017/12, pp. 679, ISBN: 978-605-68021-0-2.
- بىزنىڭ تارىخىي يېزىقلىرىمىز (我達の歴史の文字) ウイグル語版 . 新疆青少年出版社 , 1986/6, pp. 262, ISBN: M11124-21.
- ھېكمەتلىك سۆزلەر (哲理名言) ウイグル語版 . 民族出版社 , 1991/8, pp. 331, ISBN: 7-105-02767-3.
- هازىرقى زامان ئۇيغۇر تىلى (現在維吾尔語) ウイグル語版 . 新疆人民出版社 , 1995/8, pp. 158, ISBN: 7-228-03410-4.
- 戸部実之 . ウイグル語入門 文法と会話 (Uyghur Tili Grammatikisi) . 泰流社 , 1986/3/1, ISBN:4884705041.
- 竹内和夫 . 現代ウイグル語四週間 (تۆت ھەپتىلىك ھازىرقى زامان ئۇيغۇر تىلى) . 大学書林 , 1991/2/1, ISBN:447501025X.

- 飯沼英二．アジアの語学書シリーズ・４ウイグル語辞典（ئۇيغۇرچە — يابونچە لۇغەت）．穂高書店，1992/5, ISBN:4-938672-16-2.
- 日本シルクロード倶楽部編．ウイグル語常用単語（ئۇيغۇرچە — يابونچە سۆزلۈك）．日本シルクロード倶楽部，2001/07.
- 鷲尾惟子．シルクロード・ウイグル族の音楽その歴史と現在．アルテスパブリッシング，2014/4/15, ISBN:4903951855.
- 菅原純．現代ウイグル語小辞典（ئۇيغۇرچە-يابونچە سۆزلۈك）．東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2009/2, pp. 742.

本文中引用一覧

- 林宜蓁，石牟礼道子『苦海浄土』刊行史および評価の変遷，京都芸術大学大学院紀要，Journal of Kyoto University of the Arts Graduate School,（2）,114-126（2021-11-10）, https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=365&item_no=1&page_id=13&block_id=61
- ムカイダイス and 河合真．ウイグルの詩人　アフメットジャン・オスマン選詩集．左右社，2015/11/9, ISBN: 978-4865281309.
- 竹沢尚一郎．人類学を開く．文化人類学，2018, 83巻，2号，p. 145-165
- 田中優子．苦海・浄土・日本：石牟礼道子もだえ神の精神．東京，集英社，2020.
- 【市指定文化財】新保広大寺節．新潟県十日町 WEB サイト．2021/4/1
- 阿依サリタナ．ウイグル語 = Uyghur tili = ئۇيغۇر تىلى．姫路．学術研究出版．2023/10/15, ISBN: 978-4911008225.
- 成田凜．〝ャグ．2022/1.
- 小熊英二．単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜．東京，新曜社，1995, ISBN9784788505285.
- NOMI 国際交流協会．サリナさんの講演会．NOMI 国際交流協会，2012/5/24, http://nifa.iki-iki-nomi.net/p72.html
- 成田凜．UNION MONTH - E-FES 対話祭 メッセージ．湘南自治会準備会，2021/7, https://sites.google.com/keio.jp/unionmonth-shonan
- 大山定一 and 吉川幸次郎．洛中書問．東京，筑摩書房，1974.
- 萩田麗子．ウイグル十二ムカーム　シルクロードにいだまする愛の歌．集広舎，2014/11, ISBN: 978-4-904213-22-3.
- 萩田麗子．ウイグル詩史．集広舎，2023/12/8, ISBN: 978-4-86735-046-1 C0098.

・アブドセミ・アブドラフマン．ウイグル音楽の歴史と現在：十二ムカームを中心に．文化遺産のデジタルアーカイブ DSR MUSIC, 2015, http://dsr.nii.ac.jp/music/08uygur.html

筆者が影響を受けた文学作品・芸術作品

・石牟礼道子．苦海浄土：全三部．東京，藤原書店，2016, ISBN9784865780833.
・石牟礼道子．苦海浄土：わが水俣病．新装版，東京，講談社，2004, ISBN4062748150.
・石牟礼道子．石牟礼道子：椿の海の記．東京，日本図書センター，1999, ISBN: 978-4-309-41213-9.
・谷川俊太郎．トロムソコラージュ．東京，新潮文庫，2011, ISBN: 978-4-10-126624-4.
・吉増剛造．怪物君．東京，みすず書房，2016, ISBN: 978-4-622-07986-6.
・朝吹亮二．密室論．東京，七月堂，2017.
・平鹿由希子．集真藍里．東京．思潮社，2022, ISBN: 978-4-7837-3787-2.
・樋口恭介編．異常論文．東京，早川書房，2021, ISBN9784150315009.
・津島佑子．黄金の夢の歌．東京，講談社，2013, ISBN9784062777285.
・中島敦．山月記・李陵．東京，岩波文庫，1994/7/18, ISBN: 9784003114513.
・Arendt, Hannah, 志水速雄．人間の条件．東京，筑摩書房，1994, ISBN4480081569.
・Marx, Karl, 岡崎次郎．資本論．東京，大月書店，1972, ISBN9784272802517.
・Foucault, Michel, 田村俶．監獄の誕生：監視と処罰．新装版，東京，新潮社，2020, ISBN9784105067090.
・Wacquant, Loïc J. D. 著，田中研之輔訳．ボディ＆ソウル：ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー．東京，新曜社，2013, ISBN9784788513198.
・古川日出男 原作．野木亜紀子 脚本．湯浅政明 監督．犬王．東京，サイエンス SARU, 2022.
・公益財団法人アイヌ民族文化財団．６０のゆりかご　アイヌ語音声．YouTube. 2013/5/15.

・Miyuki Sato & Agatha. やんれぶし　すずきもんど　しらいとくどき . おんど -Goshu-Ondo EP01, 2019.

・朝倉さや . Mr.Mamurogawa（真室川音頭 Future Trax）. Mr.Mamurogawa Remixes - Single. 2020.

筆者が影響を受けた現代詩作品（授業内発表作品）

・原田智広 . 万奠のソラヲト系 . 2023

・原田智広 . 輪愛星 . 2024

・草野恭子 . かたつむりのじかん . 2022

・花房歩夢 . 添い寝クラブ . 2023

・中山雄太 . 風がない . 2021

・高田丈 . 偽装温泉物語 . 2022.

石牟礼道子に関する参考文献

・茶園 梨加, 研究動向　石牟礼道子, 昭和文学研究, 2013, 67 巻, p. 71-74, 公開日 2022/11/19, Online ISSN [2436-1526](tel:2436-1526), Print ISSN [0388-3884](tel:0388-3884), https://doi.org/10.50863/showabungaku.67.0_71, https://www.jstage.jst.go.jp/article/showabungaku/67/0/67_71/_article/-char/ja

・林 宜蓁,『苦海浄土』における病者の表象――「五月」における「ゆき女」の描写を中心に, 京都芸術大学大学院紀要 /Journal of Kyoto University of the Arts Graduate School,（3）,94-103（2022-11-10）,https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=392&item_no=1&page_id=13&block_id=61

・石牟礼道子,［インタビュー］水俣病事件を超えて―「魂の位の高き人々」の祈り, 公衆衛生, 2003, 67 巻, 11 号, p. 881-886, https://doi.org/10.11477/mf.1401100976

・松本昭彦, 石牟礼道子の降り立つ「書く」境位―乳幼児期の世界と「言葉」忌避の意味―, 三重大学教育学部研究紀要　自然科学・

人文科学・社会科学・教育科学・教育実践 = Bulletin of the Faculty of Education, Mie University. Natural Science, Humanities, Social Science, Education, Educational Practice, 2022, 73巻, p. 62-74.
・烏谷昌幸, 水俣病事件と『苦海浄土』の世界：シンボルとしての「石牟礼道子」研究のための覚書, メディア・コミュニケーション：慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, 2021, No.71, p. 15-25, 公開日 2021/03, URL https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11218 24X-20210300-0015
・早川敦子, 越境する「命」の神話ー石牟礼道子と飜訳の不／可能性ー, 津田塾大学紀要 = Journal of Tsuda University ,2019/03/20, 51: 21–52. URL https://tsuda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=212&item_no=1&page_id=13&block_id=41
・中村剛, 社会福祉学における詩の可能性 ー メビウスの輪としての詩, 関西福祉大学研究紀要 = The journal of Kansai University of Social Welfare. 2023, vol. 26, p. 49–56. URL https://kusw.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=777&item_no=1&page_id=24&block_id=42
・寺下浩徳, 社会運動と文学表現の接点 社会運動と文学表現の接点ー石牟礼道子『苦海浮土ー わが水俣病』をとおしてー, 차세대 인문사회연구, 2006, 2号, p. 401-413, URL https://kiss-kstudy-com.kras.lib.keio.ac.jp/Detail/Ar?key=3001443
・伊藤洋典, 村的共同体論の本質と意義：谷川雁と石牟礼道子, 熊本法学 = Kumamoto law review. 2022, vol. 154, p. 87–114. URL https://kumadai-repo-nii-ac-jp.kras.lib.keio.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=34372&item_no=1&page_id=13&block_id=21
・若松英輔, 常世の花 石牟礼道子, 亜紀書房, 2018
・若松英輔, 詩と出会う 詩と生きる, NHK出版, 2019
・若松英輔, NHK「100分de名著」ブックス 石牟礼道子 苦海浄土―悲しみのなかの真実, NHK出版, 2019
・渡辺京二, もう一つのこの世―石牟礼道子の宇宙, 弦書房, 2013年
・渡辺京二, 預言の哀しみ―石牟礼道子の宇宙＝, 弦書房, 2018年

・岩岡中正（編）, 石牟礼道子の世界, 弦書房, 2006 年

・岩岡 中正, 共同性のパラダイム転換：石牟礼道子と共同性の回復, 熊本法学, 2000, 97 巻, p. 1-28, 公開日 2000/06/30, Print ISSN 0452-8204, URL https://kumadai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=17363&item_no=1&page_id=13&block_id=21

・菅 龍一, 石牟礼道子　著―苦海浄土―わが水俣病, 看護教育, 1971, vol. 12, no. 6, p. 23–26, URL https://webview-isho-jp.kras.lib.keio.ac.jp/openurl?rft_id=info:doi/10.11477/mf.1663906473&rft.genre=article

・森下直紀. シンポジウム「石牟礼道子の文学世界と水俣病」記録. 和光経済 = Wako Keizai. 2022, vol. 54, no. 2.3, p. 99–116. URL https://wako.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4948&item_no=1&page_id=13&block_id=55

・浅野 麗, 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』への道：「水俣湾漁民のルポルタージュ奇病」から「海と空のあいだに 坂上ゆきのきき書より」への改稿をめぐる検証と考察, 敍説. 3：文学批評, 2013, 10号, p. 12-38, 公開日 2013/09, Print ISSN 13437542, URL https://cir.nii.ac.jp/crid/1520854805655618304

・宇野田尚哉,「サークルの時代」を読む：戦後文化運動研究への招待, 東京, 影書房, 2016

・水溜真由美,「サークル村」と森崎和江：交流と連帯のヴィジョン, ナカニシヤ出版, 2013 年

・木原滋哉, 対抗的公共圏の構想と実践―「サークル村」から大正闘争へ, 呉高等工業専門学校研究報告第六十八号, 2006 年

・新木安利, サークル村の磁場, 海鳥社, 2011 年

・NHK, プロデューサーAのおもわく。9月の名著：苦海浄土, NHK100分de名著, 閲覧日 2023/06/14, https://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/58_kukai/index.html

・BOOKウォッチ編集部, 石牟礼さんのスピーチに会場が凍り付いた, BOOKウォッチ, 公開日 2018/2/10, https://books.j-cast.com/2018/02/10006917.html

あとがき

本書の裏の主題は、自己を通じて他者の言葉を話すための方法と理論を模索する、というものである。そのために、相手に成ろうとしてみたり、自分を喩えてみたり、相手の言葉をそのまま書き取ってみたり、書かれた文字を音読してみたり、相手の起源を探ったり、自分のしていることを論理立てたり、さまざまな試行錯誤を行った。そして、第6詩の末に、ようやく〈虹式〉という方法、〈飜〉〈訳〉という理論を提示できた。

〈虹式〉が晴らそうとしたのは、第1詩から第6詩まで全編通じて悩ましかった、「美しい母国語」や「綺麗な言葉」といった標語（イデア）への執着的な懐疑心と、聞き書きの悉くに覆い被さってくる惨烈な現実への暗澹たる思いである。星、雨、虹、海、砂、糸、舟といったいくつかの象徴的な言葉は、比喩の役割、詩的世界や理論世界で象を結ぶための役割、この聞き書き中で用いることができない特定の禁忌語の代名詞の役割を果たした。「連綿と織られてきた永い布を読み解きたい」。「海に涙を流して星に糸雨を降らせたい」。でも「消失の星辰に脅かされたくはない」。なぜなら、そうなってしまえば「雨は降らず、草は枯れ、舟は朽ちてばらばら。夜は笑わず、河が濁り、源辿れず、ラクダは血まみれ」。そんなときにも「朽ちてばらばらになってしまった屑のかけらが、糸雨のように星に降りそそぎ、それらを縒って編みあげれば、虹のようにかがやくだろう」。相手の言葉を話すために、わたしはまず、まなざす心得を持とうとした。聞き書きをすすめていくうちに、暗雲に切れ目がさすように、だんだんと「太（あか）るく陽（まぶ）しいもの」が見えてくる。その果てに、「虹」が第6詩の末端へ蘇ってくる。不思議なことに、この発想は実際に詩を書いてみるまで浮かびあがってこなかった。詩を書いてはじめて、心が晴らされていく。詩を書くことが、わからないものとわからないもののあいだに一筋のつながりを導いた。虹、にじ、二次。ウイグルの詩人たちが言葉を話し、サリナさんがその詩人たちの言葉を話し、わたしはサリナさんを話しながらサリナさんが話した話しを話す、この二次的な「自己を通じて他者の言葉を話す」構造も〈虹式〉の言葉にかかっている。

〈飜〉〈訳〉にはそれぞれ、飜る（めくる）、飜ぶ（とぶ）、飜る（かえる）、飜る（いきかえる）、訳す（はなす）、訳する（言葉の意味を考えて説明する）といった振り仮名をつけて、その漢字に与えたい意味を考えた。「翻訳」という尊敬する研究領域（discipline）において自分の非力さがぬぐえなかったこと、ホンヤクという音の響きが自分のなかで意味を結ばなかったこと、主にこの二つの理由から、「飜訳」への自分なりの納得の仕方を探ったのである。第6詩において、〈飜〉は「どうして生きていくのかがわからなくなる日に」他者を「わたしのなかに生き返らせる」ために行うことだと書き、飜っておのれを見つめるために筆をとるのだと考えるに至った。同じ第6詩で〈訳〉は、このように理論立てながら実験してきた飜訳の試行錯誤・方法論・理論そのすべての仕組みをがんばって説明していくことだと述べた。

飜、訳、のみならず本文中では、直す、繕る、寄る、成る、返る、反すといった言葉たちに掛詞的に重層の意味を与えて用いている。どれも、納得のための、一時停止（リフレイン）・繰り返しとして、執筆のためにかかせない掛詞であった。わたしたちはなぜ話すのか、なぜ書くのか。なにを話すのか。なにを書くのか。そのひとつの答えが、「わたしたちはどうして生きていくかわからなくなる日に、他者のことばをすくいとって、繰り返して、自分の中に生き返らせている」という考えである。第0詩で「わたしたちは必然的に他者と共に生きている。それは、口々に異なる言葉を語りながら、しかし必ずその言葉を分かち合っているということである。」と過去のわたしの言葉を引用した。その通り、わたしたち人間は、必ず複数いる。複数の生があるから、言葉がある。言葉に複性が宿る。あらゆる言葉は他者の言葉の引用である……　わたしたちは、誰かの言葉を話している。誰。誰の？　その言葉の先に誰かがいる。ここに気をつけないと、わたしたちは、「自己を通じて他者の言葉を話す」ふりをして、自己の言葉で他者を覆い隠すことになってしまう。紛れもない暴力である。言葉遊びもまた、時に現実を覆い隠す。だから、「上手に生き（い）飜（かえ）すこつはよく聞くこと、よく聞いて、よく思い出して、よく考えて、糸をたぐる、たぐりよる、たぐりよる先に、あなたがいる、わたしがいる」のである。